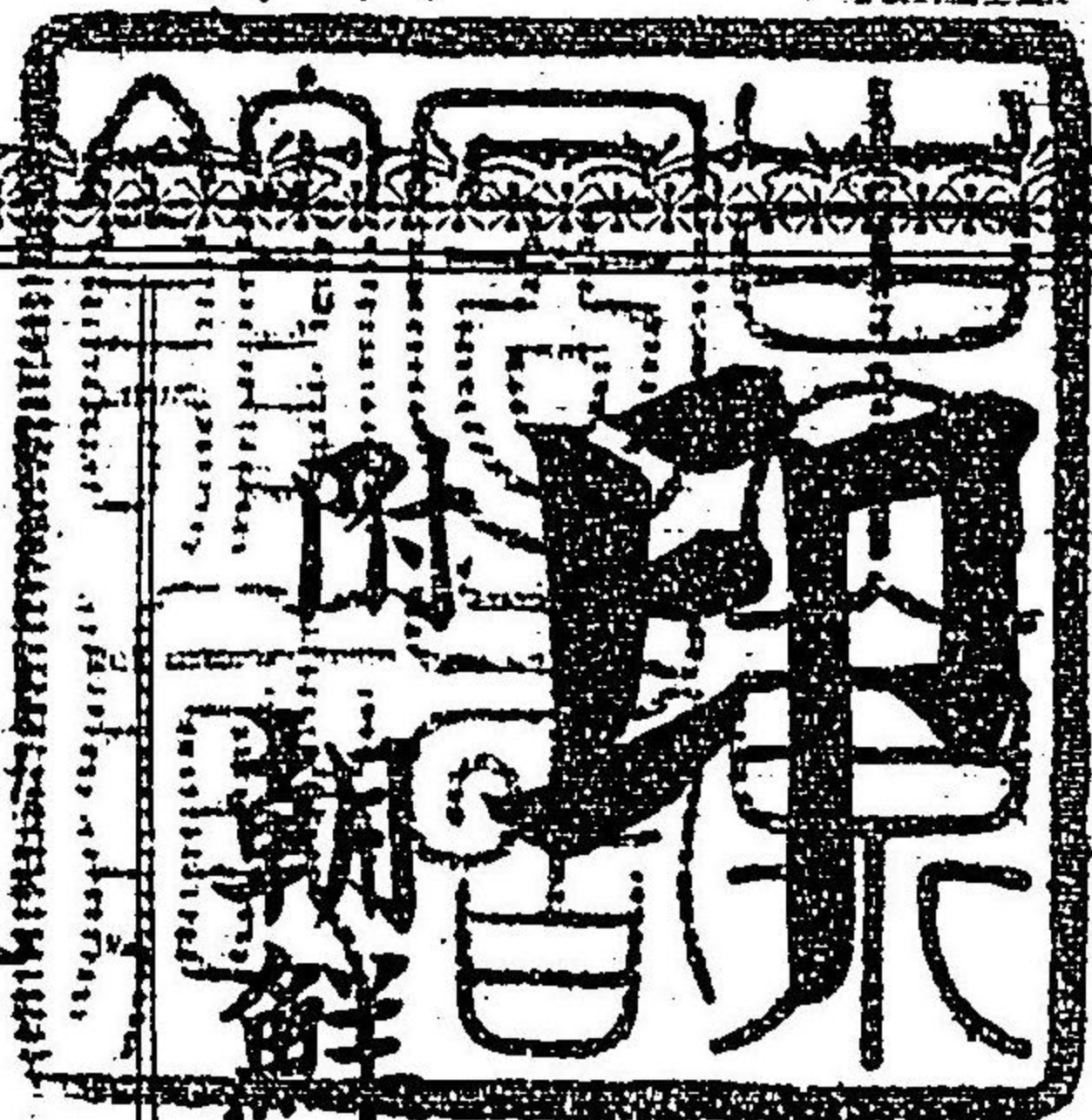


17-235
No 62/
23



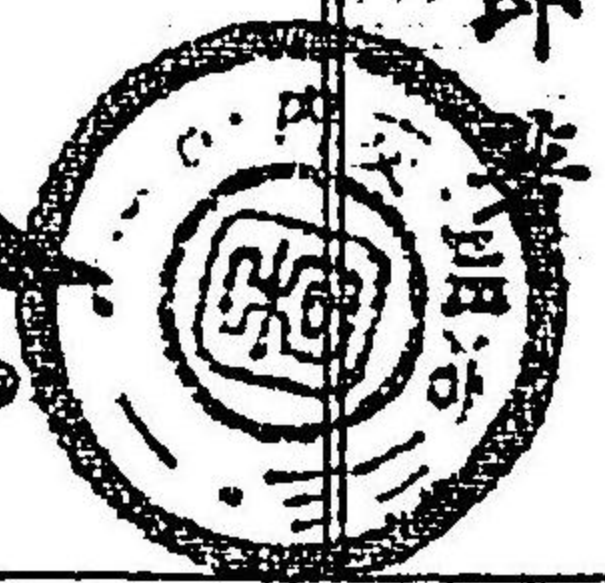
樞密顧問官正三位子爵島尾小彌太公題辭
大藏省主計局次長深江順暢君序文
大藏省主稅官小山正武君校閱並批評

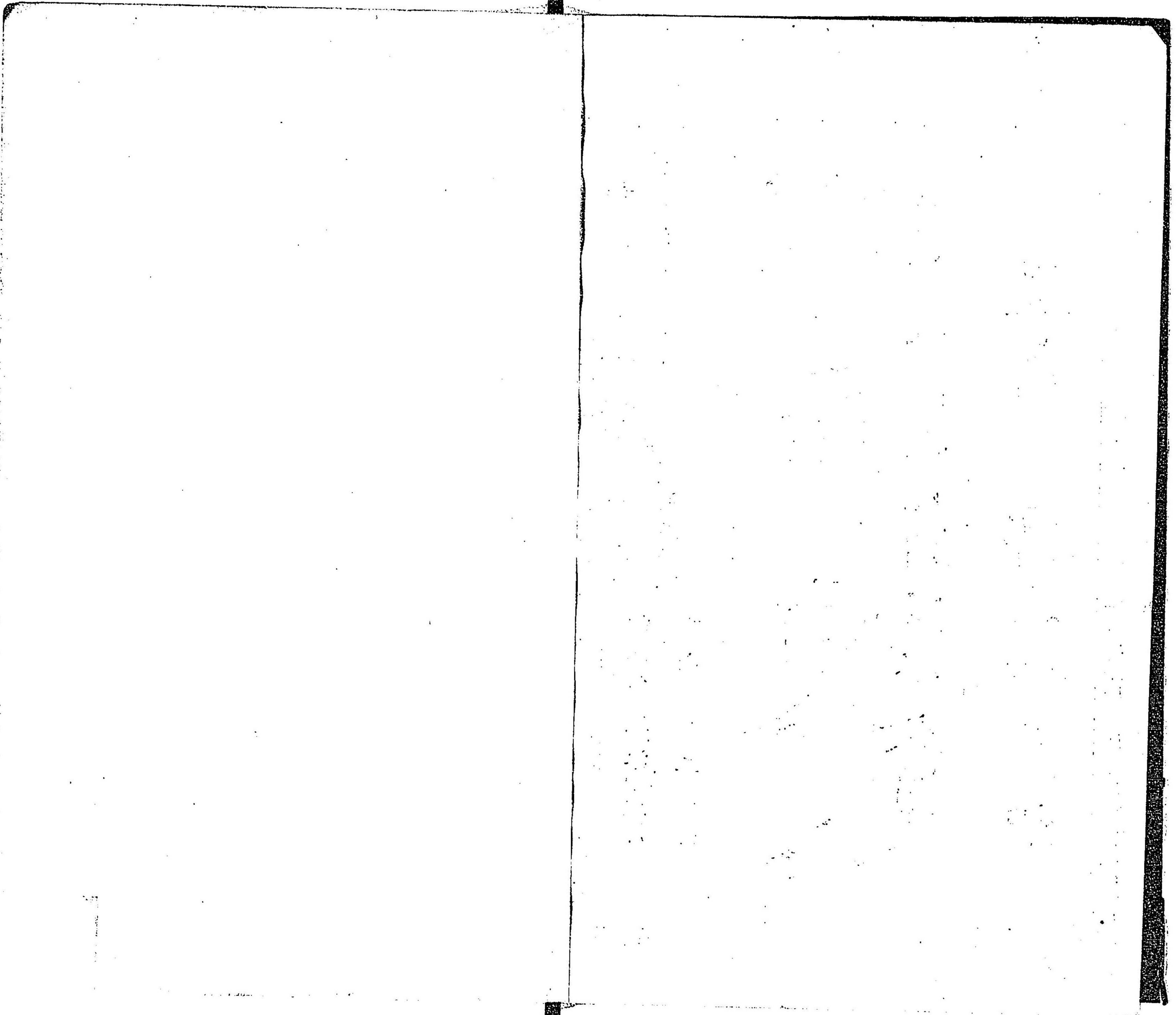
朝鮮名士朴泳孝題辭
紫山北村三郎

東亞 度史 全

朝鮮
安南 緬甸 暹羅 各國史

東京
博文館藏版







讀書還使我
憂深慷慨吟
存錢石心清瘦
沉時掩墨卷

羅素思在左

本會

明以廿二日為探的餐
山北即君書在印之史
卷首得奉



御世之鑑
是非之判

無心有心
因色而現
心

已丑之冬朴泳孝書



印度史序

物徂徠作詩，惜豐公征韓之師，不直渡鴨綠江，古賀侗
菴亦謂當時西南諸國，如呂宋、爪哇等，脆弱易與，以豐
公百戰之餘威，舍韓取之，易於疾風掃枯，嗟乎二子所
見卓々如此，余恨不使二子出於文祿之際，持是論而
說豐公耳。吾友北村紫山，爲人倜儻，有大志，嚮編支那
國史，今又著此書，以詳其興敗治忽之所由，顧紫山亦
非有感于此也歟。或曰：支那與印度，國勢強盛，非復曩
日比。今而論之，猶獸去注矢，竟何益。余以爲不然。宇內
廣矣，豈無展志之地，且盛者必衰，豈無可乘之機，則枋

國者、以此書爲經世寶典、亦莫不可、烏得謂無益耶、但至大才英畧如豐公其人者、當於何日見乎、姑書以問之紫山、

帆 崖 深江順暢撰

萬國歷史全書第四篇 印度及亞細亞小國史

例言

米峯曰徵之識者之說英國朝廷之失印度則應非遠雖然至諸克路撒遜人種之剛毅堅忍不屈則未減焉故其占領印度霸權根抵猶頑鞏固未遽顛覆也必矣云云果然否

一 印度ハ、古來ヨリ政治的ノ歴史トシテハ、大ニ觀ルベキモノナシト謂フモ可ナリ、然レモ其國土ハ、無盡藏ノ富源アリ、其哲學ハ、世界未開ノ時ニ當リテ、(アリ)私特德爾以前已ニ玄妙精微ノ光彩ヲ發シタリ、其宗教ハ、孔子及ヒ耶蘇馬哈默德以前ニ於テ、廣大無邊ノ英靈ヲ顯ハシタリ、之ヲ切言スレハ、歐洲ノ哲學及宗教ノ本源ハ、先ツ印度ニ發シタリト謂フモ亦過言ニ非ザルベシ、

一 今日ノ印度ハ、亡國ノ地位ニアリ、英國ノ所屬タルニ過キズト雖モ、將來ノ印度ハ、其運命未定ノ問題ニ屬ス、他ノ歐洲人ガ之ヲ占領スルニ至ルベキ乎、印度ノ人民果シテ克ク自ラ獨立スルニ至ルベキ乎、其如何ハ、之ヲ今日ニ豫言スベキニ非ズ、然レモ英國朝廷ガ印度ヲ失ハントスルノ兆候アルハ、識者ノ豫測シテ疑ハザル所ナリ、然ラハ則チ印

度ノ歴史地勢及風俗、豈其研究視察ヲ忽ニスベケンヤ、

一 印度ノ歴史ハ、今日ニ於テ完全ナルモノナシ、獨リ之レナキノミナラズ、支那人及ヒ本邦人ニ於テ、未ダ其歴史ヲ編述シタルモノアルヲ見ズ、漢譯佛經、汗牛充棟、管ナラズト雖、其歷史上ノ參考ト爲ルベキモノ、果シテ幾何シアル、且ツ佛經ニハ、往々妄誕人ヲ欺クモノアリテ、妄ニ之ニ據ルベカラズ、本邦人ノ編述シタルモノニハ、唯タ高橋五郎氏ノ印度史アルノミ、氏ノ印度史ハ、僅々タル百頁餘ノ小冊子タルニ過ギサレ、亦以テ霧海ノ南針ト爲スニ足ル著書ハ亦之ヲ以テ參考書ノ一ト爲シタリ、

一 印度史ニ於テ、特ニ卓越シタルモノハ、獨人オルデンブルヒノ著述ナリ、其外英人、佛人ノ著書、モ亦鮮カラズ、又其印度哲學ニ關シテハ、浩濶ナル漢譯經典ハ固ヨリ言フニ及ハズ、歐洲史家ノ論文頗ル多シ、
歐洲ニ於テハ、殊ニ印度論理學ヲ研究スル學士多シ、
本邦人ハ印

度哲學ヲ研究スルモノ、甚タ罕ナリ、但タ我カ畏兄渡邊無邊居士ノ印度哲學小史、簡ニシテ明カニ、約ニシテ備ハル、亦萬綠叢中ノ紅一點タリ、著書ノ參考材料ヲ之レニ資レルモノ、擿ナシト爲サズ、

一 此稿ハ、全ク是レ、著者同志ノ士ト史學研究ノ爲ニ之ヲ筆記シタルモノニシテ、敢テ之ヲ大方ノ君子ニ示サントスルカ爲メニ非ズ、且ツ著者ノ如キ、身ニ寸暇ヲ有セザルモノニアリテハ、完全ナル良史ヲ修ムル、亦容易ナル事ニ非ズ、讀者幸ニ之ヲ恕シテ可ナリ、然レ、印度史全体ノ構思及組成ニ至リテハ、全ク著者一個ノ頭腦ヨリ發シタル、支那帝國史ト同一般ナリト知ルベシ、若シ夫レ完全精緻ノ大著述ハ之ヲ後人ニ俟ツト云フ、

一 又支那帝國及ヒ印度帝國ト相聯繫シテ離ルベカラザルモノハ、朝鮮史ナリ、安南史ナリ、暹羅史ナリ、緬甸史ナリ、此等諸國ノ歴史ノ特ニ支那ト相聯繫スル所ノモノハ、獨リ地勢ノ相接近スルノミニ非ズ、其人

種、國、語、宗、教、文、學、風、俗、習、慣、若、ク、ハ、法、律、美、術、等、ニ、至、ル、マ、テ、大、ニ、支、那、ニ、
 基、キ、——宗、教、ハ、印、度、ニ、基、ク、モ、ノ、多、シ、——支、那、ニ、依、リ、由、テ、以、テ、其、ノ
 國、ノ、存、立、ヲ、得、タ、ル、モ、ノ、ア、ル、ニ、由、ル、故、ニ、昔、時、ニ、ア、リ、テ、ハ、朝、鮮、ハ、實、際、
 支、那、ニ、服、從、シ、タ、リ、——今、日、ハ、曖、昧、中、立、ノ、地、位、ニ、ア、レ、ト、——安、南、ハ、
 支、那、ニ、征、畧、セ、ラ、レ、タ、リ、——今、日、ハ、佛、國、ノ、領、地、ニ、歸、シ、タ、レ、ト、——緬、
 甸、ハ、支、那、ノ、藩、屬、ト、爲、リ、シ、ト、ア、リ、——今、日、ハ、英、國、ノ、有、ト、爲、リ、唯、舊、來、
 ノ、制、儀、ヲ、守、リ、テ、十、年、毎、ニ、支、那、政、府、ニ、朝、貢、使、ヲ、送、ル、ニ、過、ギ、ザ、レ、ト、
 ——暹、羅、モ、亦、支、那、ニ、朝、貢、シ、タ、ル、ト、ア、リ、——今、日、ハ、僅、ニ、獨、立、ノ、体、面、ヲ、
 存、ス、レ、ト、——是、レ、此、等、諸、國、ノ、支、那、ト、相、聯、繫、ス、ル、所、以、ニ、シ、テ、著、者、ノ、
 支、那、帝、國、史、ニ、次、ク、ニ、印、度、朝、鮮、安、南、暹、羅、緬、甸、ノ、小、史、ヲ、以、テ、ス、ル、所、以、
 也、

一安南、緬甸、ハ、已、ニ、亡、國、ノ、域、ニ、陷、リ、テ、今、日、已、ニ、悲、涼、壹、鬱、タ、ル、風、色、ヲ、現、
 ハ、シ、タ、リ、朝、鮮、ハ、日、清、露、英、ノ、相、噬、嗑、ス、ル、十、字、街、頭、ニ、立、テ、リ、暹、羅、ハ、獨、

立、ノ、体、面、ヲ、此、等、亡、國、ノ、間、ニ、保、維、セ、リ、ト、雖、ト、是、レ、モ、亦、動、搖、浮、沈、定、リ、
 ナ、キ、地、位、ニ、在、リ、而、シ、テ、此、等、諸、國、ノ、存、亡、安、危、如、何、ハ、直、接、ニ、支、那、帝、國、
 印、度、帝、國、ノ、勢、力、如、何、ニ、關、繫、セ、ザ、ル、ハ、ナ、シ、是、レ、實、ニ、東、洋、ノ、局、面、ニ、取、
 リ、テ、重、大、ナル、關、繫、ヲ、有、ス、ル、所、以、ニ、シ、テ、支、那、印、度、ノ、國、勢、ニ、注、目、ス、ル、
 モ、ノ、ハ、步、々、相、顧、ミ、テ、眼、光、ヲ、朝、鮮、安、南、暹、羅、緬、甸、ノ、上、ニ、注、カ、ザ、ル、所、以、
 也、

一東洋諸國ノ興廢如何ヲ觀察シ、亦其運命如何ヲ討究スル、是レ獨リ
 政事家、兵畧家ノ任ノミナラズ、活眼史家ノ務ムベキ事ナリトス、然ル
 ニ我國朝鮮ノ人士、往々空文空論ニ汲々トシテ近視淺見、亞細亞ノ大
 陸ニ着眼セズ、試ニ此輩ト一葦水帶ヲ隔テタル朝鮮ノ題目ヲ論スル
 モ概チ守株膠柱ノ見ニ拘ハリ茫乎トシテ定識アルモノ少ナシ、豈慨
 嘆スベキノ至リナラズヤ、著者無似ナリ、何ソ管テ東洋ノ大勢ヲ知ラ
 ンヤ、唯其冀フ所ハ常ニ有爲ノ志士ト共ニ此等ノ問題ヲ講究シテ以

テ東洋ノ爲ニセント欲スルノミ。是レ著者ノ肯テ亞細亞小國史ノ編述ニ從事シタル所以ナリ。」

一蓋シ朝鮮、安南、暹羅、緬甸ノ如キ、其歴史タル、微々タルモノニシテ之ヲ支那、印度ノ歴史ニ比較スレハ猶ホ補助貨ノ本位貨幣ニ於ケルカ如シ、然レモ其地勢ハ、東洋ノ局面ニ緊切ナル關係ヲ有セリ、故ニ東洋ノ人士ニアリテハ、其地理、歴史、風俗、事情、決シテ之ヲ忽視スベカラズ、否平日ニアリテ、其講究ヲ怠ルベカラズ、是ヲ以テ歐洲有爲ノ人士、往々東方ニ遊歴シテ、其形勢ヲ觀察スルモノアリ、英人コルクホーン、スコット、ハレットトノ諸氏ノ如キ、久シク東部亞細亞ニアリテ、専ラ地理風俗ノ探究ニ從事セシ人ナリ、其他露國ノ兵家學士等、往々東洋ニ入りテ、其地理歴史ヲ探究スルモノ頗ル多シ、而モ况ンヤ、吾人東洋コアルモノニシテ、其歴史及ヒ地理、風俗ノ如何ヲ知ラズシテ可ナランヤ、」

一東洋諸國ノ歴史、傳フベキ事蹟アルニモ拘ラズ、今日亡國ノ域ニ陷ル

タルカ爲ニ其濯滅シテ世人ノ知ル所ト爲ラサルモノ、亦勘ナシト爲サズ、蒙古、匈奴、突厥、契丹、金等ノ如キハ、支那史ニ據リテ其一斑ヲ知ルベケレド、中央亞細亞ノ歴史地理ノ如キハ、史家ノ眼中ニ漏レタルニ非ズヤ、苟モ英才博識ノ史家アリテ、政治的、地理的、兵事的ノ眼光ヲ以テ博引、廣證、上下三千年以上ノ精彩色澤ヲ、第十九世紀ノ今日ニ發揮スルモハ、豈啻ニ亞細亞ノ歴史ニ其光輝ヲ生スルノミナランヤ、亦以テ歐洲人ノ膽ヲ破ルニ足ルモノアラソ、著者ハ序テニ此ニ論及シテ、之ヲ後人ニ望ムト云フ。」

一朝鮮ハ我ガ隣國ニシテ其歴史、甚ハタ詳ナラズ、著者ノ材料モ亦本邦人ノ編述ニ資レルモノ多シ、著者、或ハ其考證ノ極メテ疎ナルベキヲ以テ、特ニ友人ニ請ヒテ、之ヲ朴泳孝氏ニ示シ、其是正ヲ求メタルガ故ニ精確ナリト明言スルヲ憚ラズ、但シ其明詳ナルニ至リテハ、後人ヲ俟タザルヲ得ズ、又朴泳孝氏ノ題詞ハ、朝鮮史ニ題シタルモノニシ

テ今マ之ヲ卷首ニ附ス、讀者之ヲ察セヨ

明治廿二年十月

蘆中雪客北村紫山識

印度史目次

卷一

首篇

- 第一章 印度ノ形勢ヲ論ズ
- 第二章 印度ノ地勢畧説

第一篇

上世紀

- 第一章 亞利亞人種ノ侵入
- 第二章 印度ノ種族
- 第三章 日種月種ノ朝
- 第四章 羅摩ノ親征
- 第五章 日種月種ノ戰爭
- 第六章 言語及風俗

目次

- 第七章 婆羅門教
- 第八章 印度哲學——釋迦以前、哲學

卷二

第二篇

中世紀

- 第一章 摩督、法典——釋迦牟尼、時代
- 第二章 外人、侵入及摩竭陀、革命
- 第三章 阿輸迦、仁政及諸朝、興廢
- 第四章 馬毛度、征零
- 第五章 瞿里、侵入及諸朝、興廢
- 第六章 帖木兒、來侵
- 第七章 宗教(其一)
釋迦牟尼、小傳

- 第八章 宗教(其二)

佛教、興廢

- 第九章 宗教(其三)

佛教、傳紹

- 第十章 文學及美術

- 第十一章 貿易

卷三

第三篇

近世紀

- 第一章 婆伯爾、創業
- 第二章 亞克婆爾、政界
- 第三章 莫臥爾朝、衰頹

第四篇

印度覆滅紀

- 第一章 歐亞ノ交通及東印度會社ノ設立
- 第二章 猶普列ノ運動
- 第三章 猶普列ノ敗衄
- 第四章 克雷武ノ征畧(其一)
- 第五章 克雷武ノ征畧(其二)
- 第六章 哈士丁斯ノ征畧(其一)
- 第七章 哈士丁斯ノ征畧(其二)
- 第八章 印度ノ覆滅
- 第九章 印度諸邦ノ位置及英國ノ政治
- 第十章 印度ノ事情(其一)
- 第十一章 印度ノ事情(其二)
- 第十二章 英國ノ苛政

- 第十三章 英國ノ印度ヲ經營シタル政策ヲ論ズ
 - 第十四章 印度ノ貿易ヲ論ズ
 - 第十五章 印度ノ形勢ヲ論ズ
- 外篇 附錄

佛國記

法顯

西域記

惠生

亞細亞小國史

第一篇

朝鮮史

- 第一章 地理畧說
- 第二章 國朝ノ興亡
- 第三章 今王及大院君
- 第四章 金玉均ノ小傳

第五章 朴泳孝ノ小傳

第六章 政治及風俗

第七章 文學

第八章 産業及貿易

第九章 朝鮮ト各國トノ關係

外篇 附錄

觀馮生所藏倭錦袍歌

王志堅

戰場行

僧清虛

第二篇

安南史

第一章 地理畧說

第二章 國朝ノ興亡

第三章 政治風俗及文學

第四章 劉永福ノ畧傳

第五章 安南ト日本トノ關係

第三篇

暹羅史

第一章 國朝ノ興亡

第二章 政治産業及風俗

第三章 兵制

第四章 山田長政ノ小傳

第五章 暹羅ト日本トノ關係

第四篇

緬甸史

第一章 國朝ノ興亡

第二章 緬甸ト英國トノ關係

No 621 / 23

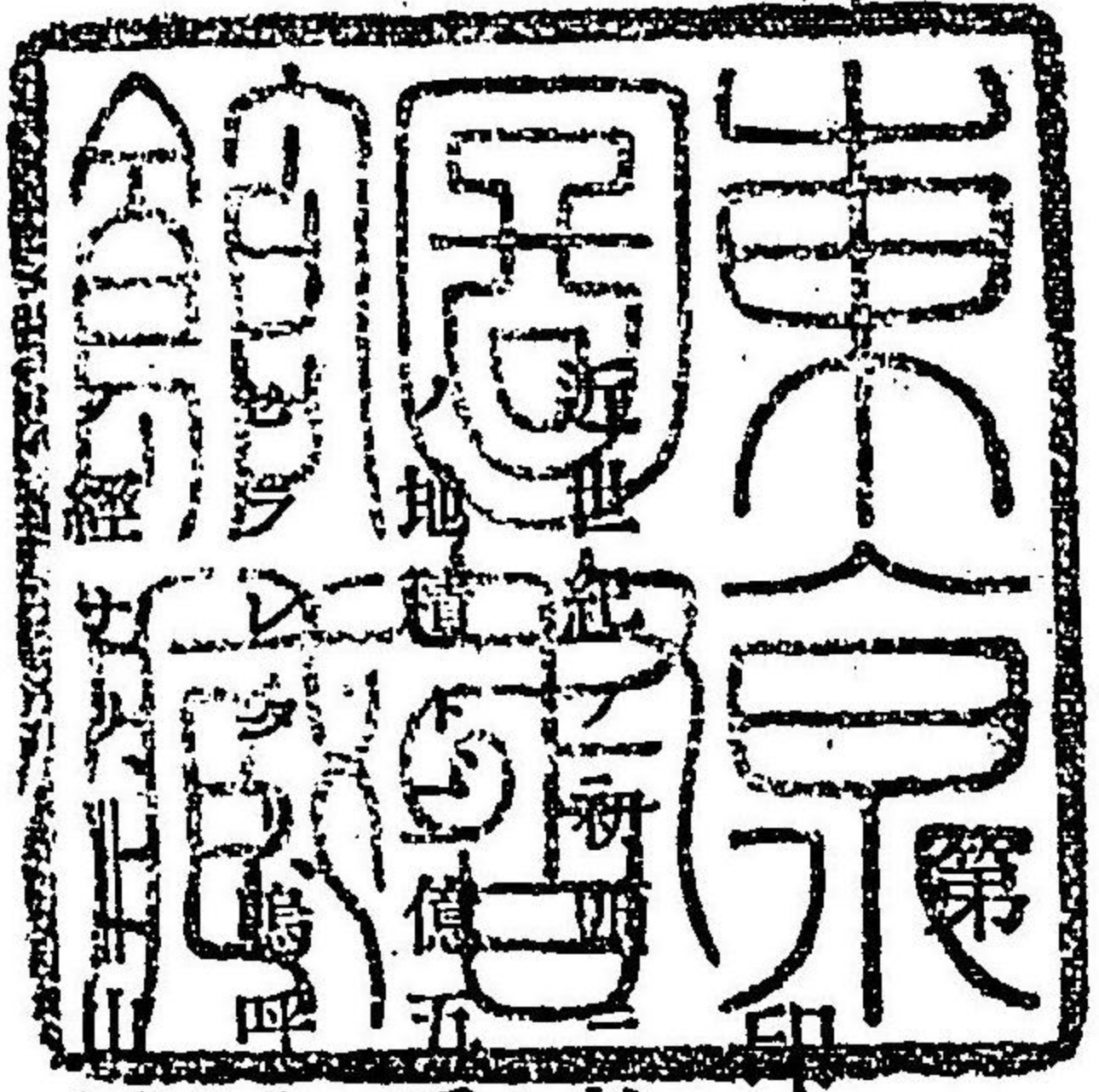
印度史

北村三郎編述

首篇

第一章

印度ノ形勢ヲ論ズ



於テ、亞細亞ノ大邦タル、印度帝國ハ、一百五十五万方里
 地積ニテ、五千萬六百万ノ人口トテ、舉ゲテ、容易ニ英人ノ脚底ニ蹂躪
 麥秀漸々兮、禾黍油々兮 || トハ正ニ是レ此歴史
 河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍 || トハ正ニ是レ此歴史
 史ノ緯ナリ、吾人ハ豈涙墨ヲ把リ來リテ、此歴史ヲ叙スルニ忍ビンヤ、
 野史氏曰ク、印度ノ形勢、今日ヨリ將ニ別ニ一大新局ヲ開ントスルノ氣
 運ヲ幾微ノ間ニ現出セントセリ、吾人ハ今マ之ヲ歐洲識者ノ說ニ徴シ

印度ノ形勢ヲ論ズ

テ之ヲ論セシ、夫レ印度ノ面積タルビスチユラ以西ノ歐洲大陸ト均シク、其人口ノ稠密ナルニ至テハ、ビスチユラ以西ノ歐洲大陸ヨリモ多キヲ三千万以上ナリ、而シテ古代ノ諸邦國ヲ存シ、宏大ナル都府ヲ有シ、文化武備、貴族僧侶ノ制度ヨリ、卓越高尚ナル宗教ニ至ルマデ、世界人類ノ創設シ得ベキ組織ハ、皆秩然トシテ完備セザルハナシ、^{ベンガラ}榜加拉ノ人口ハ、佛國ニ二倍シ、温都斯坦人ト稱セラル、人口ハ、全合衆國ノ白哲人ニ超過シ、^{マラッカ}麻刺加人ハ、西班牙ノ閩境ニ充滿スルニ足リ、^{ポンジャ}ポンジャ領ノ人口ハ、土耳其ノ人口ヲ復スルモノト相同シ、特ニ是レ四大領地ヲ舉ケタルニ過キザルノミ、而シテ爾餘ノ領地モ其概算亦タ之ト類スルモノナキニ非ズ、

東印度ノ人民ハ、其軀幹ノ長大ナルト、氣象ノ勇敢ナルトハ、英人ニ讓ラズ、其健闘奮戰、毫モ死ヲ畏レサルモノニ至リテハ、英人ノ右ニ出ツ、其數殆ンド一億二千万ニ近ク、昔時羅馬帝國ノ最モ至隆至盛ヲ極メタル時

米峯曰、試、回想之、徳川氏之末路、其旗下及親藩之精兵、不下十萬、而俯首屈腰、爲薩長數萬、其兵所制、弱者無他、有萬卒、而欠一將而已矣、印度雖有二百萬之壯丁、堪兵役者、奈其無一將何、噫、

代ノ總人口ト相伯仲セリ、英國ノ兵制ヲ以テ、調發セラレテ政府ニ服役スル土兵ハ、殆ント四十萬ニ上リ、其外ニ軍事ヲ以テ專業トシ、一生ヲ軍役に送ラント志スモノ、少ナクモ二百萬人ニ達スベシ、今マ假リニ日耳曼ノ兵制ヲ東印度ノ地ニ適用セン、平後備民兵、及ヒ平時ニアリテハ、徵集セサルモノヲ除キテ、現役ノ常備軍二百五十萬ヲ備フルト、得ベク、而シテ年々役ニ就クノ新兵ハ、八十萬ニ下ラサルベシト云フ、若シ英雄ノ士アリ、勇將謀士ヲ網羅シ、此ノ如キ大軍ヲ率テ、戰爭ヲ事トセハ、亞細亞ノ大地山河ハ、固ヨリ云フニ及ハズ、馬蹄ノ指ス所、全世界ヲモ蹂躪スルニ足ルベキ也、

又印度ニ於テ、富裕ナル農民ニシテ、其積聚貯蓄ハ、東印度ヲシテ、四隣最富ノ國タラシムルニ堪ヘタルモノ、一千万人ニ瀕シ、之ニ次ク所ノ農民ハ、其數ヲ知ラズ、貧窶ナル農民ト雖、其收入却テ愛爾蘭ノ中農ニ勝レ、^リ工匠ノ數ハ、百万ニ近ク、宮殿ヲ造營スルノ良工ヨリ、空手ヲ以テ土ヲ

博シ、陶器ヲ製造スルノ職工ニ至ルマテ、各々其職業ヲ分テ歐洲ニ存在スルノ職業ハ、大抵東印度ニ存在セザルハナシ、而シテ東印度ハ、歐洲及ヒ他ノ邦國ノ外ニ在リテ國ヲ建テタルモノナレバ、工業ハ國民ノ増加スルニ隨ヒテ繁盛ニ赴キ、自國ノ需用ハ常ニ自國ニテ之ヲ供給スルニ足リ、飲食ノ物品ハ、一切外國ノ輸入ヲ仰カス、白銀ヲ除クノ外ハ、他ニ之ヲ外國ニ待ツ所ナク、外國ノ輸入品ハ單ニ東印度ニ滞在セル白哲人ノ需用ニ充ルニ過キズ、今ヤ活潑壯快ナル生活ノ新潮ハ、彼ノ二億五千人ノ中ニ充溢シテ、彼レ人民ノ勞働、競争希望ヨリ百般ノ行爲等ノ情態ニ至ルマテ、毫モ歐洲人ト異ナルヲナシ、聞クテユイチーペルシヤドト云ヘル東印度ノ一民ハ、其富強時フンシヤブノ領地ヲ征服セシ英國ノ全軍ヲ給養使役スルニ餘リアリト云ヘリ、嗚呼印度ノ境域ノ廣大ナルヲ此ノ如ク人口ノ夥多ナルヲ此ノ如ク、亦其農工ノ繁盛ニシテ國力ノ富裕ナルヲ此ノ如ク、然リ而シテ僅々タル英國ノ官吏ト英國ノ鎮戍兵

富強之家其子多
惰沃土之民不才
印度之不振其病
根蓋亦在于斯歟

トニ制馭セラレ奄々其殘喘ヲ仰キ之レカ奴隸タルヲ甘ニスル者ハ、何ソヤ印度廣シト雖、厄果シテ一人ノ奇傑男子ナキ乎、抑モ亦特殊ノ精神氣象微弱ナル乎、何ソ其ノ衰ヘタルハ甚シキヤ、今マ試ニ歐洲全國ニシテ、東印度ノ如ク茶褐色ノ人民ヲ以テ充滿シタリト假想セヨ、又其人民ノ上ニ立チテ之ヲ管治シ之ヲ保護シ之ヲ稅歛シ、今日ノ所謂ル帝國ナルモノ起リテ之ヲ組織シ之ヲ維持スルモノハ、千五百人ニ充タサル異種異俗ノ外國官吏ナリト假想セヨ、其人民ノ數ハ、羅馬帝國ノ臣民ニ二倍スルモ、之ヲ防衛スル所ノモノハ、羅馬軍隊ノ五分ノ一ニモ足ラザル六万五千ノ外國鎮戍兵ニシテ、瑞典白耳義及ヒ荷蘭ノ常備軍ヨリモ少ナシト假想セヨ、吾人ハ果シテ如何ナル感覺ヲ惹キ起スヘキ乎、今日ノ印度ハ即チ是レナリ、假リニ千五百人ノ英國官吏ヲ黑色人種ニ變セン乎、六万五千人ノ英國鎮戍兵ヲ銅色人種ニ換ヘン乎、印度ノ運命ハ已ニ盡キタリ、絶大ナル東印度ノ建築物ハ已ニ滅セ

茶褐色人ハ永遠進化セサルモノナリ、否進化スベカラザルモノトシテ、存在スルニ過キザルナラン、(英國人ノ推量ニ從ヘハ)而シテ英國ノ官吏ト、鎮戍兵トハ固ヨリ茶褐色人ノ心服ヲ得タルモノニハ非ズ、試ニ英國ノ官吏、鎮戍兵ノ社會ニ立テ入りテ、精細ニ其情態ヲ觀察セヨ、百事皆姑息因循ニ流レテ、更ニ確乎不拔ノ氣風ナク、大守ハ施政五年ニシテ更迭シ、屬吏ノ職ニアルモノハ、久シキモ三十年ヲ出テズ、任期ヲ終ヘタル所ノ官吏ハ、其後任者ヲ贊助誘掖センカ爲ニ、印度ニ遲淹スル者ナク、(一)シフリン侯ノ如キハ、其齡未タ中年ヲ越エザルニ、東印度ニ滯留スル白哲人種中老人ノ老人ト稱セラレタリ、鎮戍兵ハ東印度ニアリテ家室ヲ有セシモノナシ、又東印度ニ於テ、資産ヲ起シタル白哲人種ハ子孫永住ノ爲ニ、家屋ヲ造營シ、土地ヲ買有シタルモノナク、白哲人種ノ農夫技手、職工等ハ、齡尙ホ六旬ニ滿タザルニ皆己ニ東印度ヲ離レテ其隻踪ヲモ殘シ置カズ、管ニ東印度ニ屬スル白哲人種ノ殖民地ヲキ

ノミナラズ、永住ノ見込ヲ有セル白哲人種ハ、幾ノト一人モ之レナク恰モ飄然タル秋來春歸ノ鴻雁ニ異ナルヲナキニ非ズヤ、東印度ノ三大都ニ滯在スル白哲人種ノ數ハ之ヲ合併スルモ彼等ノ自身ヲ保衛スルニ足ラズ、都外ニ散在スルモノハ、政府ノ使役ニ供スルモノヲ除キテ、耕作商估及他ノ職業ニ從事スルモノ、總計ハ倫敦府ニアル黒色人ヨリモ減ゼリ、彼ノベチールスノ如キハ、石造ノ都府ニシテ許多ノ堂塔宮殿ヲ有シ、其佳麗典雅ナルハ、世界ノ耳目ヲ驚カスヘキ程ナレド、曾テ白哲人種ノ其地ニ留マリテ一事ヲ經畫シ、一事ヲ成就セシ者ナク、外國人ニシテ、其地ヲ過キタルモノハ、地方ノ富豪紳士ノ交通往來シテ官署ニ至ルノ外ハ、一切白哲人種ヲ見ルヲナクシテ、一年ヲ亘リタルコトアリト聞ケリ、内地ニ至リ、各都府ニ外郊ニ設置セル停車場ヲ離ルレハ、到處同様ニテ、一箇ノ警吏モ一箇ノ驛夫モ、白哲人種ニ屬スルモノニ遇フヲ能ハザルヲアルベシ、故ニ若シ茶褐色人ガ、勞役ヲ廢スル

一周間ニ涉レハ、内地ニアル所ノ官吏ハ、殆ント飲食ヲ得ルノ途ヲ絶テ
手ヲ束テ官衙ニ蟄居シ、飢渴ヲ待ツノ外アラズ、——曾テ俊敏ナル佛
國人、始メテ東印度ニ到着シ嚮導旁々、英國ノ一小吏ヲ伴ヒ、内地ニ遊歴
セントテ、^{カレ}甲爾加達府ヲ距ル^{カッ}僅ニ十六里ノ地ニ至リ、忽チ小吏ヲ顧ミ
テ、白人種ハ何處ニ住シ居ルヤト問ヒケルニ、小吏ハ笑ヒナカラ、何處ニ
モ住セズト答ヘタリト、此一語ヤ眞ニ其寶ヲ穿チタル言ナリ、
東印度ニ於テ、此ノ如ク、白哲人種ノ移住スル者ナキハ、一ニ氣候ノ永住
ニ適セザルニ歸因スルト云フ者アレ、且、清涼爽快ナル高原丘陵地方ニ
至リテモ、絶テ永住スルモノナク、殊域羈旅ノ情ハ、深ク白哲人種ノ頭腦
ヲ惱マスモノニヤ、年ヲ經ルニ隨ヒ、各々其故國ニ歸ラザルモノナシ、濠
洲旱熱ノ曠原ハ、英國人ニ占領セラレタリ、フロリタ炎熱ノ谿谷ハ、米國
人ニ割據セラレタリ、西班牙人ハ、南北亞米利加熱帶地方ノ優等種屬ト
爲リ、丁抹人ハ、瓜哇ニ蕃殖セリ、然ルニ白哲人種ハ、如何ナル快樂アルコ

モ拘ラス、如何ナル損耗ヲ招クモ、如何ナル金錢名譽ヲ抛ツモ、如何ナル
職業ヲ棄ルモ、東印度ノ地ニ永住スル者ナキハ、是レ其ノ故何ゾヤ、蓋シ
歐洲ニ於テハ、百事悉ク是レ永續世襲及ヒ各個人ノ經驗ト各時代ノ智
能トヲ積聚セルヨリ、發生シ、來ルモノナリ、然ルニ東印度ニ在ル所ノ白
哲人種ハ、全ク此ノ如キ形迹ヲ存セズ、亦之ヲ存スルヲ能ハズ、而シテ彼
ノ土着モセズ、根據モナク、恒心ナク、恒業ナキ、一羣倉卒ノ旅客ガ所謂東
印度帝國ナルモノヲ組織シ維持シテ、立法、行政、司法、等歐洲各國ノ君主
國及ヒ裁判、警察、收稅等ノ諸官カ、其心力ヲ竭シテ、僅カニ之ヲ整理セル
事務ヲ實行シテ、毫モ不満足ヲ感スルヲナキハ、豈咄々タル一大怪事ナ
ラズヤ、
苟モ宇内ニ峙立シテ、邦國ヲ建ツルモノハ、其歐洲タルト、東洋タルトナ
間ハズ、相區劃シテ、境域ヲ分ツ以上ハ、縱令ヒ同一ナル種族ヨリ出デ、
同一ノ宗教ヲ奉シ、同一ノ文明ニ浸濡スルモノト雖、且、決シテ他ノ一方

印度人何以乏特
殊之氣象歟蓋沃
土逸居之弊遂流
而至此也耳

ヨリ其制馭抑壓ヲ甘ニスルヲ能ハザルベシ他ナシ國民特殊ノ精神各々異ナル所アレハナリ左レハ伊太利人ハ埃太利ノ羈轡ニ服セス波蘭人ハ露西亞ノ政令ヲ喜ハズアルサス人ハ其同種族ナル日耳曼政府ニ甘從セス愛爾蘭人ハ英國政府ニ屬スルヲ屑トセス支那人ハ韃靼人ト抗爭シ波斯人ハ亞刺比亞人ト死闘セリ而カモ况ンヤ其遺傳ノ氣象生活ノ思想社交ノ風習等相互ノ間ニ一大鴻溝ヲ劃シタル氷炭モ管ナラザル東印度人ト英國人トニ於テチヤ豈其レ相容レ相忍ブノ理アラシヤ然ルニ彼ノ東印度帝國政府即チ僅々タル英國ノ官吏ガ奇怪ニモ東印度ノ人民ヲ統御シテ其使役ニ供セシムル所以ノモノハ何ソヤ他トシ英國政府ハ東印度人民ノ福祉ヲ増進シ東印度ニ利益スルモノナリト云フニ過ギザルト是レナリ已往百年間英國政府ハ公約及ヒ公債ノ事ニ關シ尊敬スベキ約諾ヲ履行シ東印度人ノ信用ヲ博センヲ勉メ一般ノ平和ヲ維クニ汲々ナリ政府ハ雷ニ四隣ノ寇患ニ對スルノミナ

ラズ内地ノ爭乱ヲモ鎮壓シ最モ勢力アル王侯ト雖モ苟モ其邦域ヲ越エテ軍隊ヲ運轉スレハ數週間ヲ出テズヨテ英國法庭ノ訊問ニ應セザルヲ得ズ最モ驕傲ナル貴族ト雖モ苟モ其愛憎ニ任セテ臣民ヲ殺戮スレハ終身禁錮ノ刑ヲ免ル、一能ハザルベシ英國政府ハ東印度ノ卑賤ナル一小民ヲシテ無辜ノ死ヲ遂ケシメンヨリモ寧ロ内亂戰爭ノ危險ヲ賭スルニ猶豫セズ群盜流賊ノ類モ嚴重ニ之ヲ處分シ其剽掠殺戮ノ禍ハ固ヨリ未ダ其跡ヲ絶ザルニモセヨ之ヲ概言スレハ東印度人ノ生命財產ハ英國政府ノ下ニアリテ稍々安全ニシテ宗教上ノ自由ハ殊ニ其寛大ニ極メタリ然レモ此等ノ政畧ハ果シテ東印度人ガ異種異族ノ英國人ニ對スル慷慨ノ氣象ヲ調和スルニ足ル乎吾人ノ疑ハサルヲ得ル所ナリ、

東印度ノ人民ハ常ニ權勢ハ神ヨリ出タルモノナレハ怨敵タリモ權勢ヲ得タルモノニハ何人タルヲ論セズ之ニ奉事スベシトノ舊說ヲ妄信

セリ、英國政府ハ其權勢ヲ利用シテ、思フカ儘ニ、兵士警吏等ノ小官吏ヲ備ヒ入ル、フナ得ルモ、其權勢タルヤ、確乎不拔ナルニアラザレハ、毫モ恃ムニ足ラス、東印度ノ種族中、最モ有力ニシテ、英國政府ノ丁寧懇篤ナル待遇ヲ蒙リ居ルモノハ、彼ノ斯^ヒ兵ナリ、彼等ハ、其志願ニ由テ、兵役ニ加ハルモノニシテ、隨意ニ兵役ヲ脱スルヲ得ルモノナリ、兵役ニアルノ間タリ、ヒ、彼等ノ同意ヲ經タル後ニ非サレハ、如何ナル場所ニモ派遣移轉セラル、フナ、英國政府ハ豊裕ナル給料ト、養老金トヲ下附シテ、其不平不滿ヲ慰撫シ、又才幹アルモノハ、屢々官職ヲ昇進セシメ、其待遇殆ント駘^ト婦ノ驕兒ヲ鞠育スルニ於ケルカ如キモ、彼等ノ往復書翰中、一トシテ、英人ハ不誠實、不親切ナルヲ痛嘆シテ、東印度ノ恢復再興ヲ以テ言ト爲サ^ルハ、ハナシ、英國ノ指令官ハ、政府ノ主旨ヲ遵奉シテ、注意ニ注意ヲ加ヘ、之ヲ附循獎勵スルモ、更ニ著ルシキ効驗ナク、彼等ハ、常ニ起テ英國ノ指揮官ヲ襲撃シ、時トシテ、其妻兒ヲモ害セリ、彼等カ暴動ノ歴

史ハ東印度革命ノ歴史ナリ、千八百五十七年ノ如キハ、盟約ヲ經テ政府ニ連結セルモノト雖、ヒ、尙ホ依頼スルニ足ラズ、抗爭二年、互ニ敵視スルノ狀ハ、實ニ其慘酷ヲ極メタリキ、爾來幾多ノ歲月ヲ積ミヨレ、ヒ、彼等ノ感情ハ、毫モ昔時ニ異ナルヲナシ、何トナレハ、彼等ハ東印度人民ノ氣象ヲ備フルモノナレハナリ、彼等ノ思想ハ、堅硬ニシテ得テ屈スベカラサルモノナレハナリ、彼等ハ、機ニ臨ミテ、獨立ヲ恢復セント欲スルモノナレハナリ、先年彼ノ氣焰モナク、勢力モナキ特里王朝ヨリ發布シタル宣告ノ如キモ、唯其文ノ東印度ノ復興ニ論及スルヲ以テ、一時全國ヲ風動セシメタルニ非ズヤ、東印度ニ於テ、一朝事アラバ、全國ノ茶褐色人ハ、一人トシテ白哲人種ノ味方ト爲ルモノナカルベシ、而モ况ンヤ、彼等カ生命ヲ抛チテ英國政府ノ土崩瓦解ヲ救フヲ望ムベケンヤ、斯ル危急ニ臨ミテ、英國政府ハ、果シテ、信認ノ防禦ノ衝ニ當ラシムル斯^ヒ兵ヲ有スルカ、都府城壘ノ陷落セントスルニ臨ミテ、英國政府ハ、果シテ茶褐色人

ヲ募集ノ、義勇軍ヲ組織スルヲ得ル乎、此時ニ當リテ、英國政府ハ、果シテ如何ナル運命ヲ保ツベキ乎、東印度ノ農民ハ、租稅負擔ノ過重ナルカ爲ニ、道路ニ彷徨スルモノナキ乎、訴訟判決ノ遲緩ニシテ、失費多キカ爲ニ、慈嘆ヲ抱クモノナキ乎、富豪貴族ノ子弟ノ狡黠無賴ナル、英國ノ狀師ニ欺騙セラレ、財産ヲ喪ヒ、朝夕號泣シテ、白哲人ノ門ヲ叩キ、之レカ憐ヲ乞ヒ、悲憤骨髓ニ徹スルモノナキ乎、——試ニ東印度、古來ノ歴史ヲ緝キテ之ヲ看ヨ、東印度ニ於テ、最モ權勢ヲ極メタル君主シヴァーハ、群盜ヨリ身ヲ起シタルモノニハ非サル乎、パロタニ於テ、王業ヲ創始シタルモノハ、一貧洗フガ如キ、牧畜者ヨリ志ヲ立テタルモノニハ非サル乎、シンヂアニ於テ一王國ヲ建立シタルモノハ、奴僮兒ニハ非ザル乎、第一ニサムハ帝國ノ一小吏タルニ過キザリシモノニハ非ザル乎、賣索爾ノ獨立ノ王冠ヲ戴キタルモノハ、一武夫ヨリ出テタル者ニハ非ザル乎、ラシヂー、ト、サイノ父ハ、一小縣ノ長官タリシモノニハ非ザル乎、此等英豪

奇傑、天ヲ呑ミ地ヲ破ルノ志ヲ抱クモノ、今日ノ印度ト雖モ、二億萬人中、豈斯人ナカラシヤ、

顧フニ、英國ガ東印度ヲ領セシヨリ以來、東印度ノ工藝、教育、文學、建築及ヒ彫刻製等ノ美術、次第ニ消滅シ、所謂ル生活上ノ快樂ナルモノヲモ、併セテ、一掃シ去ラントセリ、然ルニ、生活上ノ快樂、日ニ減スルニ從ヒ、英國人ヲ嫌惡スルノ感情ハ、益々其深キヲ加フルカ如シ、現時東印度人ノ發兌スル所ノ新聞雜誌ハ、數百種ニ上ルモ、其論點ハ、唯暗々裡ニ英國ノ羈軛ヲ脱シ、東印度ノ獨立ヲ勸告スルニアラザルハナシ、東印度人ハ英國人ト婚姻ヲ結フヲ欲セズ、甚シキニ至リテハ、商業上ノ境界ニマテ影響ヲ及ボサントセリ、歐洲流ノ東印度人ハ、無用ナリ、東印度流ノ歐洲人ハ、死人ナリトハ、其實驗ノ語タリ、此ノ如ク氷炭モ管ナラサル兩人種ノ間隙ヲ補ハシカ爲ニ、政府ハ、種々ノ方法ヲ試ミタリシガ、東印度人ハ、自己ノ純潔ナル良心、雄毅ナル氣力ヲ警發スルノ程度ニ準シテ、愈々相

衝突ヲ生シ到底兩種ノ間ニ戰爭ヲ經ザルベカラザルヲ免ルベカラザル數ナリ否必至ノ勢ナリ」

夫レ已ニ英國人ト東印度人トノ間ニ横ハル所ノ一大鴻溝ハ終ニ之ヲ破ルヲ能ハズ早晚其衝突葛藤ヲ生センヲ數ノ免ルベカラサルモノナリトスレハ英國人ノ辛苦經營シテ組織セル此一大帝國ノ破裂ハ亦吾人ノ豫期セザルベカラザル所ナルベシブリンセア氏ハ印度帝國ハ勇悍猛烈ナル亞細亞種族カ不意ニ喜馬拉連峯ノ側面ヨリ内地ニ侵入スルニ由テ覆滅スベシト預言セリ今日韃靼種族亞刺比亞種族波斯種族ノ如キハ其勢力脆弱ニシテ恐ルコト足ラズ支那ハ大國ナレハ北方露國ガ其背ヲ壓スルノ虞アルヲ以テ西藏ヨリ東印度ニ向フノ危策ヲ取ラザルベシ然レハ將來帝國政府ノ恐ルベキモノハ止マ阿富汗ノ境上ニ虎視龍驤セル露國アルヲミ夫レ阿富汗境上ノ一進一退一勝一敗ハ未タ必ズシモ格別ノ影響ヲ東印度ニ及ボスヲ能ハザルガ如クナレハ

阿富汗之於英露
實是兩雄勝敗最
後判決之地先獲
此勝地而據之者
則是將來印度征
服者也

東印度有力ノ人民就中斯跛兵等ノ專ラ心目ヲ注ク所ノモノハ阿富汗ニ於ケル英露ノ勢力ハ消長如何ニアリ故ニ阿富汗ニ於テ英國ガ一領地ヲ失ビ一軍ヲ覆ヘサレタル報知ニ接スルキハ容易ニ東印度全國ノ破裂ヲ引キ起スニ至ルヘシ然レハ英國人ガ東印度人ヲ誘惑シテ露國ヲ嫌惡セシメントスル計謀ヲ運ラスハ最モ巧妙ニシテ至ラザル所ナシ然レハ一旦東印度人ニシテ憤然義氣ヲ激發シテ彼ノ鎮戍兵ヲ盡コスルニ至ラハ英國ハ恐クハ復タ之ヲ奈何トスルヲ能ハザルベシ是レ東印度ニアル英國人ト雖モ亦自ラ確認スル所ナリ斯跛兵ハ常ニ相語テ曰ク——英國人ヲシテ充分ニ文明ノ利器ヲ輸入セシメタル後ニ平和ノ爭ヲ以テ彼等ヲ驅逐スベシ——ト英人曰ク——東印度人カ近來英國官吏ノ地位ヲ取リテ之ニ代ントスルノ勢ハ十五年チ出デヌレテ再々ヒ東印度ヲ彼等ノ手ニ回復スヘキノ見込アリ——ト平和ノ爭トハ果シテ何事ヲ印度廣シト雖モ未タ華盛遜巴寧爾其人ヲ生セザル乎

野史氏曰ク、印度、富源ノ無盡藏ナルヲ、今ヲ距ルヲ千有餘年前ヨリシテ、各國ノ能ク之ヲ了悉セル所ナリ、此間甲仆レ乙起リ、印度ノ統御者幾回トナク變更シタリト雖モ、前世紀ノ末造ニ至ルマデハ、印度ノ主權ヲ占メタリシ者ハ、悉ク是レ亞細亞人ニ非ザルハナカリキ、而シテ近世紀ノ初ニ當テ、黑白氷炭モ亦當ナラザル英人ノ爲ニ征服セラレタリ、然レモ天意別ニ將ニ新局ヲ換ヘントス、紛々タル戰國、漠々タル風雲、海嶽ヲ夷平シ、鯤鵬ヲ變化スルハ、實ニ其人ニアリ、苟モ印度ヨリ、非常奇傑ノ士起テ以テ、全國ヲ統合シ、二億万人ヲ打テ一丸ト做シ、英人ノ腐敗ヲ一掃シ、獨立帝國ヲ建設スルニ非ザレハ、虎視耽々タル者將ニ英人ニ代リテ、其後ヲ繼ントス、是レ必至ノ勢ナリ、印度ノ形勢、其レ將サニ今日ヨリ如何ナル變遷ヲ生セントスル乎、是レ豈獨リ亞細亞大洲ノ變局ノミニ止ンヤ、噫、

獅巖曰、書中有人我、知其心、印度無人、我未知其心、

龍潭曰、印度之獨立、内一大疑題也、講究者在活眼史家焉、今人往々置而不問者何也、此篇論印度形勢、極激淋漓、真似山雨來、欲風滿樓、不知是淚耶、不知是血耶、

第二章

印度ノ地勢畧說

印度全國ノ地勢ハ、亞細亞ノ中央ヨリ起リテ、南海ニ斗出シ、大三角形ヲ爲ス、北ハ喜馬拉亞山ニ倚リ、西ハ阿剌比亞海ニ臨ミ、東ハ榜加拉海ニ枕ミ、北緯八度ヨリ起リテ、三十五度ニ至リ、南北ノ長サ、東西ノ幅、廣キ所ニテ、大約一千九百英里アリ、之ニ加フルニ、榜加拉東岸ナル緬甸ヲ以テスレハ、全面一百五十五万方里ニ内英領八十九万六千方里、獨立國領六十五万四千方里ニ跨リ、人口二億五千六百萬、英領人口一億九

千九百万人、獨立領人口五千七百万人——ナ有ス、故ニ全面ノ地積人口共ニ歐洲全土中ヨリ、露國領ヲ除キタルモノト同シ、又之ヲ我カ日本國ニ比スレハ、土地ハ大約之ニ十倍シ、人口ハ大約之ニ七倍ス、

印度ノ北境ハ、喜馬拉亞山脉ヲ以テ屏障ト爲ス、グレートンチーポルノ獨立國ハ、其山脉ノ南坡ニアリ、西藏ハ、其北ニ聳ヘ、克什米爾ハ其西隅ニ位シ、其西北ノ山脉ハ南ニ走リテ、亞業加斯坦ト分界ヲ爲シ、愈々南ノ伯爾日斯坦ト隔斷ス、印度西境ノ極端ニ「ハブ」河トシテ、其南方ニ斗出スル岬ヲ「モノセ」岬ト曰ク、其西南ハ、即チ阿刺比亞海、印度海是レナリ、

喜馬拉亞山ハ、東北ノ隅角ニ屹立シ、更ニ南ニ一支ヲ出シ、榜加拉ノ東部及ヒ亞桑ト緬甸ノ經界ヲ畫セリ、之ヲ「アハル」又ハ「チーガー」ハ「レル」山ト名ク、此境界中ニ所在ノ地ハ、風景到處同シカラズ、氣候寒暄大ニ異ナリ、北ニハ峻絶ナル山嶺アリ、南ニハ卑濕ナル河口三角地アリ、今マ試ニ風船ニ乗シ、下視スレハ、印度全地ニ三部分界アルヲ知ルベシ、其第一

部チ喜馬拉亞山ニ接スル地方ト爲シ、其第二部チ山麓ヨリ南方ナル大河ノ間ニ横ハル一大平地ト爲シ、其第三部チ大平野ヨリ南方ニ當リ「ウ」チンヂーヤ山以南、東西ノ山脈ヲ左右ニ帶ビ、「コモリ」岬ニ至ル三角形ノ高原ト爲ス、

第一部喜馬拉亞山地方、喜馬拉亞山ノ名義ヲ釋スルニ、「ヒマ」トハ、梵語ノ冬氷、即チ雪塊ノ義ニシテ、「ラヤ」トハ家ト謂フ義ナリト云フ、即チ雪山雪屋ナリト云フ、此山ハ地球上最大ノ山脈ニ非ズト雖モ、其高度ニ至リテハ、世界第一ニシテ、印度ノ北境ニ聳立シ、彎形ヲ爲シ、南方ニ面シテ一千五百英里ノ間ニ蜿蜒セリ、西藏ノ「ツアンプー」河、亞桑ノ「プラマプトラ」河ハ其東北隅ノ脈路ヲ貫キテ流レ、身毒河ハ其西北ノ方ニ繞リテ南流シ、アンジャブ洲ニ通ス、喜馬拉亞山ハ、崑崙山ト連リ、甲ハ南ニ横ハリ、乙ハ北ニ連リ、内ニ西藏ノ平地ヲ包括シ、而シテ喜馬拉亞山ハ、印度地方ヨリモ尙遙ニ東西ニ走リ、其長カ凡ソ千七百五十英里ニ亘リ、其南北ノ幅二百

五十里ニ至ル、喜馬拉亞山ハ複嶺ニテ、其南方ノ一系ハ印度ニ枕ミ、高サ二万尺アリ、全系中最モ高キ絶頂ハ、二万九千尺ニ達シ、四時氷雪ノ消スル時ナシ、實ニ世界中無二ノ峻嶺ナリ、サトレトシ、河、身毒河、ツアソア、河ノ如キ大流、皆源ニ此ニ發セリ、

喜馬拉亞山西北ノ一支ハ、南ニ蟠リテ海邊ニ達ス、セイフド、コー山、スマイマン山、ハ、ラ山ハ、最モ其著ルシキモノトス、而シテ其最モ高キモノハ海面ニ拔ク、一萬一千尺餘アリ、此山脈中、一二ノ隙アリ、彼ノ身毒河ノ如キハ、此隙中ニ通シテ流ル、モノナリ、其近隣ニカイバル、陝道其南ニシラム、陝道、グラロリ、陝道、ポ、ラン、陝道等アリ、印度ト亞業加斯坦トノ通路ヲ爲ス、

喜馬拉亞山ハ、印度北方ノ屏障ト爲リ、又南方平地ニ注シ、水流ノ源頭トス、夏、日ノ間、南洋ノ水、蒸騰シ、定時風ニ吹蕩セテ、北ニ馳セ、喜馬拉亞連山ニ來リ、以テ霖雨ヲ降ス、其雨水ノ夥シキ、地上無二ニシテ、以テ身

毒河ノ水源ヲ養フ、喜馬拉亞山ノ南坡ハ、此雨水ヲ受ケテ、膏腴ノ田圃ヲ爲スト、雖、亦洪水ノ爲ニ地面ヲ洗ヒ去ラレ、荒蕪ニ至ラシムルヲ免レス、

喜馬拉亞山ノ温度ハ、其上ル、一千尺毎ニ、華氏寒暖計ニテ三度ト三分一ヲ減ス、今マ、人アリ、印度ノ平地ヨリ、此山嶺ニ登ル、草木ノ發生ニ關シテ、熱帶、温帶、寒帶ノ三界アルヲ知ルベシ、其平地ニハ、莽叢沼澤多ク、野蕃人種、野禽猛獸ノ住所ヲ爲ス、山中ニハ、薇蕨繁茂シ、石楠森林ヲ爲シ、綠竹翠葉ヲ垂レ、松柏、杉、栗、胡桃、楓樹、東西ニ連リ、春ハ新芽ヲ抽キ、秋ハ紅葉ヲ染メ、其樹幹ニハ、莓苔滋生ス、喜馬拉亞山麓ノ住民ハ、大麥、燕麥、稷粟ヲ播植シ、近年蕃薯ヲモ作ル、騶シ、山民、鋤犁牛馬ヲ用ユルヲ知ラズ、樹幹ヲ燒キ、丘陵上ニ梯田ヲ作り、墜ツル所ノ樹皮樹葉相重ナリ、樹身或ハ匾レ、或ハ枯レテ蕃薯繁生ス、一二年ヲ經ルニ隨ヒテ、地味枯槁スレハ、更ニ新地ヲ覓メテ耕耘ヲ爲ス、

喜馬拉亞山ノ側、溪谷ノ間、水利ニ富々ノ地ニ米ヲ生ス、山民ハ、山側ニ溝渠ヲ通シテ遠ク水流ヲ引キ、畝畝ニ漑キ、或ハ水車ヲ用ヒテ穀物ヲ磨碎ス、喜馬拉亞山ハ、木材木炭ヲ出ス、甚々多ク、馬並ニ騾馬牛羊ヲ産ス、其牝牛ノ尾ハ、西洋ニ販賣シテ、織物ヲ製スルニ用ユ、山民ノ婦女ハ、農務ニ刻苦シ、松薪ヲ負ヒ、穀類ヲ籠ニ盛リテ遠方ニ運輸ス、羊ハ礪砂ヲ負ヒ、山下ノ市ニ出テ其毛ヲモ賣テ、米鹽ニ換ヘテ歸來ス、山中ノ禽獸ハ、麝香、山羊、熊豹、狐、鷲、雉、竹鷄等ナリ、喜馬拉亞山住民ノ言語ヲ以テ考フレハ、亞利亞人種、チユレン人種、即チ蒙古人種、ノ經界ニテ兩人種相混スルモノ亦少カラズ、印度國中、喜馬拉亞山ヨリ流れ出ル水ヲ以テ灌漑スル部分最モ廣シ、東ハ榜加拉灣ヨリ西ハ阿富汗國境及ビ亞刺比亞海ニ至ルノ地ニシテ、人口最モ廣ク、地味最モ美ナル處ナリ、古代ヨリ印度ニ入寇セシモノハ、東北、或ハ西北ノ山嶺ヲ踰エ來リ、每次河流ニ隨テ下リ、後ナルモノハ先ナルモノヲ南方ニ逐ヒ自ラ代テ河邊ニ住ス、今マ榜加

拉、亞桑、澳度、プンシヤブ、シンド等ニ住ムモノ凡ソ一億五千人ナリ、第二部、平地北印度ノ曠原ニ流ル、大河三派アリ、曰ク身毒河曰クブラマトラ河曰ク恒河(一名安日河)是レナリ、身毒河ハ「サトレヂ」河ト共ニ喜馬拉亞山ヨリ出テ、カシミルノ西北ナルイスカルドノ深峽ヲ貫キ、プンシヤブ州、シンド州ヲ經テ、西南ニ注キテ海ニ入ル、其長サ一千八百英里餘アリ、喜馬拉亞山中ニ流ル、部ハ、凡ソ八百英里、英領中ニ通スル、一千里ナリ、ブラマトラ河モ亦喜馬拉亞山ノ後ナル西藏ノ山中ヨリ生シ、其水源ハ身毒河「サトレヂ」河ノ水源ニ近キ地ニアリ、然レモ其流勢ハ、東ニ走リ、喜馬拉亞山ノ東端ヲ貫キ、亞桑ニ入り、ブラマトラノ名ヲ得、遂ニ榜加拉ノ東部ニ流ル、——恒河ハ喜馬拉亞山ノ南側ヨリ落ツル衆水ノ合流スルモノナリ、故ニ印度ノ平原ハ、皆喜馬拉亞連峯ノ雨水ヲ以テ灌漑スルモノト謂フモ可ナリ、此連山ノ上ニ志牟拉アリ、是レ夏日印度政府ノ所在ニテ、即チ身毒河、恒河ノ兩源分水嶺ヲ爲シ、西ナル者ハ流

レテ亞刺比亞海ニ入り、東ナルモノハ、下リテ榜加拉灣ニ注ク、プラマア
 トラ河ハ、ケイラス山中ノ靈湖ヨリ出テ、西藏ニテハ、之ヲツアンブー河
 ト名ク、溪間ヲ東流シ、其首府ナル、ラーサノ南方ヲ過ク、其長サ凡ソ八百
 里アリ、次ニ喜馬拉山東方ノ澗流ト相合シテ英領ニ入り、後チ之ヲプラ
 マプトラ^一、プラマ^二ノ男ト謂フ義ナリト云フ^一ト稱ス、亞桑ノ地ヲ
 西南ニ流ル、^一大約四百五十里ニシテ、南ニ向ヒ、平地上ヲ過クル^一百
 八十里ニテ三角地ニ達シ、恒河ニ合シテ海ニ走ル、プラ^一マプトラ^一ハ榜
 加拉ト亞桑トノ間ノ大通路ニシテ、舟楫ノ便利甚ク多ク、其ノ本流中河
 口ヨリ蒸氣船ヲ以テ溯ルヘキ部八百里ト爲ス、船舸ノ積荷ハ茶、^一其
 價凡ソ百五十万磅^一、木材、カウチニク、木綿、苧麻、菜種、煙草、米等ナリ、又
 甲爾加達ヨリ運輸スルモノハ、洋製ノ布匹、鹽、鏡器ナリ、
 恒河ハ、喜馬拉山ノ麓、高サ一万三千八百尺ノ雪洞中ヨリ起リ、一千五百
 五十里ノ地ヲ貫通シテ、其末支條ニ分派シテ、海ニ入ル、本流ハ北ニ大山

アリ、南ハウヰンヂローヤ山ヲ限リ、中央ノ平原ニ連リ、四十万里ノ地ヲ包
 括ス、古今印度全域ノ開化ヲ誘導セシ要路ナリ、恒河ノ濱ハ上流ヨリ下
 流ニ至ルマテ、皆靈地ト稱シテ、土人到處之ヲ尊崇セザルハナシ、殊ニ其
 ノニ支ナル^一茹牟那^二河ト合流スル亞刺幡^三拔土^四ノ一沙角ハ、プラヤダ^一ト稱
 シ温都信徒數十万人ノ巡拜シ來リテ靈水ヲ以テ其罪ヲ洗淨スルノ地
 ナリ、中央及ヒ南方ノ河流モ、皆地下ニテ恒河ト交通スルモノト思惟シ
 均ソシ其聖澤ヲ仰カザルハナシ、故ニ古諺ニ曰ク^一恒河ハ、喜馬拉亞
 王^二ヒマウア^三神及メナカ^四后ノ美女ニテ罪障多キ土地ヲ洗淨スルカ爲ニ
 流ル、者ナリ^一ト又ナルハ、^一河邊ニ棲ム所ノ婆羅門徒ノ言ニ曰ク
 此罪業深キ世界ニテハ、聖徳ナル恒河モ、此汗濁ノ河ヲ退キ去リテ地下
 ヨリ源流ニ還ルベシ^一ト恒河ノ口ニサガルト稱スル一嶋アリ、年々
 巡拜ノ旅客群集シ、其ノ河流此ニ至リテ、幾支流ニ分レ、榜加拉ノ三角地
 ナ生スルハ土人衆生ノ罪障ヲ洗ヒ盡サンカ爲メナリト稱シ、禮拜ヲ行

フモノナリ、恒河ノ源頭ヨリ河口ニ下リ、又源頭ニ遠ル六年間ノ旅行ヲ
 「プラタクシナ」ト稱シ、信徒ノ遠征ヲ企ツルモノ、今日ニ於テモ尙尠カラ
 スト云フ、要スルニ恒河ハ、本流支流トモニ、印度北方人煙稠密ノ地ニ灌
 漑シテ田圃ヲ養ヒ、物産ヲ豊ニスルヲ千歳竭キ去ルノ期ナク、其仁惠他
 水ノ比ニ非ズ、無比ノ愚民ガ之ヲ尊戴スルモ亦謂レナキニ非ズ、
 第三部、南方ノ高原、印度南方ノ地ハ、三邊ノ高原ヲ爲ス、古代之ヲ稱シテ
 德干ト謂フ、即チ南方ノ義ナリ、今ニ此部ニ屬スルモノハ、「ウヰンヂヤ」山
 脈ノ南ヨリ「コモリン」ニ至ル一大地方ニテ、中央州ベテール、麻特拉薩孟
 買、賣索爾、ニサム及シンヂヤ、ホルカル等ノ本土侯伯領ナリ、人口ノ總
 計大約一億万人アリ、其北東西ノ三邊ニ山脉アリテ、疆界ヲ畫シ、東西ノ
 兩邊ハ「コモリン」角ノ處ニ至リテ相合ス、北境ノ山脉ハ、群巒相疊ナリ、殆
 ソト東西ニ走ル、之ヲ「ウヰンヂヤ」山脉ト名ク、其西端ニ「アグー」靈山アリ、
 其地ニ「禪那」宗ノ寺院アルヲ以テ其名著ルシ、テ「ヂヤ」平原上ニ聳ユ

ル、五千六百尺餘ニテ、恰モ海上ノ嶋形ヲ爲ス、「サトプラ」山モ「ナルパナ」
 河ノ南ニアリテ、東西ニ連リ、「ナルパナ」河ト「タプナ」河ノ分水嶺ヲ爲シ、「ウ
 ザンヂヤ」山脉「サトプラ」山系ノ東端ハ、其ニ印度中央ノ高原ニ至テ盡ク、
 猶東スレハ、之ニ連ナル「カイムール」山ノ突起スルアリ、榜加拉下部ノ西
 界ヲ畫シ、正ニ恒河ノ古流域上ニ臨メリ、更ニ東シテ極端ニ「パラスナ」
 「山」アリ、恒河ノ平地上ニ拔ク、四千四百尺餘ナリ、
 「ウヰンヂヤ」連山ハ、高低一ナラズ、一千五百尺ヨリ四千尺ニ至リ、其ニ中
 央高原ノ北屏ヲ爲シ、昔時ハ、印度南北南部ノ山澤ノ關門ニテ、全域ヲ統
 轄スルノ妨ヲ爲セシト雖、近來ハ、大道鐵路ノ貫通スルアリテ、其通行
 亦困難ナラズ、
 高原ノ二邊ニアル山ヲ、東山脉、南山脉ト曰フ、此南山脉ハ、「ウヰンヂヤ」連
 山ノ東端及西端ヨリ起リ、其ニ南走シテ、印度ノ東西岸ヲ繞ルモノナリ、
 東山脉ハ、起伏一ナラズ、遂ニ延キテ麻特拉薩嶺ニ下リ、其麓ト海岸ノ間

コハ、一大平地ヲ生ズ、而シテ西山脈ハ、孟買領ノ海岸ニ臨ミテ屹立シ、山麓ト海岸ノ間、平地甚ク狹シ、連山中ノ一二峯ハ、高ク海表ニ聳ヘテ、高梯ノ形ヲ爲セリ、東山脈ハ平均ノ高サ、千五百尺ナリト雖、西山脈ハ直チニ海邊ヨリ起リ、高サ三千尺乃至四千七百尺ニ達シ、其東山脈ニ合スル南隅ノ處ニテハ、八千尺餘ニ及ブト云フ、

斯ノ如ク、三邊ノ山脈ヲ以テ圍ミタル三角形ノ内地ハ、海上ニ拔クコト一千尺乃至三千尺アリ、而シテ處々ニ峯巒ノ凸起シテ、四千尺ニ至ルアリ、夫ノ有名ナル「コルギリス」青山ノ如キハ、麻特拉薩ノ夏季政府、ウタカマソド所在ニテ、其海上ニ秀ツルコト七千尺餘ナリ、其南隅ノ「ドダベタ」峯ハ、八千七百尺アリ、西方海岸ノ地ヨリ高原ニ登ルノ峽路幾條アリ、「ポールガート」ハ、孟買府ヨリ、東南四十里ニアル險壑ヲ經テ、登ル路ニテ、其高サ二千尺餘ナリ、昔時ハ、此地ヲ以テ、德干ニ入ルノ關門ト稱シ、寡兵ヲ以テ大軍ヲ防クニ足ル、險要ノ地ト爲シタリシカ、英領ニ歸セシヨリ以來、此

嶺上ニ大兵路ヲ開キ、内地ヨリ孟買ノ海關ヲ扼スルニ供セリ、近來此要地ニ鐵道ヲ設ケ、線路ハ、峯巒ノ肩ヲ繞リ、巉巖ノ隧道ヲ貫キ、狹隘ニ沿ヒテ、高原ニ出ツ、一二ノ部ニ於テハ、其彎曲ノ度、急迫ニシテ、車ヲ回スル頗ル難キガ故ニ、列車ヲ平地ニテ駐メ、方向ヲ轉スル所アリ、孟買ノ東北トナル「ガート」ニモ一線ノ鐵路アリ、其形以上ノ者ト相同シ（以上大島圭介氏ノ印度志ヲ

折衷増補ス）

野史氏曰ク、余聞ク、歐洲人士ノ印度ニ遊ブモノ、往ク所トシテ、其土地ノ宏大否沃饒ナルニ驚キ、爽然トシテ自失セザルモノナシト云フ、蓋シ印度ノ地タル、天然ノ富ヲ具ヘ、草香シク泉甘ク、支那ヲ除キテ、世界中ニ其比ヲ親ザル國ナリ、人民ハ永ク外國ノ奴隸ト爲レリト雖、其國語、文學、宗教、風俗、慣習等ハ、數百年間、之ヲ維持シテ變更セズ、斯ノ如キ殷富ト、此ノ如キ江山ト、以テ獨立スルコト能ハザルモ、ハ何ツヤ、余ノ深ク浩歎スルニ堪ヘザル所ナリ

第一篇 上世紀

第一章

亞利亞人種ノ侵入

印度ノ開國ハ、今チ距ルル、幾ント五千年以前ニアリ、其草昧ノ時ニ於ケル形勢ハ、他國創世ノ事蹟ト同シク、荒唐怪詭ナル小説ヲ以テ附會スルカ故ニ之ヲ徵スルニ由ナシト雖也、正史ハ九百年ニ至リ、回教人ノ著ハセシモノヲ始メト爲ス、悉曇(Sanskrit)トナリテ記シタル古典、古諺、古經、詩賦、又ハ貨幣面ノ古文字、又ハ古代石面及ヒ金屬物ニ彫刻シタル文字等ニ據リテ、之ヲ推考スルニ、其世界中ノ最舊國マリシ、疑チ容レザル所ナリ、而シテ今ヨリ三千五百年前ニ於テ、己ニ野蠻ノ陋習ヲ脱シ、寢開化ノ風ニ趨キヨリシ、一モ支那及ヒ歐洲ノ史家ノ、皆之ヲ認識スル所ナリ、

上古紀ノ初頭、即チ印度草昧ノ時ニ當リテ、「ハウ、アジャ」高地ノ亞細

亞ノ人種、蒙古人及ヒ高加索人、カ水草ヲ追ヒテ漸々西來シ、彼ノ喜馬拉山ノ西北ノ凹處ヨリシテ北印度ニ入り、有名ナル恒河、一ニ安日斯ガンヂスト稱ス、ト身毒河インダス、一ニ温都斯インダスト稱ス、トノ二大河アルヲ見テ、欣喜自ラ勝ヘス、叫テ曰ク、此ノ如キ二大河アルヲ以テ大ニ國ヲ建ルニ足ルベキナリ、ト是ヨリ一雨毎ニ堤塘ニ芳草ノ殖ヘタルカ如ク、皆此二大河ニ沿ヒテ、散棲シ、遂ニ住居ヲモ開クニ至リタリ、抑モ「ハウ、アジャ」人ノ印度ニ侵入スルヤ、其國內ニ住居セシ黑人種ヲ驅逐シ、殺戮シ、又ハ之ヲ屬隸ト爲シテ、恒河ト身毒河トノ水涯ニ棲メリ、其中ニテ、恒河ト茹牟那河トノ相合流セシ處ニ來レル、「アソガ」「マカダ」「ヒラハ」「カッシン」「ユサラ」等ノ人種ハ更ニ進ミテ東印度ニ入りタリ、而シテ他邦ノ人種、思ヒ思ヒニ印度ニ侵入カシカレ、亞利亞人種、一ニ之ヲ印度獨逸人種ト云フ、即チ婆羅門人種、白哲西洋人種ノ遠祖ナリ、ハ合

シテ一團ト成リ結ヒテ一塊ト爲リ、恰モ崩濤巨浪ノ一時ニ來ルカ如ク、
 身毒河邊ノポンジャブニ侵入セリ、此人種ハ以上ノ諸人種ト異ナリテ、
 最モ強大ナル勢力ト新鮮ナル文明トヲ以テ侵入セシガハ、内地ノ土人
 ナ驅逐スルト同時ニ、之ヲ風化シ、幾モナクシテ印度ノ全地過半ハ亞利
 亞人ノ占奪スル所ト爲レリ、是レ實ニ温都人種蕃殖ノ基ナリ、蓋シ此時
 代ハ未タ詳カナラズト雖モ、大約紀元前千四百年ノ頃ニ當レルヲ疑ナ
 容レザル所ナリト云フ、

社會發生ノ以前ニアリテハ、無智蒙昧ノ原人ハ、未タ耒穀ヲ耕作スルノ
 術ヲ知ラス、亦牛羊ヲ牧養スルノ方ヲモ知ラサル事ナレハ、自然ニ成長
 スル動物及ヒ植物ヲ取リテ食物ト爲シ、生存スルノ外ナシ、然ルニ寒帶
 ノ地ニアリテハ、動物植物ノ成長充分ナラズシテ食物乏シキヲ免レズ、
 故ニ人民爭ヒテ熱帶地方ニ群至スルヲ、自然ノ勢ニシテ、當時亞利亞人
 種ノ印度ニ入り早ク社會ノ狀態ヲ成シタル所以ナリ、——然レモ此八

種ノ印度ノ全地ニ蔓延スルニ及ヒテ、其土人ト雜婚ヲ行ヒ、其風俗習慣
 隨テ混淆シタルガ爲ニ、歲月ヲ經ルニ從ヒ、全ク亞利亞人種ノ氣象精神
 ナ失ヒ、一種特殊ノ亞利亞人種ト爲レリ、是レ實ニ印度人種即チ亞利亞
 人種ガ他ノ亞利亞種族ノ如ク、進取活潑ノ氣象ナク、文化ノ發達モ亦中
 途ニシテ沮輟シタル所以ナルカ如シ、而シテ此國民ガ上古ニアリテハ、最
 高ノ文明ニ達シタルニモ拘ラズ、數千年ノ間、世界ノ劇場ニ當リテ其伎
 倆ヲ出スヲ能ハザリシモ亦之レガ一原因タルベシト云フ、

第二章

印度ノ種族

亞利亞人種已ニ印度ニ侵入シタレモ、唯タ一村毎ニ聚落ヲ成シ、別ニ國

王ト云フモノモナカリキ、然ルニ、亞利亞種族ノ中ニ於テ、婆羅門種姓（Brahmins）ト稱シ、（婆羅訶摩、跋濫摩、沒囉憾摩ナドモ云フ、唯々僅カナル、轉訛アリ、然レモ梵ヲ梵摩ト謂ヘハ、婆羅門トハ梵天ト云フ稱ナリ）天神即チ婆羅門ノ口ヨリ生レタル種族ト爲ス、而シテ諸姓ノ中ニアリテ、最モ其清貴ナル所以ノモノハ、始メテ世界ヲ創造セル梵天王ノ子、梵天ノ苗裔ニテ、世々其稱ヲ襲ヒ來ルニ由ル、（義淨三藏ガ、寄歸内法傳ニ、五天之地、皆以婆羅門爲貴勝、凡有座席、並不與餘三姓同行、自外雜類、故宜遠矣）トアリ、刹利ノ如キハ、王族ナルニモ拘ラズ、同席同行セスト云ヘルヲ以テスルモ、婆羅門ヲ以テ、最モ清貴

印度ノ種姓族類ノ群分セルヲ、今マ盡ク數フルニ違ナシト雖モ、之ヲ大別スレハ、四姓ニシテ即チ其一チ婆羅門（Brahmins）ト稱シ、（婆羅訶摩、跋濫摩、沒囉憾摩ナドモ云フ、唯々僅カナル、轉訛アリ、然レモ梵ヲ梵摩ト謂ヘハ、婆羅門トハ梵天ト云フ稱ナリ）天神即チ婆羅門ノ口ヨリ生レタル種族ト爲ス、而シテ諸姓ノ中ニアリテ、最モ其清貴ナル所以ノモノハ、始メテ世界ヲ創造セル梵天王ノ子、梵天ノ苗裔ニテ、世々其稱ヲ襲ヒ來ルニ由ル、（義淨三藏ガ、寄歸内法傳ニ、五天之地、皆以婆羅門爲貴勝、凡有座席、並不與餘三姓同行、自外雜類、故宜遠矣）トアリ、刹利ノ如キハ、王族ナルニモ拘ラズ、同席同行セスト云ヘルヲ以テスルモ、婆羅門ヲ以テ、最モ清貴優等ト爲オチ知ラレタリ、（又其稱ヲ雅トシテ、國號ニモ付シタル所以ノモノハ、梵天ノ梵ト同語ナルカ故ナリト云フ、）大般若經ノ音義ニハ、（婆羅門梵語、即梵天名也、唐云淨行、或云梵行、此類人自云、我本始祖從梵天口生、便取梵名爲姓、世々相傳、學四圍陀論、皆博識多才、明閑衆論、多爲王者師傅、高道不仕、或求仙養壽、時有證五通仙者也）ト云ヒ、又金光明最勝王經音義ニハ、（世業相傳、學四圍陀論、皆博學多智、守志貞白、文儒雅操、高道不仕、其中聰俊穎達者、多爲王者師、受封邑、而自居、最爲上等也）ト見エタリ、（婆羅門、四圍陀ヲ研究ス、一ニ曰ク壽、養生、繕性、醫方ノ諸事是レナリ、二ニ曰ク祠、享祭、祈禱、事火、懺悔是レナリ、三ニ曰ク禮、義、占卜、兵法、軍陣是レナリ、四ニ曰ク術、異能、伎數、禁呪、符印是レナリ、而シテ國民ニ、道義ノ模範ヲ指示シ、又祭師ト爲リテ、天神ニ隨侍ス、印度人之ヲ尊崇シテ、神僧ト爲ス、）

其二チ刹利（Kshatriyas）ト稱シ、天神ノ膺ヨリ生シタル種族ト爲ス、其族

ニ兩種アリ、一チ「ヴェリサ」ト云ヒ、日種ノ初祖ナリト云フ（二チ「アリトリ」ト云フ、月種ノ初祖ナリト云フ）此兩族ハ印度ノ政治及ヒ兵事ヲ掌握ス、一其三チ吠舍（Vaishyas）ト稱シ、天神ノ脇ヨリ生シタル種族ト爲ス、印度ノ商業及ヒ農業等ニ從事シ、兼テ醫師、訟師、銀行等ノ事業ヲ擔當ス、一其四チ首陀羅（Sudras）ト稱シ、天神ノ脚ヨリ生シタル種族ト爲ス、専ラ牧畜耕作及雇工ヲ業トス、一此四種姓ノ外ニ尙ホ數族アリ、其中「パリス」Parishas）ヲ以テ最モ卑賤ノ族ト爲シ、鞋工皮匠等ヲ以テ業トス、人之ヲ稱シテ「旃陀羅」ト爲ス、此種族ハ印度ニアリテ、殆ント人類ノ中ニ齒セラレズ、故ニ教育ヲ受クルトスラモ、亦之ヲ禁止セリ、一要スルニ以上四種姓ノ中ニ在リテ、婆羅門ハ獨リ、其尊榮ヲ極メ、且ツ勢力アリシナリ、長阿含四姓經ニ婆羅門稱ノ常套語ヲ擧ゲタルニ——我カ婆羅門種ハ種モ第一ナリ、餘ハ皆卑劣ナリ、我カ種ハ清白ニシテ、餘ハ皆黑冥ナリ、我カ婆羅門種ハ梵天ヨリ出テ、梵口ヨリ生マル——ト云ヒシトゾ、

上古印度ノ社會ニ、此ノ如ク階級ヲ設ケテ以テ、人民ノ權利ヲ制限シタルヲ、埃及ニ於ケルト異ナラズ、蓋シ印度ニ於テ、婆羅門教義ヲ以テ、斯ル階級法ヲ立テタルモノハ、想フニ全ク亞利亞人種ガ、土人ト混交セシメテ、恐レテ之ヲ制根セント欲シタルニ原由スルモノ、如シ、是レ印度語ノ Varana 即チ階級ト云ヘル文字ハ、色ノ字義ヲ含ムト又ハ他ノ階級ト婚姻ヲ結ブノ禁令ノ階級規則條項中ニ重要ノ位置ヲ占ムルヲ見テ之ヲ知ルベキナリ、併シナカラ、其國民ハ、終ニ其目的ヲ達スルヲ能ハスシテ却テ之ヲシテ徒ニ文化發達ノ妨害ト爲ラシメタリキ、

第三章

日種月種ノ朝

相傳フ、上古亞利亞人種ノ中ニ二王種アリテ其國ヲ分治セリ、其一ナリ日種ト稱シ、其一ナリ月種ト稱ス、日種ノ始祖ヲダクサト云ヒ、月種ノ始祖ヲアトリト云フ並ニ本ト梵天王ヨリ出ツ、

日種ノ第一王ヲ伊克尸婆克ト稱シ、其都府ハ、沽蹉邏ノ阿歐度耶城ナリ、其孫カクツタ之レニ嗣キテ立テ數十世ヲ經テ羅摩大王ニ至ル、月種ノ第一王ヲプルラエスト稱シ、茹牟那河ト恒河ト二水ノ合流スル所ニ今ノ亞刺幡拔土ニ其首府ヲ定ム、之ヲ布羅底尸他那ト名ク、其家子アユス之ニ嗣キ、二子ヲ生ム、長ヲ那扶沙ト云ヒ、次ヲ刹帝利部底陀ト云フ、長子王位ニ登リ、次子ハベナレスノ地ニ一國ヲ立ツ、那扶沙ノ嗣耶也、底父ノ位ヲ繼ギ、五子ヲ生ム、末子布爾嗣キ立テ、其他ノ四兄ハ、各總督ト爲リテ政ヲ掌ル、布爾ノ子孫ニ婆羅多ト稱スル王アリ、勇武ニシテ大ニ

其版圖ヲ擴張セシカハ、國人印度ヲ稱シテ、婆羅多氏之國ト稱スルニ至レリ、其後布爾王ノ苗裔ニハステト稱スルモノアリ、其首府ヲ北ニ移シ、之ヲ轄斯底那布爾ト名ク、即チ婆羅摩爾多ニアリ、此王ノ子孫ニ克爾王出ツ、

古傳ニ據レハ、那扶沙ノ第三子、度爾耶ノ子孫ニガソダルト稱スルモノアリ、干達爾爾ノ地ヲ領シタリト云フ、又那扶沙ノ第四子、亞督ノ末裔ハ、婆爾爾ノ地ヨリ、沽棲曼提爾ノ海岸マテ其領地ヲ擴張シタリト云フ、西曆紀元前大約一千年ノ頃ニ於テ、最モ廣大ナリシハ、日種ノ人ニシテ、其首府阿歐度耶ニ難勝城ニハ實ニ其名ノ如ク光威赫々トシテ遠近ヲ震耀セリ、當時之ト鎮チ並ベテ雄ヲ爭ヒシモノハ、干牙克布牙ニ迦奴侍ニ城邑ナリキ、

第四章

羅摩ノ親征

紀元前大約二千年ノ頃ニ當リテ、羅摩ト稱スルモノアリ、自ラ親征ノ勞ヲ執リ、南方ニ侵入シテ其版圖ヲ擴張シ、威名ヲ輝カセリ、——羅摩ハ日種ノ王ナリ、彌底羅國王ノ女西多ヲ娶レリ、相傳フ羅摩、父ノ爲ニ逐ハレ、久シク南方ニ住セシガ、其妃西多之ニ從ヒ、一日二人相伴ヒテ逍遙セル時ニ、蘭迦國——錫蘭——王拉巴那、西多ヲ奪ヒ去ル(拉巴那ハ一身十頭ニシテ、軀幹偉大勇力アリシト云ヘ、是レ假リニ現ハセルニテ其本形ニ非ズ、羅摩大ニ怒リ、其讎ヲ復セント欲シ、大軍ヲ起シテ、拉巴那ヲ追ヒ、德干ニ進入セシガ、居民ハ皆是レ野蠻人ニシテ常ニ山中ニ居リ、樹林ニ住ムカ故ニ、之ヲ稱シテ猿猴或ハ羅刹ト呼ブ、羅摩、此等ノ居民ヲ先導ト爲シ、其名ヲ須俱利婆又ハ幡奴曼ト云フ、遂ニ蘭迦ニ至リ、大ニ敵軍ヲ破リ、拉巴那ヲ誅シ其弟此西那ヲ立テ、王ト爲シ、妃西多ヲ救ヒ本國阿

印度古傳記妄誕
修飾誇大不足信
焉者居多

歐度耶ニ凱旋セリ、是ニ於リ南北ノ通路始メテ開ケ、羅摩大王ノ威名四隣ニ震ヒ、遠近心ヲ歸ス、是時ヨリ亞利亞人、中天竺ヨリ南天竺ニ移リ、大ニ其文化ヲ彼地ニ及ボセリ、
羅摩ノ勝利等ニ付キテハ、妄誕修飾ノ事甚ク多ク取ルニ足ラザルモノアリト雖、其南征ノ事實ハ疑フベキニ非ザルカ如シ、其後ノ詩人婆爾彌其ナルモノ、大王ノ功業ヲ稱讚シテ、羅摩耶那ト名ク、又當時王宮ノ形狀ヲ記シテ曰ク——王宮ノ前門ハ穹形ニシテ上ニ種々ノ旌旗ヲ立ツ、其旗旖旎ト風ニ從テ靡ク、其門扉ハ銀鍍ニ由テ開閉ス、扉面ニ彫刻アリ、華麗ヲ盡シ、奇巧ヲ極ム——ト而シテ王宮ニ七廷アリ、七大臣アリテ、國政ヲ實施セリ、此等ノ言ニ由レハ、當時ノ文運武功、一時ニ輝キシモノ、推想セラル、ニ足ルガ如クナリト雖、其實ハ太々文飾ニ過クルカ如シ、
獅巖曰、所謂爲叢毘、爲淵毘魚者、

第五章

日種月種ノ戰爭

羅摩大王、其基業ヲ太子克沙ニ傳フ、爾後子孫世襲シテ六十代ニ至ル、
(阿跋度耶ノ名、日ニ衰フ、或ハ言フ、後王日ニ其部ヲ迦奴侍ニ遷セシ) 然ル
ナラント、蓋シ終テ、其後ニ至リテ、遂ニ雪山ニ入りシト思ハル)
 是時月種ノ朝ハ、國力益々強大ト爲リ、其威勢莫ニ日種王ノ右ニ出ツ、
 紀元前大約三百年ノ頃、日種ノ王ニ瑜提西底羅ナルモノアリ、兄弟四人
 之ヲ般陀婆稱トス、皆勇敢ニ武シテアリ、俱ニ皆雪山ノ森林ニアリテ、隱
 遯行者ニ養育セラレシメカ、長スルニ及ヒテ中原ニ下リ、其都ヲ因陀羅布
 列西多ニ因陀羅トハ天主ナリニ建テ月種王ノ都幡斯底那布爾
 ニ近シ、共ニ特里ノ地ニアリ、其都宏壯華麗、月種ノ都ニ過ク月種王克爾
 之ト威ト争ヒ終ニ特里ノ野ニ戰ヒ、其雌雄ヲ決スルニ至レリ、此戰爭ノ
 起ルヤ、四隣ノ國王、大小ニ論ナク、各々兵馬ヲ率ヰテ、中原ニ入り、或ハ日
 種ヲ助ケテ、月種ヲ撃チ、或ハ月種ヲ援ケテ日種ニ抗シ、其中、南天竺ヨリ

來レルモノアリ、印度河ノ西方ヨリ來レルモノアリ、又希臘人耶婆那ナ
 ルモノ來リテ之ニ會セリト云フ、其餘ハ皆是レ北中天竺ノ王侯ニシテ
 就中摩竭陀(Magadha)國王ノ如キハ最モ強大ナリキ、當時摩竭陀王ハ許
 多ノ屬國ヲ有セリト云フ、
 此戰爭ニ於テ、月種王ハ終ニ敗衄シテ、日種王、瑜提西底羅ノ爲ニ、其土地
 ナ併吞セラレ、日種王特里ノ王ト爲ル、是戰ハ印度古來未曾有ニシテ、其
 殺傷算ヲ知ラズト云フ、是レヨリ日種王ノ相繼クテ六十九代ニ至リ、或ハ
 二十九代ト云フニナリ、此間ニ日種月種ノ區別、全ク其跡ヲ絶セリ、
 此戰爭ノ起リシ頃ニハ印度ハ、稍々文明ノ城ニ躋リシガ、此役ノ爲ニ、教
 化陵夷シ、風俗敗頹セリ、彼ノ婆羅門ノ徒ノ如キハ、此時代ヲ以テ「邪惡之
 世」ト稱シタリ、但シ此變亂アリシカ爲ニ、四姓ノ區別漸ク廢セラレ、藩閭
 ハ、風習稍々其跡ヲ滅スルニ至レリト云フ、
 辯嚴曰、若藥不眠眩、厥疾不瘳、

第六章

言語及風俗

(言語)印度人ハ、上古ヨリ梵語ヲ用ヒズシテ、多クハ他彌爾語ヲ用ヒタリ、
 今マ其語体ヲ考察スルニ、大ニ辯韌種ノ語体中、土羅尼衍又ハ嘶底安語
 ニ類スト云フ、左レハ土耳其語ニ似タルモノナルベシ、南天竺ノ如キ、ハ
 獨リ、他彌爾語ノミナラズ、其外ニモ尙ホ五六種ノ言語アリテ、並ニ行ハ
 レタリ之ヲ總稱シテ度羅毘提安語ト曰フ、

梵語ハ、亞利亞人種ノ製シタル文字ニシテ、其文法造句、典雅精微實ニ世
 界稀有ノ語ナリ、其言辞ハ、希臘羅馬、獨逸、日耳曼等ノ語ト其本相同シク
 其造句文法、亦大ニ似タル所アリト云フ、印度人ハ、梵語ヲ悉曇 (Sanskrit)
 ト稱ス、文雅ノ意義ナリ、相傳フ、此文字ハ梵天王ノ製シタルモノニシテ
 四十七言アリト、——或ハ云フ、梵天ノ古語ハ三十五字ニテ、其本ハ十四
 字ナルベシト、又佛滅後五百年ニ迦膩色迦王ノ頃ニ當リテ、沒 (M)ニ
 尼ト稱

ナル哲家、聲明論及十八章等ヲ撰ビタリ、

亞利亞人種、印度ノ全國ニ充滿スルニ及ヒテ數多ノ方言ニ分レ、其最モ
 大ナルモノハ、摩竭陀語、波利語、布羅克利多語、阿縷陀摩伽提迦等コシテ
 婆羅爾知ト稱スル古昔ノ學者ノ著ハセル文法ニ詳カナリト云フ、但シ
 此等方言ノ異ナル所ハ、多ク語尾ノ變化文字ノ轉置等ニアリトス、近世
 紀ニ及ヒテ言語亦大ニ駁雜セリ、

風俗)上古印度ノ風俗氣象、錯綜一ナラズ、然レモ一般ノ人民ニ於テハ、質
 素淳朴ノ氣風ナリシト知ラル、——其中婆羅門ノ俗ハ、寂靜ヲ好ミ、家ヲ
 捨テ山林ニ入りテ道ヲ學ブモノ多カリキ、(名義集ニ、普門ノ疏ニ云ク、劫
 初種族アリ、山野ニ自ラ閑ニス、故ニ人淨行ヲ以テ之ヲ稱ストアリ、)

食料ハ、婆羅門ノ徒、肉類ヲ食セス、又胡蘿蔔、蕪菁、並ニ葱蒜等ヲ用ヒス、然
 レモ其他ノ種族ハ、食物ニ制限ナク、牛肉、鳥肉ヲ除クノ外ハ、各種ノ肉ヲ
 食ス、但シ回教ノ徒ハ、猪肉ヲ以テ不淨ト爲シテ之ヲ嫌忌セリ、又喫飯ノ

時ニハ男女交坐雜食セザルヲ法ト爲ス
 衣服ハ印度ノ國俗上古ヨリ裁縫ヲ經タル衣裳ヲ着セス其後チ回教徒
 ニ征服セラレシヨリ其風俗漸ク弛ミ近世紀ニ及ヒテハ男子多ク裁縫
 セル裡衣ヲ以テ上服ト爲シ其下ニ腰衣ヲ着ス回教人ノ如ク緊密ノ内
 褲ヲ着シテ其上ニ外褲ヲ加フルモノ多シ唯釵面ノ位置ヲ以テ彼此ヲ
 別ツノミ(上古ノ服飾ハ多ク裁製セザルモノヲ着シタリト見ユテ佛書
 ニモ外道服飾紛雜異製或衣孔雀羽尾或飾鬘瓔珞或無服露形或草板
 掩体或拔髮斷鬘或蓬髮椎髻裝無定赤白不恒トアリ)
 婦女ノ服裝ハ三丈ヨリ六丈餘マテノ廣濶ナル綿布或ハ絹帛一段ヲ用
 ヒテ其一分ヲ腰ニ繞ラシ之ヲ足マテ垂レシメ裳或ハ裙ト爲シ其餘ヲ
 身ニ纏ヒ之ヲシテ頭上チ過キ右ノ方ニ下リテ後ニ垂レシム其外許多
 ノ婦人ハ緊密ナル胸當チ着ケ服飾凡テ質素ニシテ清艶嫺雅ナルモノ
 多シト云フ

第七章

婆羅門教

婆羅門教ヲ創建シタル人名及ヒ創唱ノ地方未タ詳ナラズ一説ニ據レ
 ハ北印度ニハハラマハルタニ迦伽爾及ヒ素爾座兩河ノ中間ニアリ
 一ト名クル勝地アリ世人之ヲ梵天王ノ居處ニ稱ス婆羅門教ノ創唱
 蓋シ此地ヨリスト云フ

婆羅門教ハ多神教ナリシモ一變シテ萬有神教ト爲ル其説ニ曰ク
 神ハ宇宙ノ精神ナリ神ハ即チ宇宙ナリ神ハ世界ノ歸スル所ナリ神ハ
 世界ノ由テ以テ出ル所ナリ神ハ万物ヲ包有スルモノニシテ万物ハ神
 ノ由テ以テ現ハル所ナリ萬物ヲ離レテ神ノ存スルコトナク万物ハ皆
 神ナリト又曰ク神ニ三種アリ一ハ宇宙ノ創造主ニシテ一ハ
 宇宙ノ破壞者ナリ而シテ其一ハ宇宙ノ中保者ナリ而シテ其天地ノ
 神ハ地天水天火天風天大楚天伊邪那天帝釋天毘沙門天羅刹天日天月

天、焰摩天是レナリ、又其特ニ尊崇スル所ハ、婆羅摩、毘尸奴、嘶婆ノ三神ナリトス、——印度古傳ノ大旨ヨハ、大虚空ニ大梵天トモ、梵自在天トモ、大自在天トモ稱スル無始無終ノ天界アリテ、其界ニ大梵王トモ、那羅延天トモ、摩醯首羅トモ稱スル大主宰ノ天神アリテ、是レモ亦無始無終ノ神ナルガ、無ヨリ有チ出シテ此世界ヲ創造シ、人類万物ヲモ化成セルカ故ニ世間衆生ノ祖神ナリト云ヘリ、——提婆論ニ、摩醯首羅論師說、梵王那羅延、摩醯首羅、一体三分、所有一切命、非命物、皆從自在天生、從自在天滅、自在尺身者、虚空是頭、日月是眼、地是身、河海是尿、山丘是糞、火是熱、風是命、一切衆生、是身內蟲、自在天常生一切物云々、ト見エタリ、是レ寓言タルニ過キザルガ如クナリト雖モ、其實ハ宗教創建ノ本、却テ此等ノ處ニアリ、

婆羅門教ニ於テ造物ノ等差ヲ定ムルニ、八階ノ順序アリ、第一ニ植物、第二ニ動物、第三ニ動物中ノ人類、第四ニ人類中ノ僧侶、第五ニ僧侶中、學術ニ通曉セルモノ、第六ニ學術ニ通曉スルモノ、中ニテ、高尚ナル哲學ニ

達スルモノ、第七ニ智識德行兼備ノモノ、第八ニ經典及ヒ他學ニ達シ、生前死後ノ盛福ヲ受クベキモノ、——此八種ノ等差中、僧侶ハ最モ高等ノ地位ヲ占ムルヲ以テ、其責任モ亦重シ、一般ノ僧侶ハ、祭祀ニ從事スルヲ以テ本務ト爲シ、中等ノ僧侶ハ、普通ノ學術ヲ兼修セリ、高等ノ僧侶ハ、人民ノ爲ニ、德義ノ模範ヲ示シ、最上優等ノ僧侶ハ、祭祀教誨ノ外ニ、學術及ヒ技藝ニ通シ、兼テテ神學哲學其他ノ學術ヲ研究シ、最モ其底蘊ヲ極メ、

婆羅門教ノ僧徒ハ、世間ノ煩累ヲ避ケンカ爲ニ、或ハ樹下ニ、或ハ石上ニ、其居ヲ占メ、袈衣ノ如キハ固ヨリ、屣惡襪ヲ着ケ、枯草ナドヲ纏フモノアリ、飲食ハ、多ク一日ニ一餐、——通世ノ僧徒ハ、肉類及ヒ葱韭、蒜齒類ヲ食セス、——或ハ穀類ヲ斷テ、草根木實ヲ食スルモノアリ、又苦行ノ景况ハ、苦因ヲ以テ樂果ヲ惹キ起スベキ教規ニ本キ、艱難ヲ辭セズ、軀命ヲ惜マズ、或ハ烈火ヲ蹈ミ、或ハ荆棘ニ坐シ、刀ヲ以テ肉ヲ割キ、針ヲ以テ膚ヲ

刺スカ如キ、皆遁世苦行ノ務ナリト爲セリ、
 俊改ノ法ハ、犧牲ニ供スルニ非ズシテ、若シ有命ノモノヲ害シ、又無益ニ
 樹木ヲ伐採シ、漫ヨ路傍ノ青草ヲ蹂躪スルハ、河ニ臨ミテ、身垢ヲ洗除
 シ、韋陀ノ頌文ヲ誦誦スルヲ常ト爲ス、其他ノ過誤ニ於テモ亦多ク此俊
 改法ヲ用ユ、――讀經ノ方規ハ、清潔ノ地ヲ撰ヒテ、北面シ、讀經ノ前後ニ
 於テ、「オーム」ト稱スルヲ以テ方規ト爲ス、――「オーム」トハ、一説ニ據レハ
 婆羅門ノ神徳ヲ表示セル尊號ナリト、

婆羅門教ハ、人魂游轉ノ説ヲ信ズ、其説ニ曰ク、――人ノ魂魄ハ、過去、現在
 未來ノ三世ニ流轉シテ、罪障ノ消滅ニ從事スルモノナリ、人ノ現世ニ生
 レタル所以ノモノハ、其過去ノ世ニ行ヒタル罪業ヲ消滅セシカ爲メニ
 シテ畢竟スルニ、前世ニ惡業ヲ行ヒタル罪ニ由テ、此世ニ生活セザルニ
 カラザルモノト爲レリ、故ニ人ハ、常ニ讀經、捨財、捨身等ヲ行ヒ、其身ノ罪
 過ヲ消滅セシムルヲニ從事シ、來世ニ於テ、劣等ノ禽獸ト爲リテ、此世ニ

出ルヲ免ルベシ――ト、此説ハ是レ埃及ナドニ行ハレタル教ト毫モ
 異ナルヲナシ、

摩訶ノ經典――教法及ヒ政法ノ律例ヲ掲載セシ古書ナリ、摩訶ハ纂述
 者ノ稱號ニシテ、紀元前千年内外ノ聖人ナリ、後段ニ詳ナリ、――婆羅門
 教ノ三誠及十誠其他ノ諸誠アリ――其五誠ニ曰ク、第一輕神、第二悻悻、第
 三誇心、第四不快、第五不實、――又其十誠ニ曰ク、第一輕神、第二悻悻、第
 三悻客、第四諛語、第五輕薄、第六鄙倍、第七詐僞、第八毀休、第九放恣、第十剽
 盜、是レナリ、

婆羅門教傳播ノ地方ハ、重ニ印度諸邦――五印度ノ地ハ、他教ナキニ非
 サレ、概テ蔓延セリ――ニシテ、紀元前第六世紀ノ頃マデハ、其勢威、最
 モ強大ニシテ、全國ノ人民、之ニ風靡セリト云フ、

野史氏曰ク、社會發達ノ際ニ於テ、鬼神敬信ノ念ハ、由テ以テ人種ヲ團
 結スルニ於テ、最モ其効力アルヲ見ル、婆羅門教ノ上古印度ノ秩序ヲ

保持シタルカ如キ是レナリ、印度ノ地タル天地ノ現象、驚クベク怪ムヘキモノ甚タ多シ、人民ノ惑溺殊ニ深キヲ、勿論ナリ、婆羅門ハ人智ヲ束縛シ、民權ヲ制限シタル弊アリト雖モ、神學ニ於テモ、哲學ニ於テモ其功多シ而テ其哲學ハ後人ノ注目ヲ要スヘキモノ亦尠ナシト爲サズ、今日ノ宗教家請フ精細ニ之ヲ講究セヨ、

獅巖曰、所過者化、所存者神、婆羅門教祖有在焉、

龍潭曰、關尹子云、無一物非命、無一物非神、無一物非玄、此語與婆羅門主旨、亦暗合矣、

第八章

印度哲學（釋迦以前ノ哲學）

婆羅門教ノ盛時ニ際シテ、其教徒及學士ハ神學哲學ヲ研究シ、互ニ競爭勃起シテ、真理ノ機軸ヲ出シ、新說異論最モ夥シ（分レテ九十五種ト爲レリト云フ）、其主義ノ要領學派ノ異同ニ至リテハ、史家ノ注意ヲ惹クモノ亦尠カラズ、故ニ簡單ニ之ヲ零述スベシ、

印度ニ於テ、純正哲學ノ始メテ創起シタルハ、地、水、火、風、空ノ一ヲ執テ以テ宇宙ノ原因及ヒ歸處ト爲シタル、五種ノ哲學ナリトス、——其一ヲ地論師哲學ト爲シ、地ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、其二ヲ服水論師哲學ト爲シ、水ヲ以テ萬有ノ原因トナリト説ク、其三ヲ火論師哲學ト爲シ、火ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、其四ヲ風仙論師哲學ト爲シ、風ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、其五ヲ口力論師哲學ト爲シ、虚空ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、——此說一轉シテ無因論師哲學ト爲ル、無因論師ハ、自然

無因ヲ以テ万有ノ原因ナリト説クモノナリ」
 之ニ繼テ起ル所ノ哲學ハ、蓋方論師——方トハ上下四方ヲ云フ——時
 論師——時トハ古往今來ヲ云フ——ニシテ、方論師ハ、諸方ヲ以テ主ト
 爲シ時論師ハ時ヲ以テ主ト爲ス、此兩論師ニ繼テ起リタル者ハ、聲論師
 ニシテ、聲ヲ以テ常住不變ノ法ト爲ス、——此聲論師哲學中ニ、二種アリ
 其一チ聲顯論師ト爲シ、体性ヲ以テ常住不變ナリト主張シ、其二チ聲生
 論師ト爲シ、聲ノ体ヲ以テ有始無終ナリト主張ス、——聲論師ニ反對シ
 テ起リタルモノハ、非聲論師ナリ、其說聲体ヲ撥無シ、無相離言ヲ以テ宗
 極ト爲ス、

以上ノ哲學家ハ、皆客觀的ノ物体若クハ性質ヲ執テ、哲學ノ本源ヲ尋テシ
 モ、非聲論師哲學ニ至テ全ク其本領ヲ失シタリ、之ニ繼テ起ル所ノ哲學
 ハ、始メテ主觀的ノ問題ニ進ミ、思辨ノ研究ヲ爲スニ至ル、印度ノ哲學、是
 ニ至テ一段ノ步武ヲ進メタルモノト云フベシ、

其一チ識論師哲學ト爲ス、其說意識ヲ以テ我ト爲シ、天地萬物ノ原因ト
 爲セリ、——其二チ阿頼耶論師哲學ト爲シ、阿頼耶——阿頼耶ハ梵語ノ
 室ト云ヘル義ニシテ執持含藏ノ意ヲ表ス——ヲ以テ天地萬物ヲ含藏
 スルモノト爲ス、——其三チ知者論師哲學ト爲シ、其四チ見者論師哲學
 ト爲ス、其五識五根ニ依托シテ、能ク色聲香味觸ノ五塵ヲ緣スルニ、身中
 知アリ、能ク苦樂ヲ知ルト云フハ、是レ知者論師ノ說ニシテ、眼識眼根ニ依
 托シテ、色塵ヲ緣シ、色塵ハ一切ヲ包含スルカ故ニ、能見者ハ即チ眞我ナ
 リト云フハ見者論師ノ說ナリ、——其五チ内知論師哲學ト爲シ、内知ヲ
 以テ我ト爲ス、——其六チ外知論師哲學ト爲シ、外知ヲ以テ我ト爲ス、——
 ——其七チ能執論師哲學ト爲シ、其說識心ヲ離レテ別ニ能執者アリ、即チ
 是レ眞我ニシテ、能ク身口意ヲ運動シ、諸事業ヲ爲スト云フ、——其八チ
 所執論師哲學ト爲シ、唯タ是レ識心ノミ、其所執ノ境界ヲ眞我ト名ケ、此
 我ハ一切處ニ遍滿セリト云フ、——其九チ摩訶婆論師哲學ト爲シ、

苦、八分、醫方能治身苦、心苦者愛別種、怒憎、樂集、所求不得、分別、此三者則生心苦、二外苦、謂世人貪、獸、蛇、山、崩、岸、折、等、三天苦、謂寒、熱、風、雷、電、等、時、阿不修利、即、便、信、捨、家、法、修、出、家、行、因、說、二、十、五、諦、度、脫、爲、云、云、ト、ア、リ、荒、誕、)

第二ハ、勝論師哲學ト爲ス、ヘイセシガ哲學又ハ吠世史迦等ト稱セラル、モノ是レナリ、其始祖ヲ憂樓佉(即チ衛世師)ト云フ、輔行記ハ「憂樓佉、此云休留仙、其人晝藏山谷、以造經書、夜則游行說法教化猶如彼鳥、故得此名、亦名眼足、其人在佛前八百年、出世亦得五通、說論十萬偈、名衛世師」ト云ヒ、因明論疏ニハ「成劫之末、有外道名隘路迦(舊云優樓迦訛也)此云鷓鴣、身形醜陋、晝則隱伏山林、夜則來人間乞食、因驚他產婦、令墜胎、便不乞食、乃於確礮搗春塲糖中、拾取碎米而食之、因此亦號饑饉僕、此云食米齊仙人、造論名吠世師迦、奢薩恒羅」トアリ、衛世師万有ヲ大分シテ六種ト爲ス、一、實(梵ニ陀羅標ト云フ)——万有、實體本質ナリ、第二德(梵ニ求那ト云フ)——萬有ノ性能現象ナリ、第三業(梵ニ羯磨ト云フ)——事物運動ノ行業ナリ、第四大有性(梵ニ三摩若ト云フ)——實德業不滅

ノ原能力ナリ、第五同異性(梵ニ毘尸沙諦ト云フ)——實德業、差別ノ原能力ナリ、第六和合性(梵ニ三摩夜諦ト云フ)——實德業、集和ノ原能力ナリ、而シテ實ヲ分析スレハ、九種ト爲ル、地、水、火、風、空、時、方、我、意、是レナリ、德ヲ分析スレハ、廿四種ト爲ル、色、聲、香、味、觸、數、量、別性、合性、離性、彼性、此性、重性、液性、潤性、行性、覺、樂、苦、欲、瞋、勤、法、非法、是レナリ、業ヲ分析スレハ、取、捨、屈、伸、行ト爲ル、萬有ノ本体モ、顯象モ、作業モ、實德業ノ三句ニ攝合シ、大有性ヲ別立シ、同異性及ヒ和合性ヲ想像スルニ至ルモノナリ、後末ノ代ニ十八部中ノ上首ヲ戰達末底ト名ク(即チ愚月論師ナリ)十句論ヲ造リ、同異ノ句ヲ開シテ二ト爲シ、更ニ有能、無能、無說(或ハ無有ト云フ、英語ノ所謂ル)ノ一ノ、エキシステノスト云フモノ是レナリ、三句ヲ加ヘタリ、此勝論哲學ハ、數論哲學ニ反對シテ起リタルモノコシテ、數論ノ如ク、時間的ニ因テ万有緣起ノ原因原理ヲ論セズ、空間的ニ因テ、萬有ヲ本來實有トスル說ナリ、勝論哲學ハ、己ニ空間的ノ研究ナレハ、萬有ノ分析法ヲ用ヒテ、異

体論ヲ主張シ、數論ノ如ク總合法ヲ用ヒテ、同体論ヲ立テズ、是レ勝論ハ純然タル「マテリヤム」主義ナリ、「勝論」ノ概要ハ、勝論十句義論ニ詳ナリ——抑モ數論哲學ト、勝論哲學トハ、佛家哲學已前ニアリ、印度哲學ノ圓妙精微ニ達シタルモノニシテ、二派確然相争ヒテ互ニ論駁攻撃ヲ事トシテ已マザリキ——

第三ハ、尼隄子論師哲學ニシテ、「ニヤ」哲學又ハ那耶修摩^{ナヤシム}ト稱セラル、モ是レナリ——其始祖ヲ勒沙婆^{ロクサバ}ト云フ——「百論」ニ勒沙婆ノ弟子誦尼乾子^{ニケン}經言、五熱炙身、拔髮等受苦法是名善法トアル所ノ疏ニ、勒沙婆者、此云苦行仙、其人計身、有苦樂二分、苦現世、併受若盡、而樂法自出、所說之經名尼隄子、有十萬偈、尼隄子、此云無結、依經修行、離煩惱結、故以爲名、亦名那耶修摩、舊云尼隄子云云トアリ——尼隄子論師ハ、數論勝論二派ノ哲學ヲ和合セント欲シテ起リタルモノニシテ、其說、心境ノ二ツノモノハ、一体ナレトモ異体ナリ、異体ナレトモ一体ナリト執シ、十六諦ヲ立ツ——十六諦

トハ、第一ニ量諦、第二ニ所量、第三ニ疑、第四ニ用、第五ニ譬喻、第六ニ悉檀第七ニ語言分別、第八ニ思擇、第九ニ決、第十ニ論議、第十一ニ修諸義、第十二ニ壞義、第十三ニ自證、第十四ニ艱難、第十五ニ證論、第十六ニ墮負ナリ——百論ノ疏ニ經說有十六諦、開慧生八、一天文地理、二算數、三醫方、四咒術、及四韋陀、故云八也、次修慧生八、修六、天行爲六、及事星宿、天行爲七、修長仙行、爲八、修長仙法、意欲捨無常苦、故求常樂、即第十六諦也トアリ、又方便心論、ヲ引キテ、有五智六鄣四濁、以爲經宗、五智者謂、聞智、思智、自覺智、慧智、義智、六鄣者不見鄣、二苦受鄣、三愚智鄣、四命盡鄣、五不好得姓鄣、四濁者、一瞋、二慢、三貧、四諂也、而明因中亦有果、亦無果、亦一亦異、以爲經宗ト見ヘタリ、蓋シ印度論理學ノ高妙精緻ヲ極メタルモノハ「ニヤ」ニシテ、歐洲ニ於テ、「インヂヤン」ロヂツクト云ヘハ、即チ「ニヤ」ヲ指スモノナリト知ラレタリ、

第四ハ若提子論師哲學ニシテ、六師哲家ノ一人ナリ——「百論」ノ疏ニ「六

師者一富蘭那其人計斷謂無君臣父子因果之義二俱舍利子其人計一切法自然爲宗三毘羅侂子其人計道不須修經八万劫自然而得如轉縷丸於高山縷盡則止四欽婆羅其人計身有苦樂二分現受苦盡樂法自出五迦羅鳩馱其人計亦有亦無應物起見他問有耶答云有他問無耶答云無六若提子其人計業決定得報今雖修道不能中斷也下アリ若提子論師ハ前ノ三派ニ反對シテ起リタルモノニシテ非有非無ヲ以テ主義ト爲シ一切法ハ一体ト言ント欲スレハ万有歷然タリ異体ト言ント欲スレハ彼此相待テ存在ス一切法一体ト云フモ非ナレハ一切法異体ト云フモ非ナリ二說己ニ非ナル以上ハ之ヲ和合シタル亦一亦異ノ論モ亦非ナリト云フベシ三說皆己ニ非ナルカ故ニ一切法ハ一体ト說クベカラズ異体ト說クベカラズ亦一亦異ト說クベカラズト主張シ寂默無言ヲ貴ブノミ此等ノ哲家之ニ繼テ印度哲學ヲ大成シタルモノハ釋迦牟尼ガ新發明ノ佛家哲學ト爲ス

(提提論師ノ百論ハ殊ニ異論ヲ破シカ爲ニ編述シタル書ナルカ初品三提提論師ノ百論ハ殊ニ異論ヲ破シカ爲ニ編述シタル書ナルカ初品凡淵起火自壁高巖寂寂常立持牛戒等是名善行世三勸沙婆所三實行世第求道師以自緘爲道第五師以投淵求聖第六師以起火爲道第七師以戒爲道第八師以寂爲道第九師以常立爲道第十師以持牛爲道第十一師以自緘爲道第十二師以投淵爲道第十三師以起火爲道第十四師以寂爲道第十五師以常立爲道第十六師以持牛爲道第十七師以自緘爲道第十八師以投淵爲道第十九師以起火爲道第二十師以寂爲道第二十一師以常立爲道第二十二師以持牛爲道第二十三師以自緘爲道第二十四師以投淵爲道第二十五師以起火爲道第二十六師以寂爲道第二十七師以常立爲道第二十八師以持牛爲道第二十九師以自緘爲道第三十師以投淵爲道第三十一師以起火爲道第三十二師以寂爲道第三十三師以常立爲道第三十四師以持牛爲道第三十五師以自緘爲道第三十六師以投淵爲道第三十七師以起火爲道第三十八師以寂爲道第三十九師以常立爲道第四十師以持牛爲道第四十一師以自緘爲道第四十二師以投淵爲道第四十三師以起火爲道第四十四師以寂爲道第四十五師以常立爲道第四十六師以持牛爲道第四十七師以自緘爲道第四十八師以投淵爲道第四十九師以起火爲道第五十師以寂爲道第五十一師以常立爲道第五十二師以持牛爲道第五十三師以自緘爲道第五十四師以投淵爲道第五十五師以起火爲道第五十六師以寂爲道第五十七師以常立爲道第五十八師以持牛爲道第五十九師以自緘爲道第六十師以投淵爲道第六十一師以起火爲道第六十二師以寂爲道第六十三師以常立爲道第六十四師以持牛爲道第六十五師以自緘爲道第六十六師以投淵爲道第六十七師以起火爲道第六十八師以寂爲道第六十九師以常立爲道第七十師以持牛爲道第七十一師以自緘爲道第七十二師以投淵爲道第七十三師以起火爲道第七十四師以寂爲道第七十五師以常立爲道第七十六師以持牛爲道第七十七師以自緘爲道第七十八師以投淵爲道第七十九師以起火爲道第八十師以寂爲道第八十一師以常立爲道第八十二師以持牛爲道第八十三師以自緘爲道第八十四師以投淵爲道第八十五師以起火爲道第八十六師以寂爲道第八十七師以常立爲道第八十八師以持牛爲道第八十九師以自緘爲道第九十師以投淵爲道第九十一師以起火爲道第九十二師以寂爲道第九十三師以常立爲道第九十四師以持牛爲道第九十五師以自緘爲道第九十六師以投淵爲道第九十七師以起火爲道第九十八師以寂爲道第九十九師以常立爲道第一百師以持牛爲道)

野史氏曰ク古來歴史ノ傳フル所ニ據レハ世界最モ早ク哲學ヲ創起シタルモノハ印度人ナリ之ニ次クモノヲ希臘人ト爲ス然レモ希臘哲學ノ元素ハ亦多ク印度哲學ニ基クモノアリ左レハ希臘ノ哲家ハ皆印度ヲ以テ上古聖人ノ道ノ出ル所ナリト爲シ此地ニ游學スルニ

至レリト云フ、而シテ印度哲學家ノ前後、繼起シテ、互ニ其新機軸ヲ出シ、宇宙ノ真理ヲ究ムルモノハ、實ニ印度人ガ高遠幽微ハ思想ニ富メルヲ證スルニ足ル、其起源、其發達、其進步ノ沿革ヲ詳ニシテ、以テ印度哲學ヲ闡明スルヲ、今日哲學家ノ大任ナリ、故ニ余ハ今マ諸書ヨリ折衷シ其概要ヲ摘ミテ、敘述スルモノ此ノ如シ。

獅巖曰、玄圃積玉、無非夜光、龍潭曰、支那周之時、老子、莊子、楊子、墨子、荀子、關尹子、孟子、告子、等哲學家、輩出爭其主義、爛然現出香園玉削世界來、當時印度哲學家、交互錯綜、出新機軸、彼此殆相肖、然而、支那哲學、至孔子、而大成之、印度哲學、至釋迦、而大成之、東西出一轍、亦可謂奇矣。

印度史卷一終

印度史卷二

第二篇

第一章

摩訶ノ法典及釋迦牟尼ノ時代

社會ニ革命アル時ハ、法典制定ノ必要アリ、法典制定ハ起ルハ其國民ノ氣象ノ發泄スル時タリ、而シテ此時代ニ於テ豪傑若クハ賢哲ノ士アルハ、必ラズ法典ヲ制定シ治安ノ要具ト爲サバ、ルハナシ、印度ニ於テハ日種月種ノ戰鬪アリテ、藩閥ノ積弊一洗シ、社會ノ革命終リシ後、三四百年即チ大約紀元前九百年ノ頃ニ當テ、法典制定ノ美學アリ、當時一箇ノ政事家ヲ生ス、摩訶實ニ其人ナリ、摩訶英敏ニシテ器識アリ、印度ノ法典ヲ制定シテ、社會ノ秩序ヲ整ヒタリ、是レヨリ、印度ノ文明ニ改進ハ、氣運ヲ興ヘ、國運蔚然トシテ勃興スルニ至レリ。

印度ハ上古ヨリ許多ノ列國ニ分裂シ、政府各々同シカラス、其組織モ亦

皆駁雜ニシテ、政治法律何レモ其体制ヲ異ニシタリシガ、摩訶ノ法典ヲ制定スルコト及ヒテ、列國ノ君主、概テ其律例ニ由テ政治ヲ施スニ至レリ、抑モ摩訶ノ法典ハ、梵名ニテ之ヲ摩那婆陀縷摩傜斯多度ト稱シ、其書十八卷アリ、其主趣ヲ三部ニ分ツ、即チ宗教ノ本務(第一)法律ノ執行(第二)罪過ノ補贖(第三)是レナリ、而シテ社會ノ關係、人民ノ權利義務等ニ至ルマテ細大遺スナク、之ヲ説明セリ、但シ此憲法ニ説ク所ノモノハ、摩訶ガ一己ノ理論ヲ以テ之ヲ創定シタルニ非ズシテ、多クハ其當時ニ於テ實行シタルモノ、若クハ目撃シタルモノヲ記シテ、之ニ意見ヲ附セラレタルモノナリト云フ、

此法典ニ由テ、當時ノ政体ヲ考察スルニ、印度ノ政府ニハ、凡ソ七大臣アリテ百政ヲ辦理セリ、第一ニ司法大臣、第二ニ營生大臣、第三ニ大藏大臣、第四ニ軍務大臣、第五ニ外務大臣、第六ニ教務長、第七ニ預言長是ナリ、此等ノ諸大臣ハ他ノ百僚ト共ニ王ヲ輔佐シテ國政ヲ掌ル、而シテ政府ノ歳

費ハ租稅ヲ以テ之ヲ支出セリ、但シ租稅ハ、都テ穀物ヲ以テ之ヲ収ムルノ例規ニシテ、所謂年貢ナリトス、田地ノ主之ヲ収稅者ニ収メ、収稅者ハ、特許ヲ得タル官吏ヨリ成ル、然レモ租稅貢賦ニモ、亦自ラ一定ノ法アリテ國王ト雖モ濫ニ之ヲ徵収スルヲ得ズ、収稅者ノ如キハ隨意ニ之ヲ攫取スルヲ得ザルハ勿論ナリ、此法ハ摩訶ノ制定シタルモノニシテ、地味ノ厚薄、勞力ノ多寡等ニ由テ其稅額ヲ定ムルコトアリ、印度ハ古來、刹帝利種ノ人士、國土ヲ分割シテ之ニ據リ、自ラ其地ノ王ト爲リテ之ヲ統治シタルモ、土地ハ、皆其王ノ私有ニ歸シタルモノニ非ズシテ、農民ニ屬セリ、摩訶ノ法典、己ニ此理ヲ明ニセリ、其言ニ曰ク、——古代ノ事理ニ通曉セル聖賢ハ、布利底毘——土地——ヲ以テ布利菟王ノ配偶ト爲シ、諸ノ耕地ハ、悉ク最初ニ之ヲ開墾セル人々ノ所有ナリト決定ス——トアリ是ヲ以テ農民ノ租稅ヲ納ムルハ、之ヲ借地稅トシテ納メタルニ非ズシテ、全ク國王ノ保護ニ報センカ爲ニ之ヲ納ムルモノナリ、尙ホ其法典

ノ書ニ由テ、之ヲ考察スルニ、印度ノ地ハ、古來許多ノ鄉村——波縷伽尼——ニ分テ、各鄉村ノ人々皆一和シテ其土地ヲ耕シ、郷長及ヒ其他ノ屬吏ヲ以テ公共ノ事務ヲ處理セシメタリ、即チ租稅ヲ政府ニ納メ、鄉村内ノ費用ヲ支辨スル事、及ビ初審ノ裁判、輕罪ノ責罰等ハ、皆其鄉村ノ人々ニ爲シタリキ、

法律ノ施行ニ至リテハ、己ニ政府ニ司法部アリテ、法廳ヲ十八種ニ分テ、法官ヲ分置シテ民事、刑事百般ノ案件ヲ審理セシム、而シテ法官ハ情狀ヲ訊問スルニ方リテ、其公平無私ヲ表センカ爲ニ常ニ廳外ニ出デ、而シテアタリ、衆人ノ前ニ於テ、之ヲ爲セリ、又案件ノ大事ニ涉ルモノ、或ハ是非ノ決シ難キモノアレハ、之ヲ國王ニ上申シ、國王ハ重臣ト共ニ之ヲ審理セラレタリ、訴訟ノ判決ハ都テ摩督ノ律例、又ハ其他ノ法律書ヲ案シ、種族ノ古例ニ照シテ、之ヲ行ヒタリ、但シ律例ニ明文ナキハ、國王自ラ之ノ判決セラレタリキ、

宗教ノ事モ、亦大ニ摩督ノ苦心セラレタルモノニテ、其法典ニハ、婆羅門教ノ五誠十誡及ヒ其他ノ諸誡ヲ掲ケ、婆羅門ノ教法ヲ改良シ且ツ之ヲ鞏固ニシ、由テ以テ當時ノ人心ヲ正路ニ誘導セシメタリキ、

當時印度ハ、政治法律及ヒ宗教大ニ整理シ、文化著ルシク進歩シタリ、殊ニ商業學ノ如キハ、最モ進歩シ、一般ノ商人ハ海陸ニ於テ貿易シ、其中ニハ許多ノ銀行アリ、其銀行ニハ、皆日用帳、日記帳及ヒ大帳等ヲ用ヒ、其記載ニハ單複二式ヲ用ヒタリ、彼等又海陸ノ保險ヲモ爲シタリキ、

其後チ印度ノ國勢漸ク衰運ニ傾キ、政治法律ハ、勿論、宗教モ亦腐敗シタル時ニ當リテ、(大約紀元前六百年ノ頃)釋迦牟尼起テ印度哲學ヲ興シ、宗教ノ改革ヲ謀リ、之ト同時ニ政治法律モ舊來ノ面目ヲ全變シ、一代ノ思想ヲ更新セリ、是ニ於テ印度ノ國運、蒸蒸日上、如ク、印度新文明ノ精神ニ一段ノ歩武ヲ進メタリ、彼ノ八萬四千ノ經卷ノ中王法政論經ノ如キハ、己ニ政事家ノ龜鑑ト爲ルヘキモノニシテ、印度ノ文明前後此

時代ヲ以テ最モ隆盛ト爲ス、

王法政論經ニ帝王ノ過失ト功德トヲ説明セリ其言コ曰ク——王ノ過失ハ凡ソ十種アリ王若シ其過失ヲ遂グルルキハ假令ヒ大府庫大臣佐大軍衆アルモ歸化スベカラズ何等ヲ十ト爲ス一ニハ種姓不高二コハ不得自在三ニハ立性暴惡四ニハ猛利憤發五コハ恩惠賒薄六コハ受邪佞言七コハ所作不順古先王制八コハ不願善法九コハ不鑒是非勝劣十コハ一向縱蕩專行放逸ナリ——ト之ニ反スル十事ヲ以テ帝王ノ功德ト爲ス同經ノ中ニ——王ノ衰損門王可愛法及起發王可愛法之道等ノ說アリ起發王可愛法之道凡五種アリ其一ハ恩養蒼生二ハ英勇具足ナリ恩養蒼生トハ王者ガ其心ニ足ルヲ知リテ能ク謹慎ヲ爲シ無貪自淨ノ法ヲ行ヒ庫藏ノ貨財ヲ散シテ貧窮孤露ニ給施シ自ラ柔和忍辱ヲ主トシ軟言ヲ以テ國中ニ曉諭シ又群臣ノ中法ヲ違犯シテ免ルベカラザルモノアルキハ罪ヲ量リテ矜恕シ理ニ順テ之ヲ罰スル等ヲ言フ又

英勇具足トハ國王タルモノ、神策墮ズ、武器圓滿ニシテ未ダ降伏セザルモノヲ降伏セシメ己ニ降伏セルモノヲ攝養スル等ヲ言フト——アリ當時己ニ政事家ノ議論ヲ發明シ王者ノ本務ヲ論スルモノ此ノ如シ是時ニ當テ印度ノ文明、駭々乎トノ進歩シ、開化四方ニ敷及セリト云フ、

獅巖曰、道在邇、事在易、

龍潭曰、摩督憲法制定之功、不讓羅馬帝ガイスタチウアン牙士尼地チニアン練釋迦風化之力、與フ

蘭ク克ク麟リン相類、

第二章

外人ノ侵入及摩竭陀國ノ革命

紀元前五百十八年印度ノ衰ヘシ頃波斯國王ダリウス太流士タクシス英武蓋世、四方ヲ經

外人ノ侵入及摩竭陀ノ革命

略シ、遂ニ印度ニ侵入シ、印度河岸ノ地ヲ併領セリ、太流士ハ、其地ヨリ稅
ヲ收メ、每歲獲ル所ノ貢賦ハ、波斯全國ノ租稅ノ三分一ニ及ビ、クリト云
フ、其收額ノ多キヲ亦知ルベシ。

是ヨリ百八十四年ノ後、希臘ノ馬基頓王、亞歷山太、威武ヲ亞細亞地方ニ
輝カシ、波斯ヲ征服セシガ、紀元前三百二十七年ニ至リ、自ラ精兵十二萬
ヲ率ヰテ、東方ニ入り、亞特ニ於テ印度河ヲ渡リ、ブンジャブノ地ニ侵入
セリ、印度諸國ノ王侯兵ヲ出シテ、之ヲ防キシカハ、結局皆敗折シテ、印度
ノ地、亞歷山太ノ爲ニ併略セラル、但シ保魯斯王ノ如キハ、頗ル勇武ニシ
テ屢々西軍ヲ破リ、大ニ亞歷山太ニ抗敵セシカハ、王深ク其ノ勇氣ニ感
シテ終ニ之レニ其侵地ヲ返セリト云フ、然ルニ亞歷山太ハ、尙ホ進ミテ
當時強大ノ聞アル摩竭陀國ヲ攻メント欲セシガ、兵士戰ニ倦ミテ皆之
ヲ好マザリケレハ、遂ニ其軍ヲブンジャブヨリ班スコニ決シ、印度河ヲ
渡リ、波斯ニ凱旋シタリ。——其後四年ニシテ亞歷太崩シ、其勇將塞留

哥斯巴比倫及印度ノ侵地ヲ獲テ、之ヲ占領セリ。
是時ニ當テ、印度ニ於テハ、一革命ヲ生ジタリ、摩竭陀國ハ、紀元前七百年
ノ頃ヨリ、那伽——龍——朝ノ王之ヲ統治シ、亞歷山太侵入ノ時ニ及ビ
シガ、其時代ノ王ヲ難陀ト稱シ、其母后ハ、首陀種ノ婦人ナリ、難陀王ハ、外
寇ノ起ルト聞キ、數萬ノ騎兵ヲ出シ、數千ノ兵士ヲ以テ、西軍ヲ防カント
セリ、然ルニ亞歷山太ノ軍ヲ還セシヨリ二年ノ後、難陀ハ、大臣ニ弑セラ
レ、其國ハ、闍度羅瞿布多ノ有ト爲レリ、闍度羅ハ、首陀種ノ人ニシテ、嘗テ
保魯斯ノ軍ニアリテ希臘兵ト戰ヒタル勇將ナリシモ、後チ亂ヲ作シテ
諸國ヲ攻メ終ニ摩竭陀國王ノ位ヲ篡ヒ、毛利耶朝ヲ立ルニ至レリ、然ル
ニ塞留哥斯兵ヲ率ヰテ、再タビ侵入セシカハ、闍度羅王大軍ヲ以テ、之ヲ
禦キシガ、塞留哥斯故アリテ之ト和シ、兵ヲ斂メテ國ニ歸リ、一哲學士
——其名ヲメガステテ、稱ス——ヲ遣ハシテ公使ト爲シ、首府巴里慕
士羅ニ駐在セシメタリ。

闍度羅王ハ元ト是レ首陀種ナルヲ以テ刹帝利種ハ是時ヨリ摩竭陀ニ於テ其威ヲ振フヲ能ハズ國勢衰廢セリ而シテ婆羅門ハ其權威ヲ滅殺スルト同時ニ佛教徒ハ勢ヲ得波利語（巴利語）モ摩竭陀ノ方言（方言）ニ用ヒテ其經論ヲ著ハシ盛ニ佛教ヲ弘布スルニ至レリ

龍譚曰天地尙空秦日月山河不見漢君臣

獅巖曰印度地上之佳肉也耳其大開口者豈啗大流士亞歷山太帖木兒克雷武而已哉

第三章

阿輸伽ノ仁政及諸朝ノ興廢

紀元前三百年ニ闍度羅王崩シ太子密親羅（シロト）布多立テ王ト爲ル密親羅

世ヲ治ムルコト二十五年ニシテ崩シ太子阿輸伽（アシュカ）ニ阿育（アユ）云フ無憂ノ義ナリ（之ニ嗣ク）

阿輸伽王仁政ヲ以テ民ヲ懷ケ頗ル其版圖ヲ擴張シ國疆ニ石柱ヲ建テ之レカ標ト爲シ其柱ニハ波利語ノ銘ヲ識シ又所々ノ巖石ニ其聖諭告示ヲ刻セリ今日ニ至ルモ尙ホ存スルモノアリト云フ阿輸伽深ク佛教ヲ信シ之ヲ以テ國教ト爲シ舊來ノ弊政ヲ改革シテ德政ヲ施セリ刑殺ノ法ヲ除キ國中ニ病院ヲ建テハ施藥館ヲ設ケ道路ノ側ニ樹木ヲ植エ井ヲ掘ラシメ且ツ諸所ニ佛堂（窠）觀婆（ウパヤシ）ニ方墳（マウラ）ニ曼陀羅（マンダラ）ニ壇（タラ）ニ等ヲ建設シ許多ノ窟社ヲ造ラシメタリ佛經中ニ著名ナル王舍城（ワシヤ）ニ羅閱祇伽羅（ラヘカ）ハ此國ニアリ印度史附錄佛國記ヲ參觀スベシ是ヨリ先キニ紀元前二百六十年佛教ノ諸大法師大會ヲ開キテ佛說ヲ結集シ布教ノ方法ヲ議定セリ是レヨリ佛教大ニ四方ニ弘マリ終ニ支那ニ入ル（或ハ云フ秦ノ始皇ガ囚ヘタル所ノ沙門室利房ハ即チ其

傳道士ナルベシト——當時迦奴侍國王ハ婆羅門ヲ奉信セシニ依リ、許多ノ婆羅門、彼地ニ逃避セリト云フ。

阿輸迦王ハ、治世三十七年ノ後、即チ紀元前二百二十六年ニ崩シ、其國ハ、三子之ヲ分割セシガ、互ニ其權ヲ爭ヒテ止マズ、僅々タル二十一年間ニ七王——或ハ云フ十王——位ニ登ルニ至リ、同シキ百九十五年ニ及ヒテ、毛利耶朝亡ビ、首陀種ノ人士之ニ代ル、之ヲ珊伽朝ト稱ス、血統相襲ク、十世、百十二年ニシテ亡ビタリ、珊伽朝ノ時ニ、拔德德里亞人屢々北天竺ニ侵入セリ、一

珊伽朝亡ビテ、安度羅朝之ニ代ル、是レモ亦首陀種ナリシカ、二十九世、相傳ヘテ紀元四百三十六年ニ至ル、此朝ニ毘丘蘭亞提查ト稱スル王アリ、紀元前五十六年ニ王位ヲ踐ミ、南天竺ニ瓦崙具爾ヲ建ツ、其府ハ、ゴダベリ河ノ南ニアリ、印度ノ文學、是ニ於テカ盛大ヲ極メタリト云フ、(加理陀斯ノ戯曲詩ノ如キハ、今日尙ホ諸國ニ傳ハリテ、人皆之ヲ稱讚ス、)——此

朝ノ王ハ、皆婆羅門教ヲ奉シタルカ故ニ、婆羅門ハ往時ノ權勢ヲ恢復シテ大ニ佛教徒ヲ窘メ、之ヲ芟除センコトヲ圖レリ、佛教是ヨリ大ニ衰フ、王ノ時ニ北方ノ種族、印度ノ西部ニ來寇シ、終ニ其地ニ住セリ、此時ニ耶婆那——泰西人——又來侵セリ、

紀元三百十八年、迦奴侍ノ王、南ニ進ミテ諸國ヲ兼併シ、瞿侍刺士ニ入り、具布多朝ヲ立ツ、摩竭陀モ大半之ニ歸セリ、此朝ノ立チシヨリ九年ノ後、ケ、耶婆那人、海上ヨリ突進シテ終ニ榜加拉ノ西南ナル病利沙ヲ畧取シ、百四十六年ノ間之ヲ占領セリ、

具布多朝ハ、四百九十八年、相傳ハリシガ、其後ヲ復タ、此名ヲ聞カズ、或ハ云フ、此朝ハ、克什米爾ノ瞿那爾陀朝ト合セリト、——安度羅ノ東ニ榜加拉アリ、其勢益々強大ト爲ル、其王統ヲ巴拉朝ト稱ス、又安度羅國ノ起レル初メニ、韃靼人、克什米爾ニ侵入シテ國ヲ建ツ、之ヲ瞿那爾陀朝ト稱シ、佛法ヲ奉ゼリ、此朝後世ニ至リテ、一タヒ衰ヘタリシガ、紀元四百五十年

ニ復再々其勢力ヲ復シ、遂ニ南征シテ錫蘭嶋ニ入リシト云フ、此外ニ
數多ノ強國アリテ、各々久シク獨立セシモ、終ニ皆回教人ニ亡ボサレタ
リ。

（又南天竺ニ於テハ、上古ヨリ他國爾人等アリテ、諸所ニ小國ヲ建テ、部
落ヲ成セシマ、羅摩ノ南征ヨリ已來、亞利亞人種ノ此地ニ移ルモ、多
ク、次第ニ之ヲ併領セリ、是ニ於テ中天竺ヨリ來リテ國ヲ建テタルモ
ノ多シ、般提耶朝、兆羅朝、知羅朝、查留伽朝等ヲ以テ最大ナルモノトス、
皆尸婆神ヲ奉セシモ、後世ニ至リテ禪那教ヲ奉セリ、般提耶王ハ羅馬
奧古斯太ニ使者ヲ遣ハセシト云フ、紀元一千八百八十二年、迦羅部樓耶
ト名アル人、查留伽朝ヲ顛覆シテ、其都ニ至リ、然ルニ盧薩巴ト稱スル
羅門アリ、琳愛國教ヲ宣布シテ、其都ニ至リ、大ニ權勢ヲ握ニシ、遂ニ其
王ヲ廢シ、此時ニ當リテ、回教人又南天竺ニ入ルル也）

第四章

馬毛度、印度ヲ征畧ス、

紀元六百二十二年、亞刺伯ニ回々教勃興シ、其教徒、教祖馬哈默德ノ教ヲ
以テ、唯一ノ遺訓ト爲シ、刀劍ヲ以テ弘教ノ方便ト爲シ、次第ニ其版圖ヲ
擴張シ、早ク己ニ一瀉千里ノ勢ニ乘シテ、波斯ヨリ中央亞細亞ニ及ビタ
リ、紀元七百十一年、ブツソラノ鎮台其兵ヲ遣ハシテ、印度ノ地ヲ畧取セ
シム、國王ノ一族多ク戰死シ、二王女ハ送ラシテ、回教王病摩爾ノ後宮ニ
入ル、是レテ回々教徒ノ印度軍ヲ破リタル嚆矢ト爲ス、然レモ回教徒ハ、
久シカラズシテ羅侍布土人ニ驅逐セラレタリ、
西曆九百七十七年ニ、回教ノ勇將士武克土王、阿富汗斯坦ノ祇壽尼ヨリ
進ミテ、ポンジャブノ地ヲ侵シ、諸所ニ回教堂ヲ建テ、巨多ノ財寶ヲ掠メ
テ去ル、然ルニ其後、ポンジャブノ王、戰ヲ挑ミタルニ依リ、彼レ亦益々侵
入シテ、遂ニ之ヲ敗リ、爾後每歲此地ニ貢賦ヲ課セリ、其後紀元九百九十

七年、士武克土壬卒シ、長子馬毛度其地ヲ領シ、二年ノ後、自ラ蘇爾丹ト稱セリ、

馬毛度、勇敢ニシテ武略アリ、西曆千年八月自ラ一萬ノ騎兵ヲ率ヒテ祇壽尼ヲ獲シ、ブンジャブニ入ル、是ニ於テ拉保爾ノ王塞巴爾、同年十二月二十七日、一万二千ノ騎馬ト三万ノ歩卒トヲ以テ逆ヘ戰ヒシガ、馬毛度ノ敗ル所ト爲リ、王及ヒ其一族皆擒ニセラル、馬毛度ハ塞巴爾ノ毎歲貢賦ヲ納レンコトヲ約セシコト由テ、之ヲ釋シテ其地ヲ還セリ、此時羅侍布土王毘侍萊モ亦馬毛度ニ以上ノ如キ盟約ヲ爲セシガ後ニ其約ニ背キシカハ、同シキ西曆四年ニ、馬毛度ノ爲ニ攻メラレ、終ニ其地ヲ奪ハレタリ、翌年、チナフ河ノ左岸ナル牟爾丹ノ酋長叛キ、塞巴爾王之ヲ援ク馬毛度、復タ來リ戰ヒ、遂ニ之ヲ戡定セリ、然ルニ馬毛度ノ信任シテ、其侵地ヲ託セル西瓦克巴爾王ニ、印度人ニモ亦尋テ叛キシカハ、馬毛度來リ之ヲ禁錮シ、同キ千八年ニ、馬毛度亦來リ塞巴爾王ヲ罰セリ、是レ牟爾丹ノ

酋長ヲ助ケシヲ以テナリ、是ニ於テ塞巴爾王援兵ヲ印度諸國ノ王ニ請ヒシカハ、諸國之ニ應シ、四方ノ志士、皆金ヲ投シテ之ヲ資ケ、婦人モ亦其裝飾ノ金銀ヲ鎔シテ之ニ贈レリ、北方ノ山人數万、復タ來リ加ハリ、其勢當ルベカラズ、馬毛度、其鋒前ナキヲ視テ、營壘ニ入ル、其銳氣ヲ避ケ、敵ノ來襲ヲ待チ居レリ、己ニシテ對陣四十日ニ及ビシガ、印度兵進ミテ之ヲ襲フ、馬毛度、石油彈丸ヲ投シテ、火箭ヲ射リ、印度兵ヲ乱シ、終ニ大ニ之ヲ敗リ、斬滅頗ル多シ、馬毛度ノ軍進ミテブンジャブニ入リ、其聖社ヲ毀テ、金銀財寶ヲ掠メテ凱旋セリ、
西曆一千十一年、馬毛度復タ來リ、特里ノ側ナル多尼沙爾ニ至聖ノ地ニ入リ、之ヲ取テ、掠奪ヲ縱ニシ、社堂ヲ傾覆シ、偶像ヲ破毀シ、其中ノ至尊神儒瞿索摩ヲ擄ヘテ本國ニ歸リ、之ヲ市街ニ放擲シテ、人ヲシテ之ヲ蹂躪セシメタリ、是レ偏ニ馬毛度ノ痛ク偶像異宗ヲ憎惡スルニ出デタル暴行ナリ、

一千十七年、馬毛度迦奴待ヲ征服シ、同シキ二十一年、亞刺幡拔土ノ南ニ到リ、迦林伽ニ入ル、其王嘗テ伽奴侍王ヲ害シタルヲ以テナリ、然ルニ王逃避セシヲ以テ馬毛度再ビ伽林伽ニ入り、遂ニ之ヲ鎮壓セリ、又馬毛度ハ地方ノ海岸ニツムナドノ大社アリテ、重寶ヲ藏スルヲ限ナシト聞キ、之ヲ破滅セント欲シ、翌二十四年ニ祇壽尼ヲ發シ、進ミテ瞿侍刺土ニ入リシカ、其王遁走セリ、馬毛度其大社ニ至リ、羅侍布土人ト戦ヒ、三日ニシテ終ニ之ヲ敗ル、馬毛度其社ニ入りテ、神像ノ鼻ヲ破毀セシガ婆羅門ノ教徒、其偶像ヲ贖ソフヲ請フ、馬毛度之ニ答ヘテ曰ク、我ハ偶像破ノ名ヲ後世ニ遺サント欲スルモノナリ、豈偶像販賣者ト稱セラル、トヲ欲センヤ、ト其破毀シタル中ニハ無數ノ珠玉アリケレハ、皆之ヲ取レリ、——其後六年ニシテ、馬毛度病ヲ以テ崩ス、

獅巖曰、馬毛度如暴風、剛者、所爲豈如此哉、

第五章

瞿離ノ侵入及諸朝ノ興廢

馬毛度崩セシヨリ、祇壽尼朝漸ク衰へ、西曆一千八百八十六年ニ至リテ、内外ノ領地、委ク瞿爾ノ帝ガイヤスニ歸セリ、同シキ百九十一年、瞿爾帝ノ弟瞿離、印度ニ侵入セシガ、羅侍彌爾ノ王布利底萊、兵ヲ起シ、特里ノ王ト力ヲ戮セ、索爾素底河邊ニ迎へ戦ヒテ、大ニ之ヲ破レリ、同シキ九十三年、瞿離其耻辱ヲ雪カント欲シ、十二万ノ騎兵ヲ率ヒテ再ビ侵入セシガ、其勢雄壯ニシテ、當ルベカラズ、印度ノ諸王協力同心シテ、之ヲ防キシカ、終ニ大ニ敗衄セリ、是ニ於テ、回教人、劫奪屠戮ヲ縱ニセシガ、翌年、瞿離復タ印度ニ來リ、深ク、伯那列斯ノ地方ニ入り、到處偶像ヲ毀テ、其社堂ヲ以テ回教堂ト爲セリ、

翌年ガイヤス崩シ、瞿離立テ王ト爲ル、然ルニ千二百五年ニ至テ、瞿離帝、不幸ニシテ兇賊ニ弑セラレ、其甥馬毛度帝位ニ登レリ、當時印度ノ領

地ハ、克土武クツブ——本ト土耳其ノ奴隸ナリシト云フ——ト那西爾ナシールノ兩將
之ヲ分治シタリシガ、馬毛度ノ位ニ即クニ及ヒテ、克土武ハ封セラレテ
王ト爲リ、其都ヲ特里ニ定メタリ、克土武王ノ血統相傳フルヲ十世、八十
年ニシテ、西曆千二百八十八年ニ至リテ亡ビ、祇爾キール侍朝興ル、

祇爾侍朝ノ始王ヲシラルト云フ、沙麻羅王ノ子ナリ、前朝ノ時ヨリ蒙古
人時々入寇セシガ、此王ノ世ニ至リテ、復々來リ侵セリ、王擊テ之ヲ退ク、
其中ノ一將ハ、三千ノ蒙古兵ヲ以テ王ニ合シ、其女子ヲ娶リテ回教ニ入
リタリ、

其後チ千二百九十四年、王ノ甥亞拉南アラナムニ進ミテ、德干デカンヲ侵シ、耶陀婆王ヤトバヲ
征服シテ、莫大ノ貨財珠玉ヲ掠メテ還レリ、終ニ王ヲ弑シテ自ラ立ツ、蒙
古人大舉シテ侵入セシガ、王擊テ之ヲ退ク、亞拉復々南征シテ武畧ヲ耀
セリ、其後蒙古人、屢々入寇セシモ、ブンヤブノ總督土具碌トクロク之ヲ拒キ王
ヲシテ北顧ノ憂ナカラシム、千三百二十一年、反臣アリ、帝ヲ弑ス、土具碌、

馳セ來リ、之ヲ誅シ、國人ノ請ニ應シテ王位ニ登リ、土具碌朝ヲ立ツ、蒙古
人、又大舉シテ來リ攻メ、大ニ侵略ヲ逞クシテ、特里ニ至ル、王乃チ金ヲ投
シテ其地ヲ贖ヒシカバ、蒙古人漸ク去ル、

土具碌、都ヲ南天竺ニ遷シ、特里ノ人ヲシテ南天竺ニ移ラシム、老幼途ニ
死スルモノ、甚々多シ、王崩シテ、徒弟匪路斯ヒロス立ツ、匪路斯、一邑ヲ特里ノ近
傍ニ作り名ケテ、匪路差婆度ト云フ、——是レマデ、回教王ハ、皆苛政ヲ行
ヒテ印度人ヲ虐待セシカ、匪路斯王ハ、頗ル之ト反シ、大ニ力ヲ民事ニ盡
シタリ、水道ヲ開キテ、茹牟那及蘇都列侍ノ諸河ニ通シ、灌漑ノ便ヲ謀ル
カ如キ是レナリ、——土具碌ノ朝、七十餘年、相傳ヘテ馬毛度王ニ至ル、

獅巖曰、興亡如反覆手、

龍譚曰、寧知天下事、變化紛似雲、

第六章

帖木兒ノ來侵

馬毛度ノ時ニ當テ、印度大ニ乱レ、國內騷然タリ、摩爾汗ノ從弟沙賴克ハ、
獨立シテ牟爾丹ニ割據シ、國裂ケテ二ト爲ル、此時中央亞細亞ノ皇帝帖
木兒、印度ニ侵入セリ、

帖木兒ハ、千三百三十三年五月ヲ以テ生レ、其父ハ布哈爾ノ西南カルシ
府外ノ地ニ王タリ、帖木兒幼ヨリ聰明、勇毅ニシテ機敏、裁決流ル、ガ如シ、
身ヲ艱難流離ノ中ニ置キ、望ヲ將來ニ屬シ、自家ノ威力ヲ養フガ爲ニ、兵
制ヲ整備スルヲ以テ先務ト爲シ、成吉思汗ノ律例ヲ採用シテ編兵ハ
基礎ト爲シ、撒馬爾罕ヲ以テ其都城ト爲シ、次第ニ四方ヲ經營シ、終ニ中
央亞細亞ノ帝王ト爲レリ、是ニ至テ印度ノ國內乱ルヲ聞キ、九萬二千ノ
兵ヲ募リテ以テ遠征軍ニ充テタリ、(九萬二千ノ數ハ馬哈默德ノ位號ト
同數ナリ、是レ帖木兒ノ故ヲニ此數ト
信取セリ、兵士ヲシテ吉兆ナリト云フ)此遠征軍中三萬騎ハ、右翼ニシテ、其列

隊ハ、現屯所、干達哈爾ヲ發シ、所羅門山間ヨリ進ミテ印度河ヲ越ヘ、牟爾
丹府攻撃ノ命ヲ受ケタリ、當時牟爾丹ハ印度ニ於テ大都ノ一ナレハ之
ヲ畧取ノ以テ交戦ノ根據ト爲サント欲セシ也、故ニ右翼ノ列隊ハ、衆軍
ニ先テ發シ、左翼三萬騎モ布哈爾ヲ發シ、印度河ヲ渡リ、ラゴルノ管領
ヲ襲撃スルニ命ヲ受ケタリ、帖木兒自ラ三萬二千ノ兵ヲ督シ、千三百九
十八年三月ヲ以テ、撒馬爾罕ヲ發シ、テルメッドニ到リ、浮橋ヲ架シテ
亞模河ヲ渡リ、進ミテ拔幹山與都克士ノ支脈ヲ踰ヘインドラブニ赴キ、
加非利斯坦ヲ攻撃セリ、此際帖木兒ハ、精兵一萬騎ヲ率テ、與都克士ノ支
脈ヲ繞テパルドイスニ出テ是ヨリ與都克士ニ向ヒ敵ノ不意ニ出テ、
ト欲シ、最モ險隘ノ地ヲ冒シテ進ミタリ、然ルニ夏日山中ノ積雪稍ヤ柔
滑ナルヲ以テ馬行シテ能ハサルガ故ニ、帖木兒ハ日間ノ進行ヲ停止シ、
獸毛ヲ敷テ馬ヲ立テ炎熱減シ、雪層漸ク堅キヲ俟テ、夜ヲ冒シテ運行シ、
忽チ山峯ニ達スルヲ得タリ、己ニシテ諸軍絶壁ヨリ或ハ伏シテ、雪層

ナ背ニシ或ハ糸繩ニ絶シ、各々其能クスル所ニ任セテ山麓ヲ下レリ、
(但シ帖木兒ハ、曳繩ヲ附着シタル一籃輿ニ乘シ兵士前後ヨリ保持シテ下レリト云フ源九郎鶴越ノ師ノミニ非ス)帖木兒山ヲ超
 屠戮シ鮮血淋漓、山野ニ溢レタリ、是ヨリ便路ヲ取リ、カウーシヲ經テ哈
 布爾ニ赴キタリ、九月哈布爾ヲ發シ、十月印度河ヲ渡リ、更ニトールシエ
 ム河ニ向ヒ、尋テドハンエナブ河ヲ過ギ、トルンハ府ニ達セリ、
 牟爾丹ノ攻圍ハ、六ヶ月ノ久シキニ涉リシガ、城兵饑餓ニ堪ズシテ竟ニ
 出デ、降レリ然ルニ、當時霖雨連日、茹牟那河水溢レテ岸ヲ浸シ野生ノ
 馬匹飼草及水質ノ變換及ヒ温氣ニ堪ズシテ惡疫ヲ發シ、漸次ニ斃死シ
 テ殆ント一馬ヲ餘サザルニ至レリ、己ニシテ帖木兒ノ兵來リ進ムト聞
 キ遽ニ城塞ヲ發シ、ピア河岸ニ到リ、本軍ニ合セリ、時ニ右翼隊中復タ一
 ノ馬匹ヲモ存セズ或ハ徒步シ或ハ牛背ヲ假リ、其狀慘然タリ、是ニ於テ、
 帖木兒ハ命シテ軍馬三萬頭ヲ給シ、以テ其舊ニ復セシメントセリ、諸軍

ピア河ヲ渡ルニ或ハ舟筏ヲ假リ、或ハ游泳シ、爲ニ三日ヲ費セリ、帖木兒
 是ヨリピアノ右岸ヲ溯リ、一面ニハ以テ左翼ト會合スルカ爲ニシ、一面
 ニハ以テチバルプール府民誅罰ノ爲ニセリ、曩キニ蒙古軍ノ牟爾丹ヲ
 圍ムヤ、特ニ一萬騎ヲ分チテチバルプールニ屯セシガ、該府民ハ牟爾丹
 ノ蒙古軍危急ナリト聞キ、之ヲ慶殺セリ、帖木兒其罪ヲ問ント欲シテ此
 舉アリ、然ルニ右翼ノ兵不幸ニシテ艱難ニ遭遇シ、遂ニ其志ヲ達スルコ
 能ハサリキ、因テ道ヲ轉シテ南行セリ、
 チバルプールノ住民ハ、帖木兒ノ來襲スルト聞キ、平原ニ位セルバドニ
 ルノ堅城ニ據リテ固守セリ、十一月、帖木兒親テ一萬騎ニ將トシテバト
 ニルニ向ヒ、其餘ノ兵ニハ輜重ヲ附シ、直道ヨリ特里ニ向ハシメバトニ
 ルヲ拔キ、財貨ヲ掠メテ師ヲ班シ、セレスナイ及フアナハマニ赴キ、十
 二月サミチニ於テ、本軍ニ會セリ、帖木兒此ニ陣スルヲ數日以テ糧車ノ
 到ルヲ候テリ、己ニシテ左翼亦本軍ニ合ス、左翼ノ列隊ハ、哈布爾ヲ發セ

シ以來、別路印度ニ向ヒ、沿途ノ種族ヲ征服シ、都府ヲ攻略スルヲ枚擧スルニ違アラズ、蓋シ該翼隊ハ亞特ニ於テ印度河ヲ渡リ、ラゴルニ直行セシモノト思ハル。

帖木兒ハサミチヲ發スルニ臨ミ兵ヲ分チテ三隊ト爲シ、本軍ハ直道ヨリ左右兩翼ノ列隊ハ、支路ヨリ特里ニ向ヒタリ、本軍ハアツセンチトグロクスルト經テパニパトニ達シ右翼ハ茹牟那ノ河岸ニ築キタルドヂエハンチマイ城攻略ノ命ヲ受ケカニグンチ發シ該城ヲ拔キ、再タヒ本軍ニ來會セリ、而シテ全軍ヲ擧ゲテ牟茹那河ヲ渡リルニ府ニ向ヒタリ、蓋シ府外良好ノ牧場多クハ之ヲ掠取スルハ、騎兵ニ於テ、缺クベカラザル所ナリ、帖木兒ノルニテ略取スルヤ、再タビドヂエハンチマイニ歸リ二十八日ヲ以テ入城セリ、是ニ於テ帖木兒ハ將士ヲ會シ特里攻略ノ事ヲ議セシカ衆議ノ決スル所ニ據レハ、先ツ大ニ糧食其他軍用品ヲドヂエハンチマイ城ニ蓄ヘ置キ、然ル後ニ特里封鎖ノ工ヲ起スニア

リ、乃チ蒙古人ノ慣例ニ依リ、兵ヲ四派ニ分チ命スルニ糧餉ハ掠奪及ヒ特里府蹂躪ノ事ヲ以テシタリ。

此時ニ當テ、帖木兒ハドヂエハンチマイ城外ヲ視察シ交戦ニ便ニシテ敵軍ヲ誘致シ得ベキ地ヲ搜索セリ、適々一將アリ、帖木兒ニ謂テ曰ク、印度河ヲ渡リシヨリ、以來印度人ノ擒ニセラレテ軍後ニ繫カルモノ已ニ十萬人、概チ拜像ノ異宗ヲ信セリ、希伯來人アリ、一則特里ノ蘇爾丹馬毛度ト戦ヲ交ユルニ及ベハ、彼レ機ニ乘シテ脱逸シ、我ニ抗敵スベシ、且ツ聞ク所ニ據レハ前日印度ノ歩兵一萬及騎兵若干、群ヲ率キテ特里ヲ出テ戰ハント欲セシ時ニ、俘虜ノ喜ビ眉目ニ顯レタリ、ト蓋シ其喜ビシ所以ノモノハ、不日縛ヲ脱スルノ冀望アル所以ナリ、然ルニ蒙古人ハ、却テ之ヲ目ジテ不軌ヲ謀ルト爲セリ、帖木兒之ヲ信シ嚴命ヲ傳ヘテ悉ク囚徒ヲ屠ラシメタリ、嗚呼俘虜ノ喜悅ハ、屠戮ヲ招クノ原因ト爲リ、十萬ノ生靈、一令ノ下ニ白刃ニ倒レ、瞬時ニシテ鬼籍ニ入ル、亦悲ム

ベシ、但シ其擒獲セラレタル婦女及糧車ニ至リテハ、帖木兒命シテ、十夫、
毎ニ一士ヲ募リ、以テ之レカ護衛ニ充テタリ、亦以テ蒙古軍ノ提携セル
糧餉及抄掠物件ノ饒多ナリシヲ知ルコ足ル。

帖木兒ハ、ルニテ發シテ東進シ、諸將ヲ會シテ兵法ヲ論シ、此ノ如キ機會
ニ於テ、敵コ克ツニハ、如何ナル方畧ヲ施シテ可ナルベキ乎ヲ討議セリ、
然シテ後チ兵ヲ旋シテ再々ビ特里ニ向ヒ、千三百九十九年、一月一日チ
以テ該府ニ達シ、茹牟那河ヲ渡リテ陣セリ、是レニ於テ蒙古兵ハ、例規ニ
由テ敵ノ襲撃ヲ察メ、露營ノ周圍ニ溝ヲ鑿リ、又柵欄ヲ設ケテ樹枝草葉
ヲ纏絡シ、柵後ニ野牛ノ四足ヲ縛シ、且ツ之レヲ連結シ以テ其軀觸行動
ヲ妨ケ、更ニ干盾ヲ駢列シテ、出入ヲ戒メ、然ル後チ始メテ帳幕ヲ張レリ、
印度蘇爾丹馬毛度ハ、意ヲ開戦ニ決シ、特里ニ出テ、蒙古軍ニ當レリ、馬
毛度ノ督スル所ハ騎兵一萬、步兵四萬ニシテ、特ニ屬スルニ無數ノ象群
ヲ以テシ、軍裝最モ美麗ヲ盡シタリ、象ハ厚革ヲ以テ、全身ヲ蔽ヒ、以テ羽

箭及槍劔ヲ防キ、其大牙ニハ、毒ヲ施セル大刀ヲ裝ヒ、且ツ背上ニ小樓櫓
ヲ設ケ、投石手及弓手等ヲ其中ニ挿入セリ、又兵士象群ノ間ニ立チ施火
セル樹脂或ハ石腦油壺ニ樹脂及石腦油壺ハ、今日ノ榴彈及「ブランド
スクリーゲル」彈ノ類ニチ投シ、又鎮鏃火箭ニ火箭ハ、榴彈ヲ具セル「コ
ングレフ」火ト大同小異ナリニチ乱射セリ、
シエレフエツザンノ説ニ據ンバ鐵鏃火箭ハ、地ニ墜
チテ破裂シ、其聲耳致チ穿ツ、
疾雷ノ如クナリシト云ヘリ。
時ニ帖木兒ノ部兵ノ恐レタルハ、其新奇ナル武器ニ非ズシテ、却テ象群
ニアリシナリ、帖木兒之ヲ知リ早ク其妨害ヲ去ラント欲シ、左ノ如キ號
令ヲ下セリ、

- 一、象群進ミ來ルキハ、其脚間ニ投スルガ爲ニ、鏃把ヲ製セヨ、
- 一、象群ヲ驚カシ、其列伍ヲ乱サンカ爲ニ、野牛ニ一説ニハ駱駝、
ノ頭部及腹部ニ尖針アル樹枝及施火セル木脂皮ヲ結束シ、敵陣ニ
向テ之ヲ驅逐セヨ

一、兵士ハ、羽箭ヲ乱射シ、且ツ刀槍ヲ以テ象鼻ヲ斬ルヲ主眼トセヨ、但シ、象ハ、堅牢ナル獸革ヲ以テ全身ヲ蔽ヒ、刺撃ニ便ナラザルヲ以テ、勉メテ刀槍ヲ口鼻ニ加ヘヨ、

此令ノ一タヒ下ルヤ、兵士ノ勇氣大ニ倍蕪シ果シテ能ク大功ヲ奏シタリ、是レ實ニ將帥ノ兵士ヲ駕馭スル所以ノ好手段ナリ、馬毛度ノ戰隊ハ、右翼本軍、左翼ヲ以テ偏成シ、象群其前面ニ列シタリ、帖木兒ハ、例ニ依リ、戰隊ヲ二列ニ組成シ、屬スルニ本軍ヲ以テシ、先ツ側面ニ於テ戰ヲ開キ、兩軍叱咤奮戰シ、勝敗互ニ決セザル時ニ當テ、特里ノ守將シヤクマンスルハ部下ノ兵ヲ率ヰテ、直往突進ノ蒙古軍ノ本陣ヲ衝キシガ不幸ニシテ帖木兒ノ一子ノ殪スル所ト爲レリ、己ニシテ蒙古軍敵ノ象群ニ向テ追撃シ、其鼻口ヲ截テ之ヲ走ラセシカバ、象群ハ、咆哮在奔、反テ馬毛度ノ戰隊ノ兩翼ニ突入シ、向フ所抵觸踐蹂セザルハナク、隊伍大ニ乱レタリ、帖木兒之ヲ親ヒ、直ニ進撃ノ號令ヲ本軍ニ傳ヘ、更ニ象

群ニ突入シ、其大半ヲ殪シ、全ク敵ヲシテ敗走セシメ、尾メ特里府ノ壁下ニ薄ル、帖木兒機ニ乘シテ特里ノ防禦線ヲ視察シ、兵力之ヲ略取スヘキ否ヤヲ察スルカ爲ニセリ、然ルニ馬毛度ハ翌夜竊ニ後門ヨリ遁逃シタリ、是ニ於テ特里ノ府民ハ一月四日戰ハズシテ降り、蒙古軍縱ニ之ヲ掠奪セリ、特里己ニ陥サリ、復タ抗敵ヲ試ムルモノナキヲ以テ、帖木兒ハ岡噶江ニ向ヒ、是レヨリ喜馬拉山ノ南麓ヲ繞リ、其軍ヲ旋セリ、是時ニ方リテハ、蒙古軍、專ラ掠奪屠戮ヲ事トシ、地方ヲ蹂躪スルノミニシテ復タ著ルシキ戰爭ヲ見ズ、帖木兒ハ、某酋長ニ命スルニ、茹牟那河ヲ遡リテ、各地ヲ蹂躪シ、希伯來人ヲ屠戮スベキヲ以テシ、親ラ兵ヲ帥ヰテ岡噶江ニ向ヒタリ、己ニ該河ニ到リ、一部兵ヲ對岸ニ遣ハシ、身ヲ本軍ニ督シ、河ヲ遡リ進ミテトクロクヌル府ニ達シタリ、適々希伯來人四十八隻ノ舟筏ヲ假リ、岡噶江ヲ運行スト聞キ、遽ニ兵ヲ分遣シテ之ヲ追撃セシム、而シテ其

兵士ハ外勢ノ猛烈ナルヲモ願ミズ馬ヲ以テ流ヲ乱シ或ハ羽箭ヲ發シテ敵ヲ殺射シ或ハ舟筏ニ迫リ刀ヲ揮ヒテ襲撃セリ希伯人錯愕狼狽シテ措ク所ヲ知ラズ其舟筏ノ大半皆蒙古人ノ爲ニ奪ハレタリ

蓋シ帖木兒遠征ノ本旨ハ回々致擴張ニアリト公言セリト雖モ專掠奪ニ在テ他意ナキニ似タリ今試ニ之レカ一例ヲ舉ゲンニ帖木兒一日岡噶江ノ對岸ニ於テ印度軍ノ步騎一萬許集合セルヲ窺ヒ自ラ手兵千騎ヲ率キテ河ヲ渡リ之ヲ擊テ走ラシタリ當時帖木兒ノ旗下ニアルモノ終ニハ僅ニ一百騎ニ過キズシテ此等ハ岡噶江ノ鎖鑰ト名ケ其東岸ニ接シテ聳立スル山脉ノ險隘ニ於テ敵軍ノ抗拒スル所ト爲リ勇奮苦戰セリ其他ノ兵士ハ帖木兒ノ號令ヲ奉シ駱駝牛羊及ヒ金銀粧飾品ヲ抄掠シテ之レカ警護ヲ擔當セリ時ニ帖木兒殆ント危急ナリシガ適々本軍ノ部兵疾驅シテ來リ援フニ會シ僅ニ身ヲ以テ逃ル、ヲ得タリ此戰木兒力戰シテ彼ノ險隘ヲ拔ント欲シ進撃ノ號令ヲ傳ヘタリ希伯來

人ハ險ニ據テ固守シ十分ニ抗拒セントスルノ色アリシモ蒙古軍ノ鼓聲忽チニシテ遠ク忽チニシテ近ク變化測ラレサルヲ以テ大軍ノ來リ襲フカト訝リ遂ニ守ヲ棄テ奔竄シ貨物若干復蒙古軍ノ有ニ歸セリ且ツ此役ヤ軍隊一日ノ行程僅々タル里程ニ過キザリシハ以テ抄掠物件ノ饒多ナルヲ知ルニ足ルベシト云フ蓋シ帖木兒ノ意ヲ班師ニ決境ニ侵入シ又アル一シキ人叛乱セリトノ急報ヲ得タルニ由ル帖木兒モ自ラ此二報ヲ以テ印度退陣ノ口實ト爲セリ

野史氏曰ク帖木兒ガ兵隊ノ組織編成及ビ其人才ヲ用ユルノ方略古今英雄ノ企テ及ブ所ニ非ズ其能ク中央亞細亞ノ雄將悍將ヲ鍊リテ一團ト做シ雄大ナル霸業ヲ建テタルモノ亦偶然ニ非ザル也余聞ク帖木兒人ニ語テ曰ク他邦ヲ經畧スルハ猶ホ將基ノ戲ノ如シト故ニ彼レ日中ハ將基ヲ勉メ夜ニ及ビテ始メテ施政ノ手段ヲ講究セリ而シテ帖木兒カ終日演習セシ將基ハ自ラ發明セシモノニシテ其基子ノ進退ハ軍隊ノ進退ニ像ドリ一進一退必ズ其要地ヲ占メ

ザルベカラズ、故ニ帖木兒ノ將基ハ恰モ輓近ノ兵基ノ如シト云ヘリ、
 帖木兒ノ智畧雄鷹古今ニ傑出スルモノ成吉思可汗以後一人ノミ、
 (帖木兒ノ編成シタル軍隊ノ組織及ヒ英雄ヲ駕馭セシ方畧等ハ本史
 ノ掲載スヘキ限ニ非ザルヲ以テ一切之ヲ省キ後日帖木兒ノ傳ヲ草
 畧述センニ抑モ帖木兒ハ此ニ隣國ノ形勢ヲ推察スルニ概子短兵一
 許テ派セリ、而シテ其向フ所ハ沙漠ヲ以テ野ナレバ、之ニ假スニ
 以テシ、其他ハ騎兵及單歩兵ヲ以テテ野ナレバ、之ニ假スニ駱駝ヲ
 邦出ル兵ノ準備自其出點策ヲ用ヒテ對スルヤ等、總テ其君主ノ計
 策ヲ運ラセリ、又成吉思可汗ノ分遣隊ノ報知他邦ノ形勢ヲ察スル
 通商ノ便ヲ假ル、故ニ中央亞細亞各地支那印度埃及亞刺伯西里亞等
 ヨリ歐洲諸國ニ至ルマテ悉ク商隊ヲ派シ、風スルニ探偵吏員ヲ以テ
 ノ關係如何ヲ觀察シテ之ヲ具狀セリ、且ツ帖木兒ハ常ニ内外ノ旅客
 ナリ、又特ニ委員ヲ置キ任ズル所ニ商貨ノ輸出入他邦人及帖木兒
 器ヲ搜索ハシ、以テ其學士等ハ極メテ敏活ニシテ、帖木兒ニ對スル
 節ヲ其報告ニシテ、帖木兒ノ企圖スル所ニ於テ、不十分ナルモ、別ニ使
 節ヲ派シテ要報ヲ蒐集セシメタリ、其他帖木兒ハ行脚僧ニ托シテ要

報ヲ蒐集セシメ、亦多シト云フ、帖木兒ノ思慮周到ニシテ、
 帖木兒、羅保爾ノ總督幾儒爾汗ヲシテ代テブンジャブヲ鎮メシム、是
 ヨリ馬毛度特里ニ還リ、十二年ノ後、終ニ崩シ、其朝亡ビタリ、
 大臣
 度刺ナルモノ衆望ニ順ヒテ王位ニ即キシガ久カラズシテ幾儒爾汗ノ
 爲ニ亡ボサレ、幾儒爾ハ帖木兒ノ名ヲ以テ其國ヲ統治セリ、
 幾儒爾ノ子孫千四百七十八年其國ヲ阿富汗人毘路利路提ニ傳ヘシガ
 其ノ後、三世ニ至リテ暴逆ヲ極メシカハ、勢威大ニ衰ヘ、國中獨立ヲ謀
 ルモノ踵テ接スルニ至ル、就中ブンジャブノ總督度刺路提ハ哈布爾ニ
 臻リテ帖木兒ノ後裔婆伯爾ニ見エテ、共ニ印度ニ入り、國家ヲ鎮定シ、帖
 木兒帝國ヲ興サンコトヲ請フ、是ニ於テ婆伯爾印度ニ進入セリ、
 龍潭曰、所謂猛氣吞宇宙者、
 獅殿曰、帖木兒、東洋之漢尼巴爾也、而其術畧大過之、是其所以速奏此奇
 功也、

第七章

宗教其一

釋迦牟尼ノ小傳

印度腐敗ノ時ニ當テ天一大聖人ヲ生シテ世界ノ溺ヲ濟フ釋迦牟尼佛
實ニ其人ナリ其理ハ精微ナリ其教ハ神靈ナリ其道ハ豁大ナリ印度哲
學ノ大成シテ純精ノ極ニ達シ印度宗教ノ大成シテ絶美ノ域ニ躋リタ
ルモノハ實ニ釋迦牟尼ノ力ニ賴ル

釋迦牟尼ハ一名ヲ悉達瞿曇ト稱ス迦毘羅幡卒都首圖駄那王ノ太子ニ
シテ其ノ母ヲ摩耶ト稱ス大約紀元前六百二十三年ヲ以テ(佛敎家ハ同
年以テ降誕
ト爲シ紀元前五百四十四年ヲ以テ寂滅ト爲ス泰西哲家ハ紀元前五百五
十年ヲ以テ降誕ト爲シ同シキ四百七十七年ヲ以テ寂滅ト爲ス蒙古源流
ノ說ニ據レハ夏ノ代ヲ以テ降誕ト爲シ同シキ卅二年前ヲ以テ寂滅
ト爲ス法顯法師ノ傳ニ據レハ殷ノ代ヲ以テ降誕ト爲シ同シク武乙甲
午ヲ以テ寂滅ト爲ス周書異記ニ據レハ周昭王甲寅ヲ以テ降誕ト爲シ
同シキ穆王甲子ヲ以テ寂滅ト爲セリ但シ聖點記ニ據レハ周靈王乙卯
ヲ以テ降誕ト爲シ同シキ貞定王甲戌ヲ以テ寂滅ト爲ス又一說ニ據レ
ハ紀元前五百五十年ヲ以テ降誕ト爲シ同シキ四百七十二年前ヲ以テ寂滅
ト爲ス今暫ク佛敎家ノ說ニ據ル

中部印度ノ地ニ生ル 迦毘羅幡卒都ハ波奈羅斯ヲ去ルノ東北一百
英里喜馬拉亞山ヲ距ルノ大約四十英里ナル古波那河ニ瀕ス 其出
生ニ關シタル奇事異蹟ハ種々アレモ多クハ是レ佛敎家ノ妄誕ニ出ル
モノニシテ其眞僞虛實ヲ問ハス皆取ラザルガ故ニ今マ此ニ贅セズ其
母摩耶ハ産後數日ニシテ歿ス其父ノ統御セシ王國ハ 今日本ノ標準
ヲ以テ之ヲ指示スルノ容易ナラザレモ 中印度ニ於テ重要ナル位
置ヲ占メ富ミ且ツ尊ク當時ノ仰ク所ト爲リシヲ疑フベカラザルカ如
シ
釋迦幼ヨリ温粹恭敬學ヲ國中ノ賢儒ニ受ケ稍々長シテ聰明敏達遠ク
衆師ニ超越シ軀幹雄壯ニシテ武藝ニ熟シ臂力人ニ絶レタリ年十六首
布羅不駄王ノ皇女耶素駄羅ヲ娶リシガ其妃ハ穎敏ニシテ太子モ亦深
ク之ヲ愛セリト云フ
首圖駄那王ハ其子ノ將來大名ヲ轟サントテ欲シ大器晩成ヲ望ミシガ

竊ニ以爲ラク、若シ之ヲノ世間的ノ事情ヲ知ラシムルハ其英敏ナル却テ其思想ヲ憂苦ノ域ニ傾クルニ至ンテ恐レ太子ヲノ之ヲ知ラシメザラントテ欲シ是ニ於テ宏大ナル宮殿ヲ造リ、秀潔ナル庭園ヲ設ケ佳木奇草、珍禽異獸、皆其中ニ貯ヒ、美姝麗姬ヲノ太子ニ侍セシメ其心意ヲ娛マシメントセリ、其華奢ノ景况ハ、實ニ非常ナリキ、然レモ太子ハ、心ヲ玲瓏高妙ノ天地ニ置キ、此ノ如キ歌舞ノ世界ニアリテモ其快樂ノ奴隸ト爲ラザリシナリ、此ノ如キ富貴ノ樂愉快ノ欲ハ釋迦ノ希望ニハアラザリシナリ、飄々タル春光モ鳩毒ト思ヒ、喃喃々タル鳥語モ朋友トシナラザリシナリ、而シテ釋迦常ニ謂ラク世間肉體的ノ快樂ハ皆是レ虚空タリ、暫且瞬時ノ間ニ過ギサル也。ト忽チ見ル宮中皆眠ニ就キ、更深ク燈枯レントスル時、釋迦ハ、飄然、馬ニ乘シテ宮ヲ出テ深山ニ入り、徐クニ生死ノ問題ヲ考究セント欲シ、行々アノニ河ニ至リ、其馬モ、其衣服モ、其修飾モ一切之ヲ從者ニ授ケテ王宮ニ歸ラシメ、自ラ途ヲ摩竭陀國ノ

首府ヲシヤグリハニ取り、徒步シテウムウエラノ山林ニ至リ、此地ニ於テ、婆羅門教ノ隱士ヲ訪ヒ、其徒弟ト爲リテ道ヲ學ビシモ、久シクシテ其利ナキヲ知リ、他ノ五人ヲ伴ヒ、其師ヲ去リテフウダガヤニ近キ深林ニ入り、觀念斷食ニ數年ヲ送レリ、當時釋迦ハ、一日僅ニ米粒數箇ト水トナ食スルノミ、然レモ未タ神智ノ靈源ヲ發明スルコト能ハザリシカバ、是ヨリ、再ビ山中ニ入り、菩提樹下ニ坐チ占メ、自ラ誓ヒテ曰ク、道成ラズンバ、此坐ヲ去ラズト、其夜、釋迦ハ、哲學ノ極致ヲ發明シ、天明ニ先チテ其心全ク開達セシテ、恰モ蓮華ノ開ケシカ、如ク最神智ノ光明即チ四諦朗然トシテ、其心ヲ照セリ、釋迦ハ、食料ヲ減セシカ爲ニ、却チ身體疲勞困憊ニ至レリ、已ニシテ生氣ヲ復シ、以爲ラク、靈心ヲ發泄セザルハ、決シテ身體ノ苦行ヲ以テ之ヲ致スヘカ、ラズ、須ラク、靈心ヲ發泄セザルハ、決シテ身體ノ苦於テ、一箇ノ浴シテ、再々ニ食ヲ贈リ、中ニ入レリト云フテ、釋迦、堅忍刻苦スルヲ、凡ソ六年、宇宙ノ真理ヲ看破シ、一世ノ風波ヲ洗滌セント欲シ、山ヲ下リ、教化ヲ施ス、一五十年、社會ノ上ニ真理ノ光輝ヲ發

輝セリ七十二歳ノ後ニ多ク靈鷲山ニ在テ法華ヲ説キ中道實相ノ妙理ヲ顯ハシ七十九歳ニ或ハ八十ニ稱スニ拘尸那城ニ波奈羅斯府ヲ距ルコト百廿哩ニ於テ五月水曜日ノ天明ニ當テ其子弟ニ圍繞セラレテ成佛セリ釋迦ハ自ラ其教ヲ記セシコトナシト雖モ弟子其教旨ヲ受ケテ能ク之ヲ保存シ今日ニ及ベリ

百論ノ疏ニ釋迦出時值十八智人羅什云三種六師合十八部大同小異皆以苦行爲本初六誦四韋陀中六自稱一切智即是六師後六得五神通詳此意十八人皇法師云初六從聞慧生阿蘭迦蘭等也中六從思慧生若提子等也後六從修慧生須跋陀等也此皆勒沙婆部中枝流出トアリ此ノ初六ナル阿蘭迦蘭ト云フハ所謂ル阿羅々仙人ナリ大涅槃經ノ音義ニ阿羅々此云懈怠獲通定者也又陀羅々仙有作阿羅邏古音云無醫仙也トモ見ユ又此部ニ憍陀羅仙人ト云フモノアリ是レモ大涅槃經音義ニ憍頭藍非此云懶戲子坐得非想定獲五神通飛入王宮遂失

通定途步歸山トモ憍陀伽古音云勝也亦名盛也トモアリ然ルニ此二人ナルモノハ共ニ釋迦牟尼ノ師ナルカ如シ即チ百論ノ疏ニ佛未成道時就此二人受學涅槃經云從阿羅々學無想定從憍頭藍非學非想定此二人既是佛師ト云ヘリ左レハ釋迦牟尼ガ九十五派哲家ノ學ヲ研究シテ以テ衆智ヲ集メタルヲ推想セラレタリ

釋迦牟尼カ所説ノ教ハ五時四教ニ分レテ各々其主義ヲ異ニセリ抑モ此五時四教ト云フハ釋迦三十歳ノ時成道ノ初メ寂滅道場ニ佛陀伽耶ニ於テ法身ノ大士ノ爲ニ唯一大乘ノ法ヲ説ク之ヲ第一華嚴ノ時ト名シ其後チ波羅奈國鹿苑ニ於テ因縁所生ノ實理ヲ説キ人類ノ同一平等ナルヲ示シ彼ノ有神説ノ謬妄ナルヲ四姓區分ノ非理ナルヲ明ニシ善因善果惡因惡果自業自得ノ常理ヲ説キ他ノ邪因縁無因果ノ説ヲ力破シタリ是ニ於テ婆羅門教ノ巨魁タル三迦葉舍利弗目連ヲ始メトシ一万二千ノ婆羅門教徒其過ヲ悛メ佛ノ弟子ト爲リ四

方ニ遊説シテ十二年間其教ヲ弘ム其經甚々多シト雖モ同一主義ニシテ皆小乗ノ教ナレハ其所説ノ經ヲ集メテ第二鹿苑ノ時ト名ク而シテ後ニ淨名室内ニ説ク所ノ淨名經、夷提希獄中ニ説ク所ノ經、觀無量壽佛經、楞山中ニ説ク所ノ楞伽經、忉利天上ニ説ク所ノ經、大集經、及ヒ祇陀園中八ヶ年三乘共學ノ人ノ爲ニ説キタル衆經ヲ合シテ第三方等ノ時ト名ク、——其後二十二年十六會上ニ説ク所ノ經ヲ第四般若ノ時ト名ク前ノ方等ハ大小兼學ノ教ナリ、今ノ般若ハ唯一大乘ニシテ小乗ヲ混セズ、是ヲ以テ佛門ノ子弟或ハ小乗ヲ信シ、或ハ大乘ヲ信シ、或ハ兼學ヲ信シ其小乗ヲ信スルモノハ大乘ヲ疎シシ、大乘ヲ信スルモノハ小乗ヲ棄テ兼學ノ方等ヲ信スルモノハ其両宗ノ一邊ニ偏スルヲ輕シシ、自ラ是トシテ他ヲ非トス、是ヲ以テ釋迦最後ニ法華ヲ説キテ其本心ヲ明ニセリ、子弟始メテ迷夢ヲ破リ、悉ク一佛乘ニ入ル、一佛乘ハ衆生心性ニ具スル所ノ理ニシテ方便ハ其對スル所ノ機根ニ應シテ利益ヲ施ス便宜

主義ナリ、小乗ハ彼ノ異論者——即チ佛家ニテハ外道ト云フ——ニ對シテ正見ヲ示ス所以ニシテ大乘ハ利他主義ニシテ聖人行フ所ノ大道ナリ、方等ハ大小兼用シテ自利ヲ前ニシ、利他ヲ後ニス、是レ初メヨリ大乘ニ入ルヲ能ハザルモノニ對シ、之ヲ説ク、法華獨リ對スル所ナリシテ直チ釋迦ノ本旨ヲ明ニス、故ニ之ヲ最上ノ第五時ノ教ト爲ス——蓋シ時ヲ以テ五ニ分ツモ教ニ就テ之ヲ論スレハ、四アルノミ、華嚴ト般若トハ、同一大乘ナルカ故ニ合シテ一教ト爲ス、但シ其説ノ前後アルカ爲ニ、之ヲ分テ二時ト爲ス、而シテ後世華嚴般若ヲ弘ムルヲ唯大乘宗ト名ケ、鹿苑三藏ヲ弘ムルヲ唯小乗宗ト名ケ、方等ト諸經ヲ弘ムルヲ大小兼宗學ト名ケ、法華ヲ弘ムルヲ最上乘宗ト名クト云フ、——蓋シ釋迦牟尼ノ發明シタル主義ハ、一言以テ之ヲ蔽ヘハ、因緣生ノ三字ニアリ、——從來印度ノ諸哲家、雲ノ如ク輩出シ、甲論シ、乙駁シ、理論各々一ナラズ、所行モ亦各々同シカラズト雖モ、多クハ是レ、因果ノ理ニ拘泥

シテ、天地万物ノ原因及ヒ歸處ヲ求メントセシカ爲ニ、却テ哲學ノ大本領ヲ失スルニ至レリ、然ルニ、釋迦牟尼ハ、衆說ヲ網羅シ、群智ヲ統合シ、活眼洞識、古今ヲ徹破シ、因ト縁ト相和合スルニ非サレハ、決シテ果ヲ生スルヲ能ハズト云ヘル一新主義ヲ唱ヘ、諸哲家ノ說ヲ力破シタリ、因ハ親因トテ直接ノ原因ヲ云ヒ、縁ハ疎縁トテ補助ノ原因ヲ云フ、例セハ茲ニ客觀的ニ於テ光明ヲ以テ親因トスレハ、暗黒ハ疎縁ト爲リ、因縁相和合シテ色ト云ヘル結果ヲ生スルカ如シ、釋迦牟尼ハ、此哲理ヲ四諦十二因縁ニ應用シテ以テ我空法有テ主張シ、一切ノ衆生ヲ濟度シタリ、——釋迦牟尼ガ新發明ノ主義云々一段ハ、無邊居士ノ說ニ據ル是レ吾人ノ心ヲ獲タル所アレハナリ、

初メ釋迦牟尼ノ世ニ出ツルヤ、印度ノ哲家、皆邪見ニ傾キ、私欲穢亂至ラザル所ナリ、社會ノ人心、零落慘憺ノ中ニ沈淪シタリ、釋迦牟尼起テ至道ヲ以テ教ヲ示シ、聖德ヲ以テ民ヲ化スルニ及ヒテ、恰モ大陽一輝、群妖百邪其影ヲ留メザルカ如ク、印度帝國維新ノ運ヲ開クニ至レリ、當時額訥特柯克中天竺ニ四可汗アリ、其一チ摩竭陀國ノ彬巴薩刺汗ト云ヒ、幹喇克城ニ住ス、一チ勃沙拉國ノ巴喇哈訥資達汗ト云ヒ、外沙拉城ニ住ス、一チ巴特沙拉國ノ巴喇迪岳達汗ト云ヒ、一チ曩楚織巴喇國ノ烏迪雅訥汗ト云フ、各々三十二國ヲ領セリ、烏迪雅汗ノ子班達巴汗子五人アリ、幼子魯特ノ汗雅爾隆氏ノ祖タリ、此等ノ諸國ハ、皆釋迦牟尼ノ教ニ化セラレタルナリ、

釋迦牟尼ノ世ニ出ルノ初メニ當リテ、諸派ノ弊其極ニ達シ、國人ハ更ナリ、獸類ニマテ及ボシタレカ如シ、西域記阿耶穆佉ノ下ニ大城東、兩河、交廣十餘里、東合流口、日數人、自溺而死、彼俗以爲、願求生天、當於此處、絕粒自沈、沐浴中流、罪垢消滅、是以異國遠方相趨、卒止七日斷食、後絕命トアリ、斷食ノ絶命スルニ至レルハ、即チ是レ自餓主義ノ弊之ヲシテ然ラシムルナリ、又云ク、至於山猿野鹿、群遊水濱、或濯流而返、或絕

食而死當戒曰王之天施也有一獼猴居河之濱獨在樹下屏迹絕食經數日後自餓而死トアリ事奇異ニ涉レルカ如シト雖凡亦其弊ノ極度ニ達シタルヲ知ルベシ又云ク故諸外道修苦行者於河中立高柱日將旦也便即昇之一手一足執柱端踰傍棧一手一足虛懸外伸臨空不屈延頸張目視日右轉遠乎曛暮方乃下焉若此者其徒數十冀斯勤苦出離生死或數十年未嘗懈怠トアリ是レ末派ノ徒カ獼猴ニ倣ヒテ斯ル行ヲ爲ス者ナリト知ラルト又大涅槃經ニ外道九十五種皆趣惡道トアル所ノ音義ニ外道者邪見猥雜不堪僕說所行所執各々不同今且畧舉數般以明差別所謂數論勝論執我計常五熱炙身編椽臥棘塗炭搗食翹足裸形自餓投河鷄狗等戒板衣芒草赴火投巖矯亂鬻習諸邪見無利勤苦不得解脫是故經言皆趣惡道云々トアリ此ノ如キ濁風積弊ヲ一洗シテ清明純潔ノ天地ヲ更メ造リタルハ實ニ釋迦牟尼ノ功ナリト知レバ今日佛教ノ徒ガ其功德ヲ稱讚スルモ無理ナラヌ事共ナリト

印度ニ於テ諸哲學諸神學諸宗教ノ諸道ヲ指シテ外道ト云フ一猶ホ彼ノ耶蘇教徒ノ他ノ教徒ヲ指シテ異教人ト言フカ如シ元來外道テフ語ハ四吠陀ノ論ヲ奉スル梵志ヨリ他道ヲ貶セル語ヲ佛教徒ヲ始メトシテ之ヲ倣ヒタルニ由ルト云フ然レ凡外道テフ語ハ安當ヲ欠クカ故ニ余ハ一ニ皆之ニ代ユルニ哲家等ノ名辭ヲ以テシタリ又云ク當時諸哲家ノ數陸續トシテ勝ヲテ數フベカラズ楞伽經ニハ「百八部邪見」トアレ凡過リニ多數ナリ餘ノ經論ドモニハ「九十六種外道」ト云ヘルソ多カル(說一切有部律ニ外道六師各出十六種合九十六種是也)トアリ又大毘盧遮那經ニ「三十種外道」ト云ヒ涅槃論ニハ「二十種外道」ト云モ云ヘリ斯クテ右ノ多數ハ蓋シ佛教ヲモ入レテ九十六種トハ云ヘリ即チ分別功德經ニ「九十六道之中佛以爲其最」ト云ヘルニテ知ルベシ又大集經ニ「佛教ノ事ヲ勝於一切九十五道」ト云ヘルモ佛道ヲ入レテ九十六種ノ意ナリ

抑モ釋迦牟尼ガ蓋世ノ卓識ヲ以テ印度ノ哲學ヲ大成セシヨリ印度ハ社會一新シ印度ノ文明至隆ニ達シ而シテ此文明ノ光彩四隣ニ發揮シ西ハ埃及ニ入リ羅甸希臘ニ亘リ終ニ歐洲ヨリ亞米利加ニ瀰蔓シ事載セテシリツセルノ萬國史ニアリ又東ノ方ハ中央亞細亞ヲ貫キテ支那ニ入リ終ニ我カ日本ニ來レリ亦盛ナル哉

野史氏曰ク釋迦牟尼ノ法幢ヲ振フヤ泄々者流ノ妖言妖行一世ヲ欺蔽スルヲ見テ快刀截斷空文ヲ掃蕩シ雷霆ヲ青天ニ飛ハシ龍蛇ヲ平地ニ起シ常ニ斷頭上ニニ在テ活ヲ求ム所謂ル宇宙手ニアリ万化身ニ生スルモノニ非ズヤ而シテ其識以テ百世ヲ照スニ足リ其德以テ億兆ヲ服スルニ足リ其膽以テ万夫ヲ壓スルニ足リ其畧以テ群民ヲ化スルニ足ル印度新文明ノ基礎ヲ創建シ東方亞細亞ノ精神ヲ更造シタル者ハ實ニ釋迦牟尼ガ一個好頭腦ヨリ出ツ嗟乎亦偉ナル哉歌傑爾曰ク——一代事迹ノ由テ以テ興ル所ノモノ之レヲ一世ノ本領

ト謂フ此本領ナルモノハ必ズ當世ノ哲家ニ於テ之ヲ綜ブルモノナリ——ト印度ノ本領ヲ綜ベタルモノハ釋迦牟尼實ニ其人ナリ——

獅巖曰明珠在手弄去弄來、
龍潭曰釋迦牟尼於本源上有所見、自修自行、自藏自發、自學自教、一視一聽、一言一動、一思一慮、處々無碍、在々顯靈、其切要則在乎識一字、新約書曰、由靈而生者靈也、

又曰米崙居嘗評釋迦曰、釋迦到底一大哲家、平等視一切、平等施一切、使其生于今日則亦不外于英蘭麒麟華盛東一流之人也、蓋然、

第八章

宗教其二

佛教ノ興廢

釋迦牟尼、新哲學ヲ大成シ、新宗教ヲ創建シ、改進黨主義ヲ實行セシヨリ、舊來ノ陋習、其跡ヲ絶シ、婆羅門教徒ノ如キ、靡然トシテ屈服シ、門閥ヲ以テ他ノ種姓ヲ抑壓セザルニ至レリ、然ルニ釋迦牟尼ノ滅後、佛教ト婆羅門教ノ諍論軋轢、日ニ甚シク、一轉シテ戰爭ト爲リ、印度ノ文明ヲシテ、守舊ノ域ニ復ラシメタリ、

釋迦牟尼滅後、數十年ニシテ、婆羅門ノ徒、其影ヲ潛メテ、首ヲ出ササルモノ、俄ニ起テ、佛教ニ抗爭シ、或ハ佛語ヲ變シテ己レノ主義ニ附會シ、或ハ王侯ニ游說シテ、佛寺ヲ廢セシム、祇園精舍ノ毀壞セラレタルモノ甚ク多シ、是時ニ雪山ノ二大師——商那和修、末田地——力ヲ盡シテ、佛教ヲ保維シ、婆羅門教ニ抗抵シタリ、——滅後百二十年ノ頃ニ當テ、迦多ノ明

師、内ニ起リ、阿育ノ英主國ニ出テ、共ニ明智卓識ヲ以テ、一世ヲ風動シ、力ヲ協セ、心ヲ同シクシ、婆羅門教ノ勢威ヲ挫キ、再々ヒ法幢ヲ建立シ、佛教ヲ中興セリ、阿育王天下ニ散乱セシ所ノ佛教ヲ大成シテ、之ヲ綜合シ、教規宗則ヲ一定シタリケレハ、佛教是ヨリ振興ス、——阿育王、佛舍利ヲ藏スル數万ノ寶塔ヲ建立シ、皇子摩訶因陀羅亦大ニ佛教ヲ弘布セリ、摩訶因陀羅ノ姉僧伽密多、自ラ進ミテ資財ヲ投シ、堂塔伽藍ヲ建立セリ、——今日錫蘭地方ノ土民、深ク此皇子皇女ノ遺德ニ感佩シ、オルゴット氏ノ創立シタル、祇智協會ノ會堂ニモ、亦此皇子及ヒ皇女ノ肖像ヲ掲ケタリト聞ケリ、

其後、迦多ノ五弟子各々自家ノ見識ヲ立テ、佛教分レテ數派ト爲ル、初メ上座太宗ノ兩部ヲ爭ヒ、遂ニ又十九部ニ分レテ相爭フニ至レリ、是ニ於テ乳中ニ水ヲ和シタルカ如ク、法脈漸ク微弱ナリシガ、和合ノ僧林爭論ヲ起シ、教徒中、骨肉相殘ヒ、内ハ益々乱レテ、外ハ愈々其虛ヲ窺フモノ

多ク、婆羅門、再々ヒ佛教ヲ撲滅セント欲シ、勢甚ク熾メナリ、——馬鳴、英豪ノ姿ヲ以テ、特ニ佛道積衰ノ時ニ當リテ、縱言濶歩月氏土ノ皈依ヲ得、毘羅無我論ヲ造テ、婆羅門教徒ヲ壓伏セリ、——馬鳴、明智辨才、善ク言論ニ通ズ、其始メ外宗ニ從ヒシモ、終ニ心ヲ佛教ニ回シ、一世ノ木鐸ト爲ル、——龍樹共後ニ出テ、能ク内ヲ固クシテ、外ニ當リ釋迦ノ芳ヲ繼ギ、佛教ノ光彩ヲ發揮シタリ、——龍樹ハ、南天竺ノ人ナリ、傳說ニ云ク、始メテ生レシ時ニ龍宮ニ入ルニ由テ始メテ成道ヲ得タリ、故ニ龍樹ト號ス、ト龍樹、天真秀穎、天文地理其餘ノ道術皆綜核セザルハナシ、或ハ云フ、龍樹ニ日月論三昧ニ入リ、唯法音ヲ聞テ形相ヲ見ズ、弟子提婆之ヲ識ル、曰ク、——師佛性ヲ示ス、聲色ニ非ズ、——ト龍樹乃チ法ヲ提婆ニ付シテ、復タ三昧ニ入ル、

龍樹ノ滅後、提婆其法ヲ繼ギシモ、是時ニ婆羅門ノ勢復々盛ンニ、傾軋ノ極、終ニ提婆ヲ殺シ、隨テ佛教ヲ覆滅セントシタリ、法戰連年、更々勝敗アリ、

リ己ニシテ、滅後九百年ノ頃ニ當ル、無着、天親、出テ、英邁ノ才ヲ以テ講堂ニ上大ノ彌勒ヲ請シ、小乘ノ俱舍、大乘ノ瑜迦、唯識等ノ論ヲ著ハン、婆羅門教ヲ說破シ、小乘ヲ抑ヘテ、大乘ヲ闡揚ス、是ニ於テ佛教ノ光輝復々印度ヲ炳耀セリ、——然ルニ數百年ノ間、婆羅門ト佛教トノ諍論法戰ニ亘リシモ、婆羅門教徒未タ全局ノ勝ヲ制スルニ至ラザリケレハ、遂ニ詭策ヲ運ラシ、陽ニ釋氏ノ服ヲ着シ、僞テ佛ノ弟子ト爲リ、兵ヲ興シ、國ヲ乱サント欲シタリ、彼レ謂ラク若シ、戰勝ツ時ハ自ラ王位ニ上リテ意ノ如ク佛教ヲ撲滅セン、勝ツト能ハサレハ罪ヲ釋氏ニ歸シテ王ヲシテ之ヲ制壓セシムベシト、其徒ヲ集メテ兵ヲ起シ、國王檀彌ヲシテ其術中ニ陥ラシメ、寺ヲ毀テ僧ヲ屠リ、經典ヲ燒カシム、言ニシテ印度全部ノ戰爭ト爲リ、結局佛教其敗衄ヲ取リ、聲價地ニ墜テ、教權更ニ婆羅門教ノ手ニ落ツルニ至レリ、

(釋迦牟尼ノ墳墓ハ中天竺佛陀加耶村ニアリ、其高サ大約八丈餘、其周

園大約十餘丈モアリ、其墳丘ヨリ凡ソ一丈七八尺計リコシテ、其正面ニ三尺四五寸ホトノ黄金ノ釋尊ヲ坐シ其下ニ園大ナル穴ヲ鐵ノ圓板ヲ以テ蓋フト云フ、事載セテ北畠道龍翁天竺行路次所見ニアリ聞ク佛敎徒ノ婆羅門ヨリ敗績ヲ蒙レル時ニ、婆羅門敎徒來リテ此大墳ヲ粉碎セントセシニ、其墳偉大ニシテ且ツ堅牢ナルカ故ニ、遂ニ之ヲ破壊スルコト能ハス、之ヲ塗埋シテ去リシト云フ、後チ一二有力ノ人士之ヲ補修スルモノアリト雖、其之ヲ挽回スルコト能ハス、今日ノ如ク陵夷衰廢ニ至ラシメタリ、然ルニ今ヨリ二十年前、英國女皇意ヲ「ミトロギ」古物保存學ニ盡シ、印度政府ニ命シテ此大墳ヲ掘ルコト着手セシメタリト云フ、

佛敎壞敗セシヨリ、婆羅門敎、益々其勢力ヲ逞クシタリシガ、全國ノ人民日ニ之ニ歸嚮シ、終ニ此宗ヲ指シテ「ヒンヅル」ト稱ス、即チ印度ノ國敎ト云フコトナリ、婆羅門一ニ之ヲセニズム宗ト稱シ、分レテ三十餘派ト爲リ、

皆盛ナリ、然ルニ佛敎ハ委靡敗壞ノ餘皆去テ他邦ニ入り、印度ノ文明地ニ墜チ國力亦タ萎縮シテ伸暢セザル至レリ、

野史氏曰ク、余聞ク獨逸ノ「サンヌクリット」博士オルデンブルヒハ印度ニ留學スルコト數年、印度史ヲ研究シ、其議論確實ニシテ浮泛ナラズ其說ニ曰ク、印度ハ炎熱ノ邦ニシテ禾稷ノ蕃殖ナル全世界中其比ヲ見ズト謂フモ可ナリ、是ヲ以テ人民ノ欲望甚タ充切ノ敢テ他ニ求ムルノ意ナシ、然レハ其人民ノ精神氣象ハ「チーフデンケン」的ニ傾キ内部ニ汲々トシテ他邦ニ向テ其方畧對交ノ道ヲ講スルコトヲ知ラズ、唯ダ炎熱ノ爲ニ制セラレ間暇サヘアレハ懶惰安眠スルノミ故ニ人民ノ氣力精神早ク萎靡腐敗シテ、毫モ堅固耐忍スルコト能ハズ、是其一時蔚然トシテ、光彩ヲ發シタル文明ノ精神モ亦早ク消滅シ了タル所以ナリ、即チ彼ノ「サキヤモニ」、「ブジョイスモス」釋迦ノ敎ヲ云フノ如キモ、世人ノ意想外ニ早ク衰へタルモ亦此理ニ由ルコトナカラン耶

ト野史氏曰クホルデンプルヒ氏實驗ノ語亦翫味スベシ、
獅山巖曰、人興教興、人亡教亡、

第九章

宗教其三

宗教ノ傳紹

釋迦牟尼ガ發明シタル佛家哲學ハ、高遠玄微、先賢ノ未タ發セザル所ヲ
發シ前古ノ未タ論セザル所ヲ論シ、靈妙精大ノ極度ニ達シタリ、而シテ
佛氏ノ諸哲家此哲理ヲ研究シ且ツ之ヲ應用スルニ及ヒテ各種ノ異論
ヲ其間ニ生シ分レテ數派ト爲レリ、
小乗ニ於テ、夙ニ上座太衆ノ兩部アリ、釋迦牟尼ノ滅後二百年ヨリ四百

年ニ至ル、此二百年間ニ、諸家交々異論ヲ主張シ、遂ニ分裂シ、兩部ヨリ十
八部ヲ出スニ及ビタリ、其大要、一切實有ヲ主張スル所ノ守舊的ノ論者
ト一切皆空ヲ主張スル急進的ノ論者トノ諍論ニシテ、其能ク後世ニ行
ハレタルモノハ實ニ此兩種ノ主義ナリキ、——實有論ハ即チ薩婆多部
ニシテ、同宗ニハ本論ニ六足アリ、發智アリ、釋論ニ俱舍論アリ、——又皆
空論ハ、即チ經量部ニシテ、訶梨跋摩ノ成實論、此宗義ニ同スト云フ、——然
ルニ此兩派ノ諍論ハ結局一切皆空ノ論最モ其多キヲ占メ、一轉シテ大
乘論ト爲ル、——大乘ニ於テハ、六百年ニ、馬鳴起信論ヲ作り、真如緣起ノ
法門ヲ顯ス、別ニ一經ニ依ルニ非ザレハ、之ヲ大乘通申論ト稱ス、七百年
ニ龍樹智論中論等ヲ造リテ般若ノ真理ヲ主倡シ、之ヲ提婆等ニ傳フ、即
チ大乘一切皆空論ナリ、九百年ニ、無著親シシ慈氏ノ瑜伽ヲ傳ヘ、自ラ攝
大乘論ヲ作り、其弟世親論ヲ作りテ之ヲ解釋シ、又唯識三十頌等ヲ作り
チ深密ノ奧義ヲ明ニシテ之ヲ護法等ニ傳フ、即チ大乘ノ一切實有論ア

リ。

法華、涅槃、楞伽、華嚴等ノ諸大乘哲學相繼テ印度ニ起リシト雖、凡印度ノ本國ニ於テ、大乘哲學ノ發達セシモノハ、中觀、瑜伽、即チ三論法相ノ二宗アルノミ、印度哲學小史ニ云ク、唐ノ義淨三藏ガ印度留學中、故郷ニ送レル南海寄歸傳ニ——竺土大乘、無過二宗、一則中觀、一則瑜伽、中觀則俗有真空、体虛如幻、瑜伽則外無內有、事皆唯識——ト云ヘルハ、則チ是レナリ。然ルニ、印度二宗ノ末、徒護法清辨ノ有名ナル空有ノ爭論ヲ爲スニ至リテ、印度ノ大乘哲學ハ、全ク消滅シ了レリ。

大乘哲學ハ、此ノ如ク、本國ニ於テ、消滅シタリシト雖、凡、其中央亞細亞ヲ經テ支那ニ入ルニ及ヒテ、光彩燦爛始メテ、其ノ精妙幽遠ノ域ニ達シタリキ、後漢明帝ノ時ニ佛教始メテ支那ニ入ル、其宗派概シテ十三宗アリ、又分シテ數派ト爲レリ。

扱テ其十三宗トハ、第一ニ毘曇宗、第二ニ成實宗、第三ニ律宗、第四ニ三論

宗、第五ニ涅槃宗、第六ニ地論宗、第七ニ淨土宗、第八ニ禪宗、第九ニ攝論宗、第十ニ天台宗、第十一ニ華嚴宗、第十二ニ法相宗、第十三ニ眞言宗是ナリ。

——此十三宗中、毘曇、成實ハ、即チ小乘ノ有空兩教ニシテ、三論法相ハ大乘ノ空有兩教ナリ、而シテ他ノ四宗ハ全ク印度ノ四教ヲ傳フルノミ、律宗ハ、曇無德派ノ四分律ニ據レハ、性空教ニシテ其始メハ、小乘ナルモ南山ノ本旨ハ、全ク分迥大乘ニシテ進テ唯識圓教ニ攝シ、三學圓融無碍ノ妙行ト言ヘリ、天台宗ハ、龍樹ノ主義ニ基キ、法華經ヲ以テ一宗ノ骨子ト爲シ、智論ヲ以テ一宗ノ法門ヲ解釋スル指南ト爲シ、涅槃經ヲ以テ法華ノ圓實ヲ扶ケ、大品般若ニ因テ一心三觀ノ觀法ヲ立テ、維摩仁王等ノ諸經ヲ引テ行人ノ信心ヲ增長セシメ、起信實性等ノ諸論ヲ引テ宗義ヲ助成ズ、華嚴宗ハ、華嚴經ヲ弘ムルヲ以テ其本領ト爲ス、涅槃宗ハ、華嚴ニ依リテ佛性常住ノ義ヲ明ニシ、地論宗モ亦タ華嚴ノ餘流ヲ汲ム、攝論宗ハ、法相ノ一分ニシテ禪宗ハ、直指人心、不立文字ト稱シ、即チ教外ノ別傳ナリ。

眞言宗ハ法身所説ノ密敎ニシテ即身成佛ノ秘法ナリ、淨土宗ハ聖道難行ノ外ニ、往生淨土ヲ期スル易行ノ大道ナリ、支那傳紹ノ佛敎事載セテ、支那帝國史前篇及後篇ニアリ參觀セヨ、但シ其宗義ノ概要及ヒ師資相承ノ沿革如何ハ、別個論題ニ付キ之ヲ本篇ニ挿入セズ。

近古ニ及ヒテ、西藏ノ喇嘛敎支那ノ内部及外部ニ蔓衍シ、之ヲ黄敎ニ號ス、黄衣派ト稱シ、古來ノ佛敎ヲ青衣派ト稱セリ、支那ノ本部ニ行ハルハ、概テ雲南、四川、甘肅、陝西、直山西隸等ノ諸省ナリ、同派ハ、宗敎律ノ名ヲ立テ、臨濟、曹洞ノ禪家ヲ以テ其宗義ト爲シ、華嚴、天台、法相ヲ以テ其敎ト爲シ、四分ヲ律トシ、各寺大約テ此三体ヲ具セリ、

佛敎ノ日本ニ入リタルハ、欽明天皇ノ十三年ニ當テ、百濟ヨリ佛像及經論ヲ貢シタル時ニ始マル、其後テ佛敎殷ニ興リ、其ノ宗派分レテ十數種ト爲ル、其中ニ就テ俱舍成實律法相三論華嚴ト所謂ル南都ハ六宗トシ、以テ上古ノ宗ト爲シ、天台傳敎大師桓武天皇延暦二十三年、支那ニ入

リ、道邃和尚及ヒ行滿座主ヨリ天台ノ宗義ヲ學ビ、又順曉阿闍梨ニ遇ヒテ密敎ヲ受ケ、又儵然禪師ニ參シテ禪學ヲ傳ヘ、復タ道邃和尚ニ遇ヒテ菩薩戒ヲ受ケ、同キ廿四年歸朝シテ之ヲ叡山ニ弘メ、延暦寺ト名ク、是ヨリ先キニ鑑眞和尚來朝シテ天台ノ敎觀ヲ傳フト、雖モ時機未ダ熟セズ、大師ニ至リテ始メテ一宗ヲ開ク、眞言弘法大師延暦ノ末年、遣唐使ニ隨ヒテ支那ニ入リ、青龍寺ノ僧惠果ヨリ密敎ヲ受ケ、居ルヲ三年ニシテ歸朝シ、普ク諸國ヲ巡リテ其敎ヲ弘ム、弘仁七年、始メテ紀伊ノ高野山ヲ開キ、金剛峯寺ヲ建テ、眞言宗ヲ興ス、一宗ヲ以テ中古ノ宗ト爲ス、日本ノ天台ハ、支那ノ天台ト稍々異ナル所アリテ、圓密禪戒ノ四種ノ法門ヲ相承セリ、蓋シ智者大師ノ遺敎ニ、密禪ヲ加ヘテ、一和合宗ト爲スモノナリ、眞言ハ支那ノ宗旨ト同シト雖モ、却テ其出藍ノ妙アリ、禪宗、華嚴、西禪師、文治年間、支那ニ入リ、万年寺ノ僧懷敏ニ從テ禪學ヲ受ケ、歸テ之ヲ唱フ、ハ其流派頗ル多キモ、之ヲ大別シテ臨濟、曹洞ノ兩宗ト爲ス、淨土宗、法然上人

之ヲ唱フ、及ヒ眞宗、見眞大師ヲ以テ開祖ト爲ス、ハ各々其宗義ヲ異ニスルモ、道綽善導ノ宗義ヲ傳フルハ、則チ一也、日蓮宗、日蓮上人、身延山ヲ開キ、始メテ此宗ヲ新立ス、ハ天台ノ圓密戒ノ三種ニ據リテ別ニ一頭地ヲ出シタルモノナリ、此外ニ一遍上人ノ時宗、良忍上人ノ融通念佛宗ヲ合シテ近古ノ宗派ト爲ス、

西藏ノ喇嘛教ハ、唐ノ時ニ當テ贊普^{ツァンペン}之ヲ興シ、元ノ世祖忽必烈ノ時ニ當テ發思巴^{パズパ}ナルモノ、大ニ世祖ノ寵眷ヲ受ケ、紅教ヲ創建セリ、(紅教ハ舊教ノ名ナリ、蓋シ紅黃ハ、袈裟ノ色ニ依レルモノ歟、明ノ永樂中、宗喀巴、紅教ヲ一新シテ、更メテ黃教ト爲ス、蓋シ舊教ハ、頗ニ秘呪ヲ尊ビ、其流弊、吞刀吐火ノ幻術ヲ行フニ至ル、宗喀巴初メ此教ヲ學ビシガ時、運ニ應ニ、舊教ヲ改良スベキヲ看破シ、幻術及ヒ小乗ヲ斥ケ、見生度生ヲ以テ喇嘛教ノ綱要ト爲セリ、此教ハ、蔓衍シテ、支那ノ四蒙古、——漠南、漠北、漠西、青海——西藏、——前藏、中藏、後藏、阿里——及ヒ東三省——盛京、吉林、黑龍——

等十ノ七八ハ、皆黃教ナリ、

佛教ノ錫蘭ニ傳説セシハ、阿育王——即チ阿輸迦ナリ——ノ子摩訶因陀羅即位ノ後、出家シテ佛教ヲ弘布セシニ始マル、當時錫蘭王、摩訶因陀及ヒ其隨行ノ僧侶六名ヲ厚遇シ、自ラ率先シテ其弟子ト爲ル、又摩訶因陀羅姉、僧伽密^{サンケツミ}モ亦篤シ佛教ヲ信シ、其後チ數多ノ比丘尼ヲ伴ヒテ、此地ニ來リ、婦女ヲ教化セリ、是ヨリ先キ(紀元前三百〇七年)デハナンビヤ、タイサ——神悅——佛教ヲ撲滅スルニ盡力セシガ、此ニ至リタイラ王、亦其遺志ヲ奉シ、大ニ佛教ヲ攻撃セリ、其後チ(紀元前百六十四年)ニダツサガマニヌ王、佛教ヲ興シ、大金殿^{グレート・ゴールド・テンプレ}大伽藍ヲ立テ、廢塔ヲ修メ、荒園ヲ復シ、佛寺ヲ作ル、千六百本ノ花崗石ヲ交叉シテ建築セシ精舎ノ如キハ、頗ル宏大雄壯ヲ極ム、又「ルアンメラ」ト云ヘル塔ヲ作りシ當時ハ、二百七十呎ナリカ、現今ハ頂針折レテ百八十二呎ノ高サナリト云フ、錫蘭ニ行ハル、教法ハ、小乗ニシテ四諦五蘊等ノ法門ナリ、——暹羅、緬甸、安南

等ノ佛教ハ粗ホ錫蘭ト同一ナリ、

(陽蘭ハ南北二百七十里、東西百三十七里、面積二万五千四百方里ノ一
小嶋ナリ、人口總計凡ツ二百七十五万九千七百人ニシテ、其中讀書ヲ
知ルモノハ男三十九万六千四百二十八人、女三万八千十三人、其他ハ
不文ノ民ナリ、此中佛教ヲ奉スルモノ、男八十八万八千三百五十七人、
女九十万九千七百十三人ナリ、又ヒンドース教ヲ奉スルモノ、五十九
万五千人、回教徒、十九万八千、基督教徒、二十六万八千人アリ、此人種ハ
凡ツ七種ニ分レテ、土言亦一ナラス、其シンハリス族ハ多ク、佛教ニ歸
シ、他彌爾族之ニ亞ク、然レモ佛教ヲ信スル他彌爾族ヨリハ、基督教ヲ
信スル他彌爾族ハ五倍ノ數ナリト云フ、)

(又云ク、古昔支那唐ノ時代ニ、印度ニ至ル路ニツアリ、其一ハ即チ長安
ヨリ隴西ニ出テ、玉門陽關ヲ經テ流沙ヲ涉リ、南山ニ沿ヒテ西シ、葱嶺
ヲ越テ北印度ニ至ル、支那晋ノ時代ニ、法顯惠生等、北印度ニ至ル、此路

ニ由ル、闍ク、法顯ノ印度ニ入ルヤ、印度ヲ指シテ月ト稱セリ、蓋シ當時
印度ノ文明其隆盛ニ達シ、光輝皎々タルヲ恰モ明月ノ如クナルヲ以
テナリ、印度テウ字ハ月ヲ意味スルト云フハ、蓋シ此ヨリ稱セシナル
ベシ、彼ノ内法傳ニモ、印度説之爲月、雖有斯理、未是通稱、五天之地皆曰
婆羅門トアリ、其餘ノ書ニモ、印度ヲ以テ月ト云フナシ、唐書地理志
ニ云ク、安西ノ西關ヲ出ルヲ數千里ニシテ、疏勒ヲ渡リ、葱嶺ニ至ル云
云トアリ、又其一ハ長安ヨリ蜀ニ入リ、羅越ヲ過キテ東印度ニ入ル、唐
書地理志ニ云ク、西ノ方、永昌故郡ニ至ルヲ三百里、又怒江ヲ渡リ、諸葛
亮城ニ至リ、驛國境ニ入リ、(今ノ緬甸)西ノ方、黒山ヲ渡リ、東天
竺ニ至ル、凡ソ六千里許アリ云云トアリ、然レモ其蜀ヨリ羅越ヲ經テ
行ク路ハ、近シト雖モ甚ダ險峻ナリ、又隴西玉門ヨリ出ルノ路ハ、遠シ
ト雖モ少シク平坦ナリ、故ニ支那ヨリ印度ニ入リタル、高僧數名概ソ
此路ヨリセリト云フ、

釋迦牟尼ノ新哲學及ヒ新宗教ハ本國ニ於テ其精神本領ヲ失シ支那及ヒ日本ニ傳紹セシヨリ大ニ其光輝ヲ發揮シタリ然ルニ後世ノ僧侶徒ニ佛祖ノ四諦十二因緣等ノ舊套ノミヲ墨守シ膠柱守株毫モ靈妙圓神ハ活機關タル哲學ヲ實地ニ適用スルコトヲ知ラズ終ニ佛家哲學ヲシテ衰殘腐敗復タ振フベカラザルニ至ラシメタリキ願フニ將來善ク之ヲ活用シテ以テ大作用ヲ爲スモノハ其人ヲ俟ツノミ

野史氏曰ク佛家哲學ハ方法一理ニ歸シ一理方法ヲ攝ス其至靈至妙淺識ヲ以テ之ヲ窺フベカラズ——小乘俱舍ハ理學ヲ包含シ大乘中唯識華嚴天台等ハ純正哲學ナリ而シテ淨土ハ純粹ノ宗教機關ヲ具備セリ空ヲ談スルハ實體論物ノ實體眞アリト立テ理學ニ万象ノ變化ハ分子ノ離合ノ因緣ニ由テ生スナリ俱舍極微ハ化學ノ所謂ル元素ニシテ唯物論ニ似タリ大乘唯識ノ森羅諸法唯識所變ト立ルハ唯心論ニ似タリ天台眞如緣起ハ論理學ニシテ眞如ノ奧義ハ斯比諾沙ノ

本質論、歐傑爾ノ絕對學ナリ、又三世實有、法体恒有ト立テ、五蘊ノ法体實ニアリト執スルハ、實體論也之ヲ要スルニ、佛家哲學ノ本義、廣大精微ニシテ、一半ハ是レ哲學、一半ハ是レ理學、一半ハ是レ宗教ナリト評セシノミ

獅巖曰雲烟消處山色猶青

龍潭曰滿目僧侶皆俗矣、達磨禪師果何在

第十章

文學及美術

上古ノ印度人ハ最モ發達シタル言語ヲ有セシカバ其書籍ノ如キモ後世ニ傳ヘタルモノ甚々多シ、而シテ就中最モ古キモノヲ韋陀(Veda)ト

稱シ、大約紀元前二千年以前ニ編成セラレタルモノヨシテ婆羅門ノ經典ナリ、韋陀トハ梵語コテ明論若クハ智論ト譯ス、即チ哲學ナリ、(一)哲學トハ、英語コテ斐魯蘇非ト曰フ、本ト是レ希臘語ニ係ル、斐魯ハ、求ノ義、蘇非亞ハ、智ノ義ナリ、希臘ノ哲家比太哥羅斯ノ首創スル所コシテ後チ詭辨ノ徒、自ラ蘇非士多ト稱ス、即チ智者ト謂フナリ、後チ哲學ヲフ語ト爲ル梵語ノ韋陀ト暗ニ其字義ヲ同シクス、亦奇ト謂フベシ、(二)印度ノ諸書ニ吠陀、皮陀、薛陀、園陀、吠駄、鞞陀、違陀、毘陀、婆陀ナド記セリ、言ノ義ハ密嚴經音義ニ「吠陀梵語也、此譯云明論、謂壽祀平術、名四吠陀」ト見ユ、大涅槃經音義ニ「四吠陀、此云四明論、有十萬頌、西方所重、明四種法」トアリ、名義集ニ「吠陀此云智論」トモ言ヘリ、

四韋陀ハ、一ニ壽、(一)養生繕性醫方ノ諸事ヲ謂フ、(二)祠、(二)享祭、祈禱、事火、懺悔ノ諸事ヲ謂フ、(三)平、(三)禮儀、占卜、兵法、軍陣ヲ謂フ、(四)術、(四)異能、伎數、禁咒、符印ヲ謂フ、(五)左レハ此書ハ養生醫方

ノ諸事ヨリ、享祭祈禱、事火懺悔、事火ノ法ヲ修シテ罪滅スト云フ、ハ婆羅門教ノ法ナルベシ、(一)法ヲ行ヒ、禮義即チ射御、音樂、冠婚、葬祭ノ事ヲモ含ムトモ言ヘリ、(二)占卜、兵法、軍陣ヨリ、異能、伎數、異能及伎ハ、種々ノ巧藝、伎術ヲ云ヒ數トハ、算數、曆術、算學ヲ云フ、禁咒、符印ノ道ヲ明ニシタルモノナリト知ラル、

此四韋陀ナルモノハ、婆羅門ノ經典ナレド、未ダ作者ノ名ヲ詳ニセス、或ハ云ク、梵天ト云ヘル人アリ、禪道ヲ修學シテ、大知見アリ、一園陀ヲ造リテ流布教化セリ、其後チニ、仙アリ名ケテ、白淨ト曰フ、世間ニ出テ、四韋陀ヲ造ル、一ニハ讚誦、二ニハ祭祀、三ニハ歌詠、四ニハ禳災是レナリ、(摩登伽經ニ據ル、但シ金七十論ニハ初從梵王乃至仙人、說四園陀)トモ、聖教名聖言者如梵天及摩菟王所說、四園陀及證論トモ云ヒ、衆經音義ニ「此四鞞陀、是梵天所說、梵天孫毘耶婆仙人、又作八鞞陀」トモ言ヘリ、又大毘婆沙論ニ「契經說古昔婆羅門造明論者、呪術者上首有十、一類瑟樛迦、二婆莫伽、三婆

莫提婆、四毘濕縛、蜜多羅、五閻、莫鐸、耆尼、六耆耆羅、七跋羅、墮闍、八婆、死、瑟、據、九伽、葉、波、十勃、栗、瞿、如是等諸婆羅門、世雖尊敬、皆不度疑而命終トモ見エタリ又摩登伽經ニ次復有一婆羅門名チ弗沙ト曰フ其子衆二十有五於一園陀廣分別之即便復爲二十五分次復更有一波羅門名曰鸚鵡變一園陀爲十八次復更有一婆羅門名曰善道其弟子衆二十有一亦變一園陀爲二十一分次復更有一婆羅門名曰鳩求變一園陀以爲二分二變爲四四變爲八八變爲十如是展轉凡千二百十六種トアリ是レニテ四韋陀ノ經典ハ多ク次第ニ成リ遂ニ大成ト爲レルヲ推シ量ラレタリ

四韋陀經典ノ外ニ哲學、物理學、道德學、及ヒ論理學ノ書籍甚々多ク詩歌文章ノ如キハ幾ソト枚擧スルニ遑アラザル程ナリ而シテ歐洲ノ學士之ヲ翻譯シテ各國ニ傳ヘタルモノ亦數百種ト下ラズト云フ

(美術) 印度人、技術ニ於テモ最モ其精妙ヲ盡シ其進步モ亦著カリキ、天文寺アストロノミー、キル(ニ)黃金寺(ゴルダン、ツル)ニ猿寺(アツフ)ニキル

等ノ如キハ其建築ノ最モ雄麗ニシテ彫刻ノ最モ絶妙ナル世界ノ耳目ヲ驚カスニ足ル

天文寺ハ石ヲ以テ建築シタルモノニシテ其結構ノ堅牢周緻ナル歐洲諸國ニ於ケル石造ノ皇宮若クハ大學校ニ異ナルヲナシト云フ此寺ノ屋上ニ於テ天文機械十數箇ヲ陳列ス其方全ク北極ヲ原トシ組ミ建テタルモノニシテ人之ニ向フキハ一年及ヒ一月ノ日數ヨリ一日ノ時間ニ至ルマテ賢愚ヲ問ハス一目了然タラサルハナシ而シテ其機械タル皆石ヲ以テ之ヲ製造シ其大サ皆丈餘ニシテ實ニ壯大無比ナリ是レヲソシテウオールノ日時計ト爲ス時計ノ濫觴實ニ此ニ本ク

黃金寺ハ釋迦牟尼ノ存在セシ時ニ各長者等相集マリテ建呈セシモノト云フ此寺ノ屋根ハ二ツアリラ其一ハ二丈五尺餘ニシテ其周回凡ソ四丈餘アリ又其一ハ高サ一丈五尺許リニシテ其周圍凡ソ二丈餘モアリ之ヲ葺クニ黃金ノ板ヲ以テシテ其板ノ厚サ八分許リ長サ四尺餘其幅ハ一尺二三寸モアリテ純粹ノ黃金色ナリト云フ(黃金

寺ニ就キテハ、全地球上ニ於テ、二寺アルニ過キズ、一ハ即チ此「ゴルドン
ツールム」ニシテ、又其一ハ緬甸ノ藍古港ニアリト云フ——猿寺ニハ、猿
猴ノ多キヲ勝ケテ數フベカラズ、此等ノ寺ハ本ト皆釋迦牟尼ノ建ツル
所ナリト云ヘ、今日ハ悉ク婆羅門教ノ所有ト爲レリ、——蓋シ印度美
術ノ發達シタルモノハ、宗教ノ未來ニ黃金世界アルヲ説キ、之ヲシテ
人民ノ腦裡ニ浸染セシメ、以テ其現世ニ愛着スルノ念慮ヲ絶タシメン
カ爲ニ、黃金世界ノ形容ヲ寫シ出シタルニ由ルト云フ。

第十一章

貿易

上古ノ印度人ハ、亞細亞ノ開化諸國ト政治上ノ關係ヲ離レタルモノナ

ルニモ拘ラズ、貿易上ニ於テハ、非常ニ影響ヲ及ボシタルモノアリ、印度
ハ獨リ、天造物ニ豐饒ナリシノミナラズ、藝術ノ道、早クヨリ開ケ、此國民
ノ發明シタルモノ、ニシテ、精妙人ヲ驚カスモノ、鮮ナカラザリキ、金、銅、錫、
寶石、眞珠、鹽、米、小麥、木綿、砂糖、象牙、香料、辛料等ハ、土産ノ最良ナル者トス、
諸國通商ノ初メハ、蓋シ印度ト貿易セシニ始マル、印度人初メハ、陸地貿
易ヲ爲スノミナリガ、海商ノ始マルニ及テ、印度諸嶋ハ、勿論遠ク亞非利
加東岸ノ諸國ニ及ビタリ、當時未タ羅針盤ノ發明ナカリシカハ、飛鳥ノ
方向ヲ視テ航海ヲ爲シタリ、故ニ海濱ノ航路、江河ノ運漕、特ニ盛ナリシ、
陸地ハ、道路甚ク廣ク、旅舍亦櫛比シ、旅舍ニハ、土地ノ僧侶來リテ、客商ヲ
慰勞シ、其馱獸ヲ飼畜スル等ノ如キハ、極メテ惻切ナリシト云フ、
紀元前三百二十七年、亞歷山太ノ印度ヲ攻畧スルニ及ビテ、歐洲ノ地モ
亦印度ノ貨物ヲ受クルニ至レリ、亞歷山太死シ、布土列美其人アリテ、埃
及ニ在リ、歷山港ノ商業ヲ振興スルニ努力セシカハ、該港ハ、遂ニ富盛ナ

ル一大都會ト爲リ、當時希臘人ハ、南部亞刺伯諸港ニ於テ、亞刺伯商人ヨリ品ヲ購入シテ之ヲ江海西岸ノベレニコス及ヒミヨスホルモスニ陸揚シ此處ヨリ駱駝ニ積ミテ、砂漠ヲ運送シ尼羅河ノ上流ヲ下リ、運河ヲ經テ、歷山港ニ輸入ス、亞非利加ノ北海岸及ヒ地中海沿岸ノ地方ニ於テ用ヒル印度品ハ皆其供給ヲ此港ニ仰キタリト云ヘハ、印度貿易ノ盛旺ナル一斑ヲ知ルニ足ルベシ、

其後チ羅馬人ハ、四方ヲ征服シテ、自ラ印度ト貿易ヲ開キ奇巧ノ物品ヲ獲テ大ニ奢侈ノ風ヲ生セリト云フ、羅馬帝如地尼安會テ國中ニ令シテ曰ク、紅海ヨリ東方ニ航行シ、直チニ印度ニ到リテ、產物ヲ交易シ殊ニ其絹ヲ以テ若士但丁堡ニ輸入スベシ、ト紀元十五世紀ノ末造ニ葡國ノ偉人華斯哥德、噶馬ノ亞非利加ノ南端喜望峯ヲ廻リテ、印度ノ航路ヲ開キタルモ亦之レカ爲ナリキ、

印度史卷二終

印度史卷三

第三篇 近世紀

第一章

婆伯爾ノ創業 — 弗馬暗ノ繼述

婆伯爾ハ、帖木兒五世ノ孫ニシテ、蒙古種ナリ、天資勇邁、大畧アリ、印度ニ於テ莫臥爾帝國ヲ建立シタルモノハ、實ニ其人ナリ、
西曆千五百十九年、婆伯爾、哈布爾ヲ發シテ印度河ノ西岸ニ入ル、己ニシテ喀戸噶爾王其領地ヲ襲フト聞キテ師ヲ班セリ、翌年復タ印度ニ入リシガ、干達巴爾ニ敵アリト聞キテ、再タヒ歸レリ、四年ノ後チ婆伯爾復タ印度ニ入り、羅保爾ニ至リシガ、度刺汗、反テ敵ト爲リケレハ、侵地ニ鎮台ヲ置キテ都ニ還ル、幾モナクシテ、婆伯爾再タヒ一萬人騎兵ヲ率キテ印度ニ進入シ、度刺汗四万ノ騎兵ニ當ント欲シ、兩陣相對セシモ、交戦ニ及

ハズシテ和議成ル、是ヨリ印度人、欸チ婆伯爾ニ通スルモノ多カリキ、翌年四月、婆伯爾大舉シテ特里ヲ襲ヒ、激戦ノ後チ、終ニ之ヲ陥リ、度刺戦死シ、路提朝終ニ亡ブ、

婆伯爾、特里ニ入りテ、印度帝ノ位ニ即キ、莫臥爾朝ヲ建設シ、不逞ノ徒ヲ撃テ、之ヲ鎮定ス、此時知土爾王山伽——印度人——回教徒ヲ驅逐セント欲シ、拉侍普土族ノ勇士ヲ募リテ、婆伯爾ニ抗セリ、帝頗ル之ニ苦心セシモ、忽チ宗教心ヲ鼓舞シテ、將校兵士ヲ激勵セシカバ、衆皆憤激シ、熱心、猛火ノ如ク、奮戦セン、チ欲セザルハナシ、拉侍普土ノ兵士モ亦是レ猛勇無比ノ軍ニシテ、加フルニ婆羅門、教徒ナリケレハ、其勇氣争テカ回教人ニ劣ルベキ、兩軍共ニ死力ヲ盡シテ戦ヒシガ、結局回教軍ノ運命、強カリケン、印度兵終ニ敗績スルニ至レリ、是ニ於テ婆伯爾、兵チ四方ニ出シテ、特里ノ屬地ノ叛民ヲ鎮壓シ、僅々タル五年ノ間ニ、國內ヲ平定シ、勢大ニ振フ、——千五百三十年帝崩シ、年五十、太子弗馬暗位ニ即ク、

弗馬暗ニ其弟三人アリ、其長チ迦牟蘭ト曰ヒ、其次チ頻太爾、其次チ彌爾沙亞斯加利ト曰フ、先帝ノ遺訓ヲ奉シテ、迦牟蘭チ以テ本國哈布爾、及于達巴爾ノ總督ト爲ス、然ルニ印度ノ王侯、復獨立ヲ謀リ、國內大ニ乱ル、其中瞿侍刺土ノ王婆僑度爾、大ニ兵力ヲ養ヒ、疆域ヲ擴張セシガ、此ニ至テ大軍ヲ舉ント欲ス、帝親征シテ之ヲ討ツ、時ニ葡萄牙人南天竺ニアリ、婆僑度爾兵チ葡萄牙人ニ籍リ、砲銃ヲ執テ之ヲ防戦セシカ、遂ニ敗績シ、提烏ニ走ル、帝乃チ弟亞斯迦利ヲ留メテ還レリ、——勇將舍爾——其先ハ阿富汗人——婆僑爾地方ヲ併呑シテ、榜加拉ヲ攻メ、其勢猖獗甚シ、帝往テ之ヲ撃チ反テ其敗ル所ト爲リ進退維レ谷マリ、馬上ニテ河流ニ入り氣囊ヲ以テ河ヲ涉リ、賤夫ニ拯ハル、——千五百四十年、帝復々勢ヲ合セテ進ミ、船橋ヲ作りテ恒河ヲ渡リ、舍爾ト迦奴侍ノ邊ニ會戦シ、帝復々敗績シ、逃レテ河ニ至リ、馬斃レシガ適々一象ノ前ミテ來ルアリ、乃チ之ニ乘リ河ニ入ル、然ルニ象ノ驅者竊ニ惡心ヲ挾ミシチ、以テ帝之ヲ河中ニ

投シ、寺人ヲ以テ之ニ代ヘ、前岸ニ近ク、岸高クシテ上ルヲ得ズ、二兵士
之ヲ見テ其包頭布ヲ結ビ、垂レテ之ヲ拯フ、是ヨリ帝其二弟ト共ニ亞瞿
羅ニ歸リ、財寶ヲ集メテブンジャブニ走ル、

沙爾王ト稱シ、善政ヲ施シテ民ヲ懷ク、此時弗馬暗ハブンジャブニ入テ
弟迦牟蘭ニ頼ントセシモ、迦牟蘭已ニ沙爾ト和シテ之ヲ拒ミケレハ、弗
馬暗、身度ニ至リ、百方苦心シテ舊業ヲ恢復センヲ勉ム、帝此地ニ於テ
一美人ヲ娶リ、其名ヲ嬌彌太婆奴ニ榮華女子ト云フ、弗馬暗身度
王希仙ニ親族ニ投セシモ、志ヲ得ズ、快々トシテ沙漠ヲ涉リ
約度布爾ニ赴ク、途上皆渴シ從者多ク死ス、然ルニ約度布爾王之ヲ納レ
ザリケレハ、復タ沙漠ヲ涉リテ亞摩羅拘多ニ不死城ニ至ル、其王
羅那波爾沙度厚ク之ヲ遇ス、是ニ於テ皇后、亞克婆爾ヲ生ム、時ニ千五百
四十三年十月十四日ナリ、己ニシテ波斯王他麻斯ニ投シ、一萬四千ノ騎
兵ヲ以テ之ヲ助ク、是ニ於テ弗馬暗兵ヲ進メテ干達巴爾ヲ略シ、哈布爾

ヲ取リ、十年間、悉ク阿富汗ノ領地ヲ平定シ、千五百五十四年十二月、一萬
五千ノ騎兵ヲ率キテ、印度ニ侵入セリ、此時印度ニ於テハ、舍爾已ニ卒シ、
王侯蜂起シテ復々寧日ナカリシカハ、弗馬暗、其機ニ乗シテ急ニ突進シ、
翌年六月終ニ舍爾ノ阿富汗朝ヲ亡ボシテ再ダヒ莫臥爾朝ヲ復興シ、國
内ヲ平定ス、翌年一月帝崩シ、亞克婆爾嗣キテ帝ト爲ル、

獅巖曰、虎兒食牛、婆伯爾不愧爲帖木兒之孫矣、
龍潭曰、婆伯爾、有將略、有將才、今日印度、果有此人乎、則何患其不獨立哉、

第二章

亞克婆爾ノ政畧

亞克婆爾、帝位ニ登ル時、年十四、帝天資英明、大略アリ、悉ク北中兩天竺ヲ

征服シ、尋テ南印度ニ入り、大ニ其疆域ヲ擴張シ、天下ヲ統一シテ善政ヲ施セリ。

亞克婆爾帝ハ、智勇兼備ノ英主ニシテ、善ク治体ニ通曉シ、不世出ノ才識ヲ以テ、非常ノ改革ヲ施シ、古來回教徒ノ背信者トシテ蔑視スル所ハ、印度人ヲ登庸シテ回教徒ト共ニ樞要ノ地ニ並立セシメ、治安ハ長計ヲ確定シテ、大ニ民心ヲ收攬セリ、今マ其政略ノ要領ヲ見ルニ、亞克婆爾嘗テ臣僚ニ命ジテ精細ニ國中ノ田畝ヲ量リ、然ル後、各毗伽^{ビハ}ニ我ニ段十歩餘ニ當ル^ルヨリ收穫ノ中數ヲ量リテ、耕者ガ政府ニ納ムル租税ノ配額ヲ定メシム、其方法ハ、先ツ地味ノ厚薄ニ隨テ、田地ヲ三種ニ分テ、各種ノ田ニ就テ、一毗伽ノ平均收穫ヲ量リ、其三收穫ヲ比較シテ、之レガ中數ヲ取リテ、一毗伽ノ收穫ト定メ、其收穫ノ三分ノ一ヲ以テ田租ノ額ト爲シテ之ヲ政府ニ取ル、然レモ若シ耕植ヲ休スル時ハ、之ヲ閑田ト爲シテ、之レカ田租ヲ徵收セズ、又水害ヲ蒙リタル田、或ハ三年前荒蕪ニ委シ

テ再耕ニ其費用ヲ要スルモノハ、初年ハ、租税五分ノ二ヲ取リ、次年ハ、五分ノ三ヲ取リ、其次ノ二年ハ、五分ノ四ヲ取リ、第五年ニ至リテ始メテ其全額ヲ徵收セリ、但シ此等ノ租税ハ、多クハ金ヲ以テ納ムルヲ法トセマカバ亦之ヲ金ニ換フルノ法アリ、其法ハ各鄉村ニ就テ田畝ノ丈量以前ノ十九年間ノ平均市價ヲ量リテ之ヲ決定ス、而メ爾後十年間ニ收穫ノ中數ヲ量リテ、田賦ヲ改定スルヲ例ト爲ス、摩督ノ律例ニ據レハ、古時ハ、土地ノ肥瘠ニ隨ヒテ收穫物ノ十二分ノ一、八分ノ一、六分ノ一等ヲ納レルモノナリシガ、舍爾王之ヲ改メテ收穫物ノ四分ノ一ヲ取ントセリ、然ルニ亞克婆爾ハ更ニ之ヲ改革シテ終ニ三分ノ一ト定ム、帝ハ之ト同時ニ、其他ノ諸税ヲ廢シ、又官吏ノ民ヨリ取ル所ノ賄賂ヲ禁シ、大ニ之レカ用ヲ節シタリケレハ、人民ハ、三分ノ一ヲ以テ、尙ホ輕シト爲セリト云フ、一又印度ハ、上古ヨリ衆多ノ聚落ニ分レテ、其區分、帝ノ時ニ至ルマデ變易セザリキ、而シテ其鄉村ニハ、鄉長、主簿、防衛人等アリテ、其事務ヲ辨理シ、

此等ノ人ハ、時アリテ、縦ニ租税ノ額ヲ増シテ、自ヲ利シ、屢々農耕者ヲ惱
セシ事アリキ、亞克婆爾、其弊ヲ矯正セント欲シ、收税官ニ命シテ、郷長ニ
由ラズ、直ニ農夫ニ就キテ租税ヲ徵收セシメ、之レカ法ヲ改革セリ、
又裁判上ノ事ニ至リテモ、帝ハ己ニ印度人ヲ用ヒ、回教人ト同シク樞要
ノ地ニ立タシメタルカ故ニ、法廷ニモ亦兩教ノ判事ヲ置キ、公平ニ審判
ヲ爲サシメタリ、

帝ノ諸政、光明俊偉、國中ノ耳目ヲ一新シ、大ニ舊來ノ積弊ヲ激破シタリ
ケレハ、國人皆心服シ、農工業旺盛ニシテ、國家富強ナリキ、
帝晩年、宗教ノ駁雜ナルヲ憂ヘ、別ニ一教ヲ設ケテ以テ民心ヲ定メント
欲シ、一新教ヲ興シ、名ケテ伊羅羅教ト稱ス、當時葡萄牙人己ニ南天竺ノ
俄亞^{ゴア}ニアリテ貿易セシカハ、帝書ヲ葡國王ニ呈シテ、天主教師ヲ招キ、
カハ千五百九十五年^{シエロム}、サヒル等ノ教師印度ニ來レリ、
千六百五年十月、帝崩ス、年六十三、訃下ル、朝野人民皆哀悼セザルハナシ、

帝在位五十一年、其在世中ニハ、歲入一億四千萬圓ニ至レリト云フ、

野史氏曰ク、亞克婆爾帝ハ、帝王トシテハ、寬仁大度、和風甘露ノ如ク、人
心ヲ懷服スルノ明德アリ、政事家トシテハ、善謀能斷、國利民福ヲ圖ル
所ノ立法行政兼備ノ才略アリ、兵略家トシテハ、戰勝攻取、天下ヲ經略
スルノ膽量アリ、而シテ其自ラ新教ヲ興シ、民心ヲ収ムルノ術ニ至リ
テハ、卓越ナル敎家ノ本領アリ、嗟乎帝ノ如キハ、印度莫臥爾帝朝中、第
一ノ偉人ナル哉、

獅巖曰、惟天地之量則無限也、

龍潭曰、亞克拔爾帝、光明俊偉、稍類弗勒德力大王、噫、天生人傑、豈限東西
哉、

第三章

莫臥爾朝ノ衰頹

亞克婆爾崩シ、位ヲ太子西利牟ニ傳フ之ヲ儒般祇爾帝ト稱ス、千六百二十八年帝崩シ太子儒般立ツ、千六百五十七年王子四人相攻メ、三子敗レテ死シ、一子澳蘭具塞布、帝ヲ弑シテ自立セシガ、勇敢ニシテ武アリ、大ニ疆域ヲ廓キ、勢威頗ル振フ、是ヨリ先キニ南印度ノ麻刺加人民、起リ、次第ニ四隣ヲ蠶食シテ獨立ス、其酋長ヲ志瓦侍ト云フ、帝之ヲ征伐セシカ、終ニ之ヲ撲滅スルヲ得ズ、晚年帝國中ノ寺社ヲ焚滅シ、強テ國人ヲシテ回教ヲ奉セシメ、從ハザルモノハ、之ヲ極刑ニ處セシカバ、人心漸ク解体セントスルノ勢アリ、

千七百七年帝崩シ、三子位ヲ爭ヒ、國乱ル、長子牟亞士位ニ即キ、其後十三世ニシテ馬罕未德ニ至ル、此時德干ノ總督尼參、桀驁ニシテ王室ヲ凌グ、波斯王那提爾來リ侵シ、特里ニ入テ屠戮ヲ逞クシ、無數ノ財寶ヲ奪ヒテ

去ル、又南天竺ニ於テハ、麻刺加王侵畧セシガ、太子亞摩度之ヲ退ク、帝崩シ、太子亞摩度立ツ、帝ノ時ニ當テ、土地大ニ削ラレ、國勢益々衰フ、麻刺加王、帝ヲ虜ニシテ之ヲ廢シ、亞蘭祇爾ヲ立ツ、宰相帝ヲ抑制セシカバ、帝、保護ヲ波斯王ニ請フ、宰相終ニ帝ヲ廢シ、麻刺加軍ヲ招キ己レヲ助ケシム、然ルニ波斯王兵ヲ率キテ麻刺加人ヲ敗リシカバ、宰相帝ヲ弑シテ走ル、事西曆一千七百六十年ニアリ、

太子亞利約弗爾、逃レテ榜加拉ニアリ、帝位空虚ト爲ル、麻刺加ノ勇將婆烏ニ嬰羅門ニ來リ、太子ノ子ヲ立ツ、其後ヲ太子自ラ帝位ニ登ル、之ヲ亞蘭帝ト稱ス、然レモ徒ニ虛名ヲ存スルニ過キザルノミ、其後ヲ亞蘭帝、英人ヲ伐ント欲ノ、事敗レ、終ニ榜加拉、婆巴爾、利沙等ノ貢賦ニ、英人ニ與ヘ、英人ノ征伐セシ地ヲ以テ、悉ク之ニ與ヘタリ、是レヨリ、印度漸ク英國ニ屬ス、事皆別章ニ詳カナリ、

問テ曰ク、印度ハ亡ビタルハ、忠臣義士起テ以テ禦侮折衝ハ、氣象

チ、鼓、舞、ス、ル、モ、ハ、ナ、キ、ニ、由、ル、乎、野史氏曰ク、國ニシテ規模立
 タズンハ、忠臣義士ノ血ヲ嘔キ涙ヲ灑クモノアリト雖モ、國家ヲ救フ
 ニ足ラズ、忠臣義士ノ血涙ヲ以テ國家ヲ救フニ至ルハ、其國ノ不幸ナ
 リ、問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、土地所有權ヲ外人ニ與ヘ、形
 勢ヲ棄テ、自ラ守リタルニ由ル乎、野史氏曰ク、國ニシテ規模
 立ツキハ、土地所有權ヲ外人ニ與フルモ、何ゾ恐ル、足ラソ乎、土
 地所有ノ權ヲ外人ニ與フルカ、爲メニ亡ブルモノハ、亦之ヲ與ヘザル
 モ、亡ブヘシ、問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、外人ヲシテ居留地
 ニ割據セシメ、團結セシメ、隱然一敵國ト爲サシメタルニアル乎、
 野史氏曰ク、國ニシテ規模立ツキハ、居留地ノ制度之ヲ存スルモ
 之ヲ存セザルモ、亦問フベキ所ニ非ズ、問テ曰ク、印度ノ亡ビ
 ヲルハ、諸侯分裂、皆自ラ己レハ、心ヲ以テ心ト爲シ、私欲アルヲ知リテ、
 國家アルヲ知ラズ、對外ノ道ヲ講セザルニ由ル乎、野史氏曰ク、

規模立ダザルニ由ル乎、問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、二億万ノ
 人民ヲ打テ一丸ト做シ、鍊テ一團ト做ス所ハ、一大豪傑ナキニ由ル乎、
 野史氏曰ク、規模立ダザルニ由リ、彼ノ土地所有權ノ利

害得失如何ヲ講スルハ、政事家ノ本領ニ非ズ、居留地ノ制度如何ヲ論
 スルハ、政事家ノ本領ニ非ズ、諸侯ノ分裂、決シテ恐ルベキニ非ズ、豪傑
 ナシト雖モ、未ダ憂フルニ足ラズ、唯タ其レ規模立ダズンハ、進マズ退
 カズ、和スルカ如クニシテ、和セズ、戦フカ如クニシテ、戦ハズ、國家ヲ半
 生半死ノ中ニ投シ、自ラ亡ブルヲ知ラザルニ至ルモノナリ、趙宋ハ
 末路是レハ、規模トハ何ゾヤ、曰ク其ノ本ニアリ、彼ハ露國ヲ視ヨ、一
 千八百五十六年、黒海禁艦ノ條約ヲ破毀シタルハ、一紙ノ力ニ非ズヤ、
 其本ヲ立テズシテ、空論漫議徒ニ其末ニ汲々タルモノハ、余未ダ
 其可ナルヲ見ズ、印度ノ亡ビタルハ、其本立ダザルニ由リ、謀ラズシテ
 斷スルハ、忽必烈以上ノ談ナリ、謀リテ益々斷スルハ、比士麥以上ノ談

ナリ、謀リテ斷スルヲ能ハザルモノハ、徳川氏末路ノ幕吏是レノミ、今日果シテ其馬脚ニ倣フモノナキ乎、然レモ謀ルヲ能ハズ、斷スルヲ能ハザルハ、印度朝廷ナリ、其山河ヲ擧テ英人ニ付與スルモノニ至ル亦怪ムニ足テサルナリ。

獅巖曰、妍皮不裏痴骨、印度是己、

龍潭曰、沃土偷安、士氣灰燼、其士大夫沈於歌舞之娛而不知有大義、熱於聲色之欲而不知有大警、印度不亡而何、後之爲印度者、其亦可省魯矣、

印度史卷三

第四篇 印度覆滅記

第一章

歐亞ノ交通及東印度會社ノ設立

一、葡國人ノ東印度新航路ノ發見

骨ヲ地ニ投ス、猶然トシテ争フ者ハ、犬ノ常ナリ、天下攘々トシテ皆利ノ爲ニ往キ、天下攘々トシテ皆利ノ爲ニ來ル、其犬ト異ナル者ハ、幾希ナリ、第十五世紀ノ頃ニ當リテ、印度ニ大賢ノ君相其人ナク、紀綱益々振ハズ、元氣愈々消盡セントス、其沃土ハ恰モ是レ地上ノ美肉ニシテ、剛邁活眼ナル歐洲男子ノ垂涎スル所ト爲ル、而シテ其先ツ奇險ヲ冒シ、東印度新航路ヲ發見シタルモノハ、實ニ葡國人、華斯哥德、噶馬ヲ以テ、破天荒ナリト爲サ、ナルヲ得ズ、

印度ノ交易ニ於テ、亞歷山得利ノ通路極メテ困難ナルヲ以テ、敢往勇邁ナル歐洲ノ士民ハ、頻ニ新航路ヲ覓メテ亞細亞ニ達セシメテ勉メタルニ、皆其志ヲ得ザリキ、紀元千四百十五年ノ頃ニ當リテ、葡萄牙王約翰第一世ノ三子顯理^{（一）}モレアラワール^{（二）}（英語ニテ之ヲ云ヘハ Navigator ナリ、王子ハ熱心ナル航海家タルニ由テ此名稱アリ）數船ヲ發シテ、亞非利加ノ西岸ニ沿ヒ、新路ヲ發見セシメテ企テタリ、抑モ顯理ハ幾何學ニ長シ星學地理學ニ通シ、兼テ堅忍ニシテ大志アリ、常ニ謂ラシ、——亞非利加ノ海岸ニ沿ヒテ航行スルキハ、直チニ東印度ニ達スルヲ得ベシ——ト然ルニ初メテ派遣シタル所ノ人士、皆果サズシテ歸國セリ、時ニ二士アリ、——一人ヲコンサレス、サルコト稱シ、一人ハナリスタン、ハスト稱ス——顯理ニ誓ヒテ曰ク、發見ノ功成ラズンハ、復タ歸ラズ——ト二士亞非利加ノ海岸ニ於テ暴風ニ遇ヒ、遠ク洋中ニ漂泊シ僅ニ免ル、トテ得タリ、然レモ葡國有志ノ士民、皆航路ノ發見ニ熱心シ、更ニ屈撓スルコト

ナカリキ、

千四百六十三年王子顯理卒セシ後、葡人航路發見ノ志氣稍弛ビタリシモ、約翰第二世善ク其遺志ヲ繼キ、千四百八十六年葡人バルトレメーヌ、シアス遠征ヲ試シ、亞非利加ノ南端ヲ環リシガ、此航海中、暴風激浪ニ由テ船人強テシアスヲシテ里斯本ニ歸ラシメタリ、約翰王以爲ラシク、此航路ヲ行クキハ、必ズ印度ニ達セン——ト故ニシアスガ亞非利加南端ノ岬ヲ荒波峯ト名ケタルヲ更ニ改メテ喜望峯ト稱セリ、即チ印度ノ航路ヲ覓ムルノ望ミニ副フノ謂ナリ、シヤス航路發見ノ端ヲ開キシト雖モ其大功ノ成リタルハ、華斯、哥德、噶馬ノ力ニアリ、——千四百九十五年、約翰王歿スルニ及ヒテ、以馬努爾大帝、益々其志ヲ勵マシ、熱那ノ人華斯、哥德、噶馬ニ命シ、海船四隻、船夫百七十人ヲ率キテ、印度ノ航路ヲ發見セシム、千四百九十七年噶馬、喜望峯ヲ周航シ、是レヨリ亞非利加ノ海岸ニ沿ヒテ北ニ向ヒ、馬拉巴爾海岸ニ上陸シ、印度ノ貨物ヲ

齋ヲシテ本國ニ歸ル實ニ千四百九十九年ナリキ、——基利督勃閣龍ヲ
 亞米利加ヲ發見シタルモ、亦此時代ニアリ、奇ト謂フベシ、
 華斯哥、德、噶馬ノ印度新航路ヲ發見セシヨリ、葡國ノ航海家大志アル證
 ニシテ危險ヲ冒シ、崩濤ヲ破リテ印度ニ入ルモノ益々多シ、千五百二年
 噶馬大船二十隻ヲ將トシテ再々ヒ印度ニ航シ、直ニ甲爾加達灣ニ入リ、
 印度人ト戰ヲ開キ、之ヲ破ル、千五百五年、以馬督爾弗朗士哥、亞爾明達ヲ
 以テ葡領印度大守ト爲シ、東印度海ヲ管理セシム、亞爾明達奉職五年、英敏
 剛明ヲ以テ聞ユ、亞爾明達東印度ノ各地ニ於テ城堡ヲ築キ、亦物價ヲ定
 メ互市場ヲ開キ、回教國ノ商賣ヲ杜絶シ、屢々偉功ヲ奏セリ、二千五百五
 九年、本國ニ歸ル途次喜望峯ニ於テ土人トノ鬪争ノ難ニ死ス、——千
 五百九年ヨリ同シキ十五年ニ至ルノ間、亞爾本土、亞伯傑兒克、葡領印度
 ノ大守ト爲リ、膽智絶倫、治績大ニ顯ハル、千五百九年、亞伯傑兒克、波斯灣
 頭ニアル、惡末ヲ取ル、此地ハ、從來波斯、亞刺比亞、及ヒ埃及ノ商人ガ貨物

貯藏ノ要地トセシ所ナリ、(已ニ千五百五年亞伯傑兒克之ヲ失ヒシヨリ、千五百
 十年、亞伯傑兒克、俄亞ヲ取ル、此地ハ、港内廣濶ニシテ、且ツ風浪ノ難ナク、
 實ニ印度ノ一大埔頭ナリ、——葡領東印度ノ首府ト爲ル、——千五百十
 一年、亞伯傑兒克、復々麻刺加ヲ取ル、其他奪取スル所ノモノ甚々多シ、其
 後亞伯傑兒克大守ノ職ヲ免セラレ、千五百十五年、九月十六日病ヲ以テ
 卒ス、

獅巖曰、印度航路發見、以顯理爲破天荒、底亞斯及華哥、德、噶馬、成其功、而
 其經略之功、以亞伯傑兒克爲第一、

米峯曰、亞爾伯傑兒克將軍之航入印度灣、攻略麻刺加、臥亞、交趾等諸地
 方、以占東印度貿易樞機、事在于千五百三年、乃至十一年、於是葡國王擢
 亞氏爲印度領地之大守、氏在其職、以材幹膽略大著其名、千五百十五年
 亞氏以病、歿於臥亞焉、其後華哥、德、噶馬、以千五百廿四年、代亞氏爲印度
 葡領之大守云云、英人ウイリカム、ケートツ氏等所記如此、蓋印度航路喜

望峯測量發見通航之功、實在于華、哥、德、噶馬氏也不容疑也、雖然其征服麻刺加、臥亞、阿兒謨西等各要地、以振占葡國之權力、于當時東印度者、其功推亞爾伯傑兒克爲首云、聊錄以供參照之一端

一、蘭人ノ東印度ニ於ケル貿易

葡人ニ次テ、東印度ノ地ニ侵入シタルモノハ、荷蘭人ナリ、千五百九十四年ノ頃ニ當リテ、荷蘭ニ於テハ、ハレンツナ以テ船長ト爲シ、氷海ヨリシテ支那印度ノ海路ヲ北方ニ覓テシカタルモ、氷海ニ阻ラレテ空シク歸國セリ、其後々屢々船舶ヲ發シテ、航路ノ發明ニ從事セシメタリ、當時荷蘭ニテ、東印度通商ノ會社ヲ設ケフルレノ商會最モ名アリ、蘭國政府ハ又好多曼ナルモノ、從來葡國ノ首都里斯本ニ在リテ、東印度ノ貿易ニ從事シ、頗ル商業ニ鍊熟スルト聞キ、海舶四隻ヲ購シ、之ニ命シテ、東印度ニ航セシメタリ、好多曼、東印度ニ至リ、翌年瓜哇ノパンクムニ航シ、千五百九十七年歸國セリ、此行ヤ、未ダ東印度通商ノ志ヲ達スルヲ得サリヤト

雖此航海ヨリシテ、後來蘭人ノ爲ニ進取貿易ノ氣象ヲ發揮セシムルニ至レリ、千五百九十九年ヨリ千六百年ニ至リテ、蘭國有爲ノ商人、舊然起テ印度ニ侵入シ、貿易ニ從事スルモノ稍ク多ク、其後々蘭人ノ東印度ニ通航往來スルモノ、踵々絶タザルニ至レリ、

荷蘭ノ商人、東印度ノ通商ヲ爲セヨリ以來、其商館各々自己ノ心ヲ以テ心ト爲シ、思ヒ思ニ商賣ヲ爲セリ、然ルニ東印度ニ於テ、廣大ナル貿易ヲ爲スニ當リテハ、各自分社ノ貿易ヲ以テ、大利ヲ占メ、樞權ヲ握ルニ足ラザルヲ以テ、千六百二年、蘭政府ハ、各州ノ商館ヲ聯合シテ、東印度商社ト爲シ、特ニ東印度ニ通商スルヲ許セリ、

荷蘭ノ東印度商社ハ、益々盛ニシテ、福運愈々開クルニ至リ、千六百五年、蘭人ハンデル、ハーゲン東印度ニ航シ、葡人ヲ驅逐シ去レリ、己ニシテマテリ、亦東印度ニ來テ、荷領植民地ヲ設ケ、千六百六年、麻刺加ヲ圍ミ、葡國ノ軍艦麻刺加人ヲ援ケテ、其圍ヲ解カントセシモ、マテリ、

迎へ戰テ、大ニ之ヲ破レリ。是レヨリ東印度商社ハ、愈々隆盛ニシテ、毎歲船ヲ出シテ、其貴重ナル物品ヲ交易シ、船舶ノ運漕、絶ユル時ナク、千六百十一年、商社ニテ賣ル所ノ胡椒ハ、一万八千包ニ至レリ、錫蘭ニ於テハ、己ニ久シク、葡人ト兵戈ヲ交ヘタリト雖、千六百十二年、此地ノ貿易ハ、商人獨リ其權ヲ擅ニセリ、千八百八年ヨリ同シキ十年ノ頃ニハ、榜加刺海岸ノ甲爾加達、信地亞ノラジヤ、コロマンデル海岸ノヘルツルノ如キハ、皆蘭人交易ノ場所ナリ、而シテ千六百十六年ニ至リテハ、東印度商社、小船ヲ除クノ外、大船三十八艘アリテ、皆海戰ノ準備ヲモ整ヒタリ、千六百三十二年ヨリ同シキ四十三年ノ間ハ、蘭人、葡領ノ麻刺加及ヒ錫蘭ノ數城ヲ略シ、千六百五十四年ヨリ同シキ六十二年ノ間ハ、ヤン、マートソイナル蘭領東印度ノ大守タリシガ、葡國ノ領地概テ荷蘭ノ有ト爲レリ、是時ヨリ、蘭人ハ復タ英國人ト爭端ヲ發セリ、

當時荷蘭ノ歐洲貿易國ノ最第一ト爲リシモノハ、其海軍ノ強盛與リテ

カアリト雖、其功ノ成就セシモノハ、實ニ東印度商社ノ力ニ由ル、然ルニ商社ハ、貿易ノ利ヲ擅ニスルト同時ニ私欲ヲ逞クシ、傲慢自ラ恃ミ、將來ノ利益ヲ興スヲ謀ラザリシカハ、忽チ衰頽スルニ至レリ、

鄉巖曰、今既不如昔、後當不如今、

三、英人ノ東印度ニ於ケル會社及其勢力

閣龍ノ亞米利加ヲ發見セシ頃ニ當テ、英吉利ニ於テモ、亦新地ノ發見ニ從事シタリシモ、事成ラズシテ已ミタリキ、英王顯理八世ノ時ニ當リテ、西班牙ノ一商、ロベルト、ソルン王ニ上書シテ、印度貿易ノ利ヲ論シ、且ツ北海ヲ環リテ印度ニ達スルノ便ナルヲ主倡セシニ、王之ヲ然リトシ、ウイルビーニ命シテ、三艘ノ海船ヲ率テ北海ニ解纜セシメタレ、船ハ堅氷ニ鎖サレ、水夫皆凍死シ、僅ニ其本國ニ歸港スルヲ得タルモノハ、其一船ノミナリキ、英國ニ於テ、航海、貿易、及ヒ工業ノ進歩セシハ、女王以利沙伯ノ時ニアリ、女王ハ、北海ノ航路ハ、到底期スベキニ非ザルヲ

ヲ知リ、更ニ南西ヨリ米國ヲ廻リテ、印度ニ達スルノ航路ヲ發見セント欲シ、千五百七十七年フランス、ドレーキヲシテ此遠征ヲ試ミラシム、ドレーキ世界ヲ一周シ、印度ヲ歴テ、無事ニ歸國シタリト雖、此航海ハ四年ノ星霜ヲ費シタル程ナレハ、敢テ貿易ノ通路トシテ、其便利ヲ得ザリキ、其後ヲ英人屢々其貿易ヲ東西印度ニ擴メンコト謀リシガ、千五百九十一年英人レーモンド東印度ニ至リ、各地ニ於テ通商互市ノ條約ヲ訂結シタリ、

千五百九十九年、英國ノ商人、荷蘭ノ商社ニ倣ヒ、三万磅ノ資本ヲ募集シテ、一社ヲ設立シ、女王ノ特許ヲ得タリ、名ケテ東印度會社ト謂フ、此東印度會社ハ、蘭人ノ東印度商社ト相並ヒテ、貿易ニ從事シタリシモ、漸ク相鬩キ、反目睥視ノ極、劇戰ヲ起スニ至レリ、是レヨリ先キニ、印度在留ノ葡人等ハ、英人ガ東印度會社ヲ設立シテ、其貿易益々盛ントスルノ勢アルヲ見テ、特占ノ利權ヲ奪ハレシコトヲ恐レ

百方之レヲ妨害セシカハ、英人大ニ怒リ、ペストーナ擧ゲテ、總督ト爲シ、商船ヲ以テ軍艦ヲ組織シ、印度ノシユラット港ニ於テ激戰シ、大ニ葡軍ヲ破ル是ニ於テ、東印度會社ハ、莫臥爾帝朝ノ信用スル所ト爲リ、遂ニシユラットニ於テ一箇ノ製造場ヲ設クルコトヲ得タリ、蓋シ葡萄牙人ノ印度ニ入リシヨリ以來、大約百年間、貿易ノ大權ヲ專有シ、且ツ印度ノ内治ニ干涉シ、貿易上ノ姦詐殊ニ甚シク、弊害ノ積ム所、抵止スル所ヲ知ズ、一旦英人ト戰フニ及ビテ、其威權名望ヲ併セテ、之ヲ失フニ至リシモノ、亦怪ムニ足ラザルナリ、

英人ハ、葡人ヲ挫キシヨリ、千七百八十年ノ末ニハ、荷蘭ヲ以テ、敵國ト稱シ、數十日間ニ、英人荷蘭ノ商船二百艘ヲ奪取セリ、而シテ東印度ニ於テハ、英人復々蘭領ノ要地ヲ征畧セシヲ以テ、東印度商社、西印度會社モ同時ニ衰頹ヲ極メ、貿易日ニ廢シ、千八百十年ニ至リテ、一時其名ヲ轟カシタル東印度商社モ遂ニ自亡スルニ至レリ、初メ千六百三十九

年英國ノ東印度會社ハ、印度ニ於テ彈丸黑子ノ一小地フーグーヲ占ムルニ過ギス、其貿易ノ如キ、日ニ其擴張ヲ圖ルト雖、猶ホ未タ荷蘭ノ盛大ナルニ及ハズシテ查列斯第一世ノ時代マテハ、商船三百噸ノモノ僅ニ是レ三艘ニ過キザリシナリ、然ルニ阿力弗、格崙空奮勵シテ、貿易ノ規模ヲ擴張シ、航海條例ヲ施行セシヨリ、勢大ニ振ヒ、蘭國ノ貿易ト航海トヲ凌駕セントスルニ至レリ、此時荷蘭ハ、英國ノ海軍貿易此ノ如ク強盛ニ至ルモ、恬然トシテ之ヲ省ミズ、怠惰偷安、深ク慮ルコトナシ、是レ其俄然トシテ巨禍大患ニ遭過シ進退共ニ失スルニ至リシ所以ナリ、然レモ蘭人ノ永ク其貿易ノ利ヲ占メ、航海ノ雄ヲ爭フコト能ハザルモノハ、蘭人特殊ノ精神氣象ナク、到底諸厄路、撒遜人種ト頑頑スルコト能ハザルニ由ル。

是レヨリ先キニ、東印度會社ハ、本國ノ政府ノ讖論ニ由テ、或ハ勅許ヲ拒マレ、或ハ更ニ之ヲ與ヘラレタルコトアルニモ拘ラス、千六百年代ニ於テ

ハ依然東印度ト交通シテ廣大ナル商業ヲ行ヒ其建設セシ所ノ塵舍ハ布哇、蘇門答臘、婆羅、曼太ノ群島、巫來加、暹羅、榜加拉ノ濱岸、及ヒコロマンデルノ地方ニ充塞シ、千六百四十年、印度諸國ノ許可ヲ得テ麻刺加ニ於テセントジョルシ堡ヲ設ケ、千六百四十五年一塵舍ヲ安日河畔ノ支流フグリーニ營メリ、甲爾加達ノ市街即チ是レナリ。千六百八十八年ノ後、英國王ヨリ會社ニ與ヘタル勅許狀ノ實際ニ利益アリヤ否ヤノ疑問俄ニ起リ加フルニ、擾亂相繼キ、官吏ノ私賍等アルカ爲ニ、損耗スル所甚ク多ク、會社ハ、遂ニ其責任ヲ全クスベカラザルニ至レリ、是ニ於テ、千六百九十八年、更ニ國會議院ヨリ許狀ヲ下シ、東印度新會社ヲ設立シ、二百萬磅ヲ政府ヨリ貸與スルコトヲ定約セシム、然ルニ舊新ノ兩會社、相合ハズシテ、遂ニ之ヲ聯合セサル可ラザル勢ト爲リ、千七百二年兩社ヲ合併ノ以テ、東印度商業聯合會社ヲ建設セリ。千七百十五年英國政府ハ、使節ヲ特里ニ遣ハセシ時ニ當リタ、醫師哈美爾頓ナルモノ、其行

中ニアリシガ、此時印度帝篤疾アリ、地方ノ醫師、皆匙ヲ投シテ治メザルニ會シ、之ヲ療シテ常ニ復セシカハ、大ニ其驢心ヲ得テ、會社ハ、會社ヲ榜加拉地方ニ於テ、甲爾加達ト共ニ三十八万所ノ市街ヲ購求スルヲ許サレ尙ホ、廢業上最要ナル特別ノ權利ヲ得タルヲ以テ、甲爾加達ヲシテ一朝熱鬧ノ植民地ヲラシムルヲ得タリ、

東印度會社ハ益々昌盛ニ赴キ英人ハ愈々跋扈ノ欲ヲ逞シクスルニ及ヒテ其力殆ント印度ヲ壓セントスルノ勢アリ、然レハ、印度諸所ニ建設セル廬舍ハ其監守人ヨリ僕隸ニ至ル迄、皆其防備ヲ嚴ニシ、終ニ廬舍ノ体裁ヲ一變シテ戒器ヲ携帶セシ戍兵ノ營所タルカ如キ有様ヲ呈スルニ至レリ——然ルニ印度諸國ノ君主諸侯ハ、偷安逸居、猜忌相攻メ、目前ノ利害ニ汲々トシテ遠永ノ計ヲ知ラズ、其人民ハ、輕佻自ラ喜ビ、徒ニ外客ニ接スルヲ好ミ、一人トシテ英國植民ノ逆意ヲ察シ、其謀略ヲ未然ニ防ントスルモノナシ、是ヲ以テ終ニ英國慣用ノ手段ニ陥リテ自ラ悟

ラズ堂々タル大帝國ヲ舉ゲテ、彼レニ付スルノ己ムヘカラザルニ至レ

二

獅巖曰、以苛虐失之者葡人也、以怠慢失之者葡人也、而英人以堅忍得之、以術略成之、

龍潭曰、古人云室已焚而徙薪、舟已溺而市壺、疾已成而求艾、雖彈力爲之無及矣、印度無遠識深慮其人、不能制英人之謀於未然、噫印度之滅亡、實在于東印度會社設立之時矣、

又曰、英國殖民政略、堅固不拔、加之以英敏作用、最不可及、如葡如蘭、一時雖拓領地於海外、忽盛忽衰、到底不能傳之後世、無他以無其堅忍不拔之精神也、英國則不然、有增而無減、有盛而不衰、不亦妙哉、雖然今也、英廷勢方衰、保其殖民領地、將出于何等方策乎、